

ポケモンリーグ準優勝  
者の育て屋ライフ エピ  
ソード0

片倉政実

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

歴史的な街並みが今なお遺り、山林や河川などの自然が豊かな地方『イリス地方』。そんな『イリス地方』のポケモンリーグで優勝をするという夢を果たすため、一人の少年とその仲間達の旅が今始まる。

※本作は『ポケットモンスター』の二次創作であり、『ポケモンリーグ準優勝者の育て屋ライフ』のプロローグにあたる作品です。

※本作では、一部のポケモンがテレパシーを用いて会話を出来る設定です。

※本作のポケモンバトルは、アニメのポケモンバトルの要素を取り入れております。

例：技に対して避ける指示を出す、技と技を組み合わせるなど

以上が本作の注意事項です。

→ <https://syosetu.org/novel/185897/>

こちらから飛べる『ポケモンリーグ準優勝者の育て屋ライフ』もよろしければ読んでみて頂けると嬉しいです。

# 目次

## 番外章

キャラクター設定（人物編）―― 1

キャラクター設定（ポケモン編）

6

イリス図鑑―― 15

## 本章

第1話 到着、ロンドシティ！ 幾つ

もの新たなる出会い―― 38

第2話 イクトVSシア 運命を決め

る一戦―― 101

第3話 戦いの日と謎の観戦者

152

第4話 VS ロンドジム！ 固き鋼鉄  
の意志―― 183

## 番外章

### キャラクター設定（人物編）

#### 【主人公】

名前：イクト

年齢：10

性別：男

趣味：読書、料理やポケモングッズ作り、天体観測など

特技：どんなポケモンとも心を通わせられる事、身体の一部に触れる事でポケモンの気持ちを感じ取れる事

好きな物：甘い物、ロイ達とのふれあい、ポケモンバトル、日向ぼっこなど

嫌いな物：孤独、悪人、不自由

旅の目的：ポケモンリーグの優勝

生まれ育った『カントー地方』の『マサラタウン』から『イリス地方』の『ロンドシティ』に引っ越してきた新人ポケモントレーナー。幼い頃からポケモンリーグで優勝す

る事を目標にしており、8歳の誕生日にプレゼントとして貰ったパートナーのピカチュウのロイと共に自身の特技である『どんなポケモンとも心を通わせられる』事を使って仲良くなった野生のポケモン達と日々特訓に励んでいたが、10歳の誕生日を過ぎ、ポケモントレーナーとして旅に出られるようになった矢先、父親の仕事の都合で『イリス地方』へ引越す事になった事で、『カントー地方』ではなく、『イリス地方』のポケモンリーグの優勝へと目標を変えた。そして、引越し先の『ロンドシティ』で同じ新人トレーナーの少女であるシアと『イリス地方』全土に名が知れ渡っている大企業、『ベイカー・コーポレーション』の社長であるアーサーと出会い、共に『イリス地方』での旅に出る事になった。

性格は明るく社交的で、基本的に誰にでも分け隔てなく接する事から、人間のみならずポケモンの友達も多いが、どこか天然なところや思った事を正直に口にしてしまう事もあるため、それについてシアやアーサーから苦言を呈される事もある。

短い黒のストリートヘアに雪のように白い肌、目鼻の整った顔立ちに筋肉の付いた細身の体といった容姿をしており、旅では青を基調としたカジュアルな服装をしている。

幼い頃からどんなポケモンとも心を通わせられるという特技を持っており、相手がポケモンであれば怒りで我を忘れていたり心に深い傷を負って心を閉ざしていたりしていてもそれが可能な上、『メロメロ』などのポケモンの正気を失わせる状態異常に掛かっ

たポケモンを癒やす事も出来る事から、ロツカ博士からはこれは生まれ持った何らかの特殊能力なのでは無いかと考えられている。そして、その力の影響からか相手がポケモンならば体のどこかに触れる事で、そのポケモンが気持ちを感じ取る事が出来るが、パートナーであるロイだけは付き合いの長さから触れずとも鳴き声などから言いたい事をピタリと当ててる事が出来る。

### 【旅の仲間】

名前：シア

年齢：10

性別：女

趣味：読書、ショッピング、お菓子作りなど

能力：ポケモンの言葉を理解する事が出来る

好きな物：甘い食べ物、ラピス達とのふれあい、新しい発見をする事など

嫌いな物：悪人、孤独

旅の目的：イクトの旅のサポート

『イリス地方』にある『ロンドシティ』出身の新人ポケモントレーナーの少女で、イクトの旅の同行者の一人。

『ポケモンの言葉を理解する事が出来る』能力を持っているが、それを家族やロツカ博士以外からはあまり信じてもらえないため、他人の前ではその能力の事を隠すようにしていた。しかし、ロイ限定ではあるが同じような事が出来るイクトから掛けられた言葉によつて、その能力に対して少しだけ自信が付き、能力の事をあまり隠さないようになった。

名前：アーサー

年齢：28

性別：男

趣味：機械いじり、読書、料理など

特技：発明、利き紅茶、手品

好きな物：紅茶や紅茶味の食べ物、ポケモンバトル、シヤロ達とのふれあいなど

嫌いな物：湿気、ポケモンを大切にしない人物、曇り空

旅の目的：各地にある『ベーカー・コーポレーション』の支社の見廻り、イクト達の

旅の見守り並びにサポート

『イリス地方』全土に支社を置く大企業である『ベーカー・コーポレーション』の社長で、イクトの旅の同行者の一人。

秘書のクリスと共に会社を出たところでロツカ博士の研究所に向かっていくイクト達の姿を見て興味を持ち、クリスと相棒のピカチュウのシャロと共にその後を着いていった。そして、研究所で観たイクト達のバトルの様子から、イクト達に更に興味を持ち、自身の発明品の一つでイクト達に盗聴を行うと、そのおよそ一週間後に行われたイクトとシアのバトルを観戦した後、イクトに旅の同行を志願し、それをイクトが了承した事で旅の仲間に加わった。

趣味や特技にもある程、機械いじりや発明品を作るのが大好きで、『ベーカー・コーポレーション』の発明品の企画や設計などにも自ら参加しており、旅の中でもそれを活かしてイクト達の『ポケフォン』のアップデートや旅に役立つサポートグッズの製作も行っている。

# キャラクター設定（ポケモン編）

## 【イクト】

名前：ロイ（ピカチュウ）

性別：♂

性格：むじやき

特性：せいでんき

現在のレベル：12

好きな物：甘い食べ物（特にホイップクリームを使った物）、イクトや仲間のポケモン達、ひなたぼっこなど

嫌いな物：苦い食べ物、不自由

使用技

## 【ねがいごと】

## 【アイアンテール】

## 【ボルテッカー】

## 【ねこだまし】

イクトのパートナーポケモンで、イクトの手持ちポケモンのリーダー兼エース。

元々は、『トキワのもり』にいたポケモンだったが、イクトの8歳の誕生日プレゼントとして両親にゲットされた後、イクトにプレゼントされた事でイクトのパートナーポケモンとなった。専用のボールは存在するが、あまりボールに入るのが好きでは無い上、イクトの傍にいる事が好きなたため、ボールに入る必要がある時以外は、基本的にイクトの頭の上に乗っている。

無邪気な性格な上、悪戯好きなどころもあるが、面倒見の良い一面もあるため、イクトの手持ちポケモンのみならずシアやアーサーの手持ちポケモン達からも頼られる事が多い。

名前：レド（ヒトカゲ）

性別：♂

性格：いじっぱり

特性：もうか

現在のレベル：10

好きな物：辛い食べ物、イクトや仲間のポケモン達、ポケモンバトルなど

嫌いな物：渋い食べ物、曇り空、雨など

### 使用技

【りゆうのまい】

【ほのおのキバ】

【かみなりパンチ】

【ドラゴンクロー】

イクトの手持ちポケモンの内の一体で、イクトの手持ちポケモンの副リーダーを務めるポケモン。

通常の個体とは違う『色違い』と呼ばれる個体で、元々はリザードンの群れのリーダーの子供の内の一体だったが、一体だけ色が違う事で家族や群れの仲間達から気味悪がられた結果、生後間もなくして群れから追い出された。そしてそこに偶然通り掛かったロツカ博士に保護されたが、群れから追い出された事が心の傷となり、それが原因で研究所の誰にも心を開かず、度々脱走を行っていた。そんなある日、研究所を脱走しようとしたところで、シア達の案内で研究所を訪れようとしたイクトとロイに偶然出会った。そして、イクトから他の人間とは違う『何か』を感じ、それを確かめるためにイクト達にバトルを挑んだが、イクトとロイのコンビネーションの前に敗北した。しかし、

バトルを通じて自分が感じた物の正体を知り、イクト達ならば信じられると感じた事で、イクト達に手持ち入りを志願した。そして、それをイクト達が快く承諾し、晴れてイクトの手持ちポケモンとなった。

名前：リイル（フシギダネ）

性別：♀

性格：のんき

特性：しんりよく

現在のレベル：10

好きな物：酸っぱい食べ物、イクト達や仲間のポケモン達、昼寝、花など

嫌いな物：甘い食べ物、曇り空、無理やり起こされる事、暗闇

使用技

【つるのムチ】

【やどりぎのタネ】

【ねむりごな】

【メガドレイン】

イクトの手持ちポケモンの一匹で、オーキド博士から贈られたポケモンの内の一匹。オルタ同様、元々はイクトが『イリス地方』へ旅立つ時に贈られる予定だったが、研究所に届くのが遅れてしまった事で、イクト達の引越先である『ロンドシティ』にある『ロツカ研究所』にオルタと共に直接送られた。そして、レドとのバトルを終えたイクト達と出会い、そのまま手持ち入りを果たした。

とてもものんびりとした性質をしている上、眠る事が大好きなため、バトルの特訓や食事の時以外は眠っている事が多いが、無理やり起こされる事が嫌いなため、その際に『ねむりごな』を使って起こしてきた相手を眠らせ、自分も再び眠る事がある。

名前：オルタ（ゼニガメ）

性別：♂

性格：すなお

特性：げきりゆう

現在のレベル：10

好きな物：イクト達や仲間のポケモン達、川などの水場、雨など

嫌いな物：乾燥した場所、孤独

使用技

【バブルこうせん】

【からにこもる】

【れいとうビーム】

【こうそくスピン】

イクトの手持ちポケモンの一匹で、オーキド博士から贈られたポケモンの内の一匹。

リイル同様、元々はイクトが『イリス地方』へ旅立つ時に贈られる予定だったが、研究所に届くのが遅れてしまった事で、イクト達の引越先である『ロンドシティ』にある『ロツカ研究所』にリイルと共に直接送られた。そして、レドとのバトルを終えたイクト達と出会い、そのまま手持ち入りを果たした。

とても明るく基本的にはどんな相手にも分け隔てなく接するが、悪意などには敏感なため、その際にはそれに気付いていないフリをしながら接しつつ、相手の様子を探るなどしている。

【シア】

名前：ラピス（イーブイ）

性別：♀

性格：むじやき

特性：きけんよち

現在のレベル：10

好きな物：甘い食べ物、シア達や仲間のポケモン達、日向ぼっこなど

嫌いな物：苦い食べ物、濡れる事、泥

使用技

【かげぶんしん】

【スピードスター】

【メロメロ】

【とっておき】

シアの手持ちポケモンの一匹で、パートナーポケモンであり手持ちポケモンのエース。

シアの姉であるポケモントレーナーのリアが知り合いから貰ってきた個体で、通常の特性とは違う『隠れ特性』と呼ばれる特性を持っている。

普段からシアと一緒におり、ラピス用のボールも存在するが、ボールの中にいるより

もシアと一緒にいる事の方が好きなので、余程の事が無い限りはシアに抱き抱えられる形を取っている。

【アーサー】

名前：シャロ（ピチュー↓ピカチュウ）

性別：♂

性格：おくびよう

特性：ひらいしん

現在のレベル：66

好きな物：紅茶や紅茶味の食べ物、本、昼寝など

嫌いな物：湿気、辛い食べ物、曇りの日

使用技

【10まんボルト】

【くさむすび】

【めざめるパワー】

【でんこうせっか】

アーサーの手持ちポケモンの一匹で、パートナーポケモンであり手持ち内のエース。普段から憧れの人物が使用している物と同じタイプとして特製のパイプを咥えており、どこかキザっぽさのある話し方をしているが、本質はとても気弱で臆病なため、パイプを取られたり無くしたりすると、耳がペタンと倒れた上に目が潤み、周囲の物音やポケモンにもビクビクとしてしまうようになってしまう。しかし、シヤロ自身はとても勘が働く上、観察力なども高い事から、トレーナーのアーサーはそんなシヤロの力をとても信頼しており、何か困った事があつたり相談したい事があつたりした際には、シヤロに頼るようになっている。

イクトのレド同様、通常の色とは違う『色違い』と呼ばれる個体である上、通常の特性とは違う『隠れ特性』と呼ばれる特性を持っているかなりレアな個体だが、本人達はその事をあまり気にしていない。

N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
コク ーン	ビー ドル	バタ フリ ー	トラ ンセ ル	キャ タピ ー	カメ ツク ス	カメ ール	ゼニ ガメ	リザ ード ン	リザ ード	ヒト カゲ	フシ ギバ ナ	フシ ギソ ウ	フシ ギダ ネ	

## イリス図鑑

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
0 3 1	0 3 0	0 2 9	0 2 8	0 2 7	0 2 6	0 2 5	0 2 4	0 2 3	0 2 2	0 2 1	0 2 0	0 1 9	0 1 8	0 1 7	0 1 6	0 1 5
プ ク リ ン	プ リ ン	プ プ リ ン	キ ユ ウ コ ン	ロ コ ン	ピ ク シ ー	ピ ツ ピ	ピ イ	ラ イ チ ユ ウ	ピ カ チ ユ ウ	ピ チ ユ ー	ア ー ボ ツ ク	ア ー ボ	ピ ジ ョ ツ ト	ピ ジ ョ ン	ポ ツ ポ	ス ピ ア ー

N 0. 0 4 8	N 0. 0 4 7	N 0. 0 4 6	N 0. 0 4 5	N 0. 0 4 4	N 0. 0 4 3	N 0. 0 4 2	N 0. 0 4 1	N 0. 0 4 0	N 0. 0 3 9	N 0. 0 3 8	N 0. 0 3 7	N 0. 0 3 6	N 0. 0 3 5	N 0. 0 3 4	N 0. 0 3 3	N 0. 0 3 2
カイリキ ー	ゴ ー リ キ ー	ワ ン リ キ ー	フ ー デ イ ン	ユ ン ゲ ラ ー	ケ ー シ イ	ニ ヨ ロ ト ノ	ニ ヨ ロ ボ ン	ニ ヨ ロ ゾ	ニ ヨ ロ モ	ウ イ ン デ イ	ガ ー デ イ	ペ ル シ ア ン	ニ ヤ ー ス	ク ロ バ ツ ト	ゴ ル バ ツ ト	ズ バ ツ ト

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
0 6 5	0 6 4	0 6 3	0 6 2	0 6 1	0 6 0	0 5 9	0 5 8	0 5 7	0 5 6	0 5 5	0 5 4	0 5 3	0 5 2	0 5 1	0 5 0	0 4 9	0 4 9
ギャラ ドス	コイキン グ	ケンタロ ス	ハッサム	ストライ ク	ハピナス	ラツキー	ピンプク	マタドガ ス	ドガス	ガラガラ	カラカラ	ゲンガ ー	ゴースト	ゴース	ギャロツ プ	ポニー タ	ポニー タ

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
0 8 2	0 8 1	0 8 0	0 7 9	0 7 8	0 7 7	0 7 6	0 7 5	0 7 4	0 7 3	0 7 2	0 7 1	0 7 0	0 6 9	0 6 8	0 6 7	0 6 6
ミニ リユ ウ	カビ ゴン	ゴン ベ	ポリ ゴン Z	ポリ ゴン 2	ポリ ゴン	ニン ファイ ア	グ レイ シア	リー ファイ ア	ブラ ツキ ー	エー ファイ	ブ ース ター	サン ダ ース	シャ ワ ーズ	イー ブ イ	メ タ モン	ラ プ ラス

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
0 9 9	0 9 8	0 9 7	0 9 6	0 9 5	0 9 4	0 9 3	0 9 2	0 9 1	0 9 0	0 8 9	0 8 8	0 8 7	0 8 6	0 8 5	0 8 4	0 8 3	
デン リ ユ ウ	モ コ コ	メ リ ー プ	ト ゲ キ ツ ス	ト ゲ チ ツ ク	ト ゲ ピ ー	オ ー ダ イ ル	ア リ ゲ イ ツ	ワ ニ ノ コ	バ ク フ ー ン	マ グ マ ラ シ	ヒ ノ ア ラ シ	メ ガ ニ ウ ム	ベ イ リ ー フ	チ コ リ ー タ	カ イ リ ユ ー	ハ ク リ ユ ー	

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
1 1 6	1 1 5	1 1 4	1 1 3	1 1 2	1 1 1	1 1 0	1 0 9	1 0 8	1 0 7	1 0 6	1 0 5	1 0 4	1 0 3	1 0 2	1 0 1	1 0 0
ドン ファン	ゴマ ゾウ	ヘル ガー	デル ビル	デリ バード	マニ ューラ	ニユ ーラ	ヘラ クロス	ノコ ツチ	アン ノーン	ムウ マー ジ	ムウ マ	ドン カラス	ヤミ カラス	マリ ルリ	マリ ル	ルリ リ



N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.
1 5 0	1 4 9	1 4 8	1 4 7	1 4 6	1 4 5	1 4 4	1 4 3	1 4 2	1 4 1	1 4 0	1 3 9	1 3 8	1 3 7	1 3 6	1 3 5	1 3 4
ヤミ ラミ	ヌケ ニン	テツ カニ ン	ツチ ニン	エル レイ ド	サー ナイ ト	キル リア	ラル トス	ペリ ツパ ー	キャ モメ	オオ スバ メ	スバ メ	ダー テン グ	コノ ハナ	タネ ボー ー	ルン パツ パ	ハス ブレ ロ

N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.
1 6 7	1 6 6	1 6 5	1 6 4	1 6 3	1 6 2	1 6 1	1 6 0	1 5 9	1 5 8	1 5 7	1 5 6	1 5 5	1 5 4	1 5 3	1 5 2	1 5 1	
ソ ル ロ ツ ク	ル ナ ト ー ン	チ ル タ リ ス	チ ル ツ ト	フ ラ イ ゴ ン	ビ ブ ラ ー バ	ナ ツ ク ラ ー	ホ エ ル オ ー	ホ エ ル コ	サ メ ハ ダ ー	キ バ ニ ア	マ イ ナ ン	プ ラ ス ル	ボ ス ゴ ド ラ	コ ド ラ	コ コ ド ラ	ク チ ー ト	

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
1 8 4	1 8 3	1 8 2	1 8 1	1 8 0	1 7 9	1 7 8	1 7 7	1 7 6	1 7 5	1 7 4	1 7 3	1 7 2	1 7 1	1 7 0	1 6 9	1 6 8
ダン バル	ボー マン ダ	コモ ル	タツ ベイ	ソー ナ ンス	ソー ナ ノ	ア ブ ソ ル	ヨ ノ ワ ール	サ マ ヨ ール	ヨ マ ワ ル	ジ ユ ペ ツ タ	カ ゲ ボ ウ ズ	カ ク レ オ ン	ミ ロ カ ロ ス	ヒ ン バ ス	シ ザ リ ガ ー	ヘ イ ガ ニ

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
2 0 1	2 0 0	1 9 9	1 9 8	1 9 7	1 9 6	1 9 5	1 9 4	1 9 3	1 9 2	1 9 1	1 9 0	1 8 9	1 8 8	1 8 7	1 8 6	1 8 5	1 8 5
コ リ ン ク	ム ク ホ ー ク	ム ク バ ー ド	ム ツ ク ル	エ ン ペ ル ト	ポ ッ タ イ シ	ポ ッ チ ヤ マ	ゴ ウ カ ザ ル	モ ウ カ ザ ル	ヒ コ ザ ル	ド ダ イ ト ス	ハ ヤ シ ガ メ	ナ エ ト ル	ラ テ イ オ ス	ラ テ イ ア ス	メ タ グ ロ ス	メ タ ン グ	メ タ ン グ

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
2 1 8	2 1 7	2 1 6	2 1 5	2 1 4	2 1 3	2 1 2	2 1 1	2 1 0	2 0 9	2 0 8	2 0 7	2 0 6	2 0 5	2 0 4	2 0 3	2 0 2	2 0 2
ツ タ ー ジ ャ	ロ ト ム	ド ク ロ ッ グ	グ レ ッ グ ル	ル カ リ オ	リ オ ル	ガ ブ リ ア ス	ガ バ イ ト	フ カ マ ル	ミ カ ル ゲ	ミ ミ ロ ッ プ	ミ ミ ロ ル	フ ロ ー ゼ ル	ブ イ ゼ ル	パ チ リ ス	レ ン ト ラ ー	ル ク シ オ	

N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.	0.
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1
5	4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	9
シ マ マ	ケ ン ホ ロ ウ	ハ ト ー ボ ー	マ メ パ ト	レ パ ル ダ ス	チ ヨ ロ ネ コ	ム ー ラ ン ド	ハ ー デ リ ア	ヨ ー テ リ ー	ダ イ ケ ン キ	フ タ チ マ ル	ミ ジ ユ マ ル	エ ン ブ オ ー	チ ャ オ ブ ー	ポ カ ブ	ジ ャ ロ ー ダ	ジ ャ ノ ビ ー	

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
2 5 2	2 5 1	2 5 0	2 4 9	2 4 8	2 4 7	2 4 6	2 4 5	2 4 4	2 4 3	2 4 2	2 4 1	2 4 0	2 3 9	2 3 8	2 3 7	2 3 6
フシデ	ハハコモリ	クルマユ	クルミル	ガマゲロゲ	ガマガル	オタマロ	ローブシン	ドテツコツ	ドツコラー	タブンネ	ドリユウズ	モグリユー	ギガイアス	ガントル	ダンゴロ	ゼブライカ

N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.	N O.
2 6 9	2 6 8	2 6 7	2 6 6	2 6 5	2 6 4	2 6 3	2 6 2	2 6 1	2 6 0	2 5 9	2 5 8	2 5 7	2 5 6	2 5 5	2 5 4	2 5 3	
カ ブ ル モ	エ モ ン ガ	メ ブ キ ジ カ	シ キ ジ カ	チ ラ チ ノ	チ ラ ー ミ イ	ゾ ロ ア ー ク	ゾ ロ ア	デ ス カ ー ン	デ ス マ ス	シ ン ボ ラ ー	ド レ デ イ ア	チ ユ リ ネ	エ ル フ ー ン	モ ン メ ン	ペ ン ド ラ ー	ホ イ ー ガ	

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
2 8 6	2 8 5	2 8 4	2 8 3	2 8 2	2 8 1	2 8 0	2 7 9	2 7 8	2 7 7	2 7 6	2 7 5	2 7 4	2 7 3	2 7 2	2 7 1	2 7 0
アイ アント	ゴル ーグ	ゴビ ット	アギ ルダ ー	チヨ ボマ キ	オノ ノク ス	オノ ンド	キバ ゴ	シャ ンデ ラ	ラン ブラ ー	ヒト モシ	ギギ ギアル	ギギ アル	ギアル	デン チユ ラ	バチ ユル	シュ バル ゴ

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
3 0 3	3 0 2	3 0 1	3 0 0	2 9 9	2 9 8	2 9 7	2 9 6	2 9 5	2 9 4	2 9 3	2 9 2	2 9 1	2 9 0	2 8 9	2 8 8	2 8 8	2 8 7
ヤ ヤ コ マ	ホ ル ド	ホ ル ビ ー	ゲ ッ コ ウ ガ	ゲ コ ガ シ ラ	ケ ロ マ ツ	マ フ オ ク シ ー	テ ー ル ナ ー	フ オ ツ コ	ブ リ ガ ロ ン	ハ リ ボ ー グ	ハ リ マ ロ ン	メ ロ エ ツ タ	サ ザ ン ド ラ	ジ ヘ ッ ド	モ ノ ズ		ク イ タ ラ ン

N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
3 2 0	3 1 9	3 1 8	3 1 7	3 1 6	3 1 5	3 1 4	3 1 3	3 1 2	3 1 1	3 1 0	3 0 9	3 0 8	3 0 7	3 0 6	3 0 5	3 0 4
オン バー ン	オン バツ ト	ヌメル ゴン	ヌメイ ル	ヌメラ	ルチャ ブル	エレザ ード	エリキ テル	ギルガ ルド	ニダン ギル	ヒトツ キ	ニヤオ ニクス	ニヤス パー	ゴーゴ ート	メエー クル	ファイ アロー	ヒノヤ コマ



N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.	N 0.
3 5 4	3 5 3	3 5 2	3 5 1	3 5 0	3 4 9	3 4 8	3 4 7	3 4 6	3 4 5	3 4 4	3 4 3	3 4 2	3 4 1	3 4 0	3 3 9	3 3 8
ココガラ	ヨクバリス	ホシガリス	インテレオン	ジメレオン	メツソン	エースバーン	ラビフット	ニャビー	ゴリランダー	バチンキー	サルノリ	ジャラランガ	ジャランゴ	ジャラコ	ダダリン	ミミツキュ

N O. 3 7 1	N O. 3 7 0	N O. 3 6 9	N O. 3 6 8	N O. 3 6 7	N O. 3 6 6	N O. 3 6 5	N O. 3 6 4	N O. 3 6 3	N O. 3 6 2	N O. 3 6 1	N O. 3 6 0	N O. 3 5 9	N O. 3 5 8	N O. 3 5 7	N O. 3 5 6	N O. 3 5 5
ヤ バ チ ャ	ス ト リ ン ダ ー	エ レ ズ ン	セ キ タ ン ザ ン	ト ロ ツ ゴ ン	タ ン ド ン	パ ル ス ワ ン	ワ ン パ チ	バ イ ウ ー ル ー	ウ ー ル ー	フ オ ク ス ラ イ	ク ス ネ	イ オ ル ブ	レ ド ー ム シ	サ ツ チ ム シ	ア ー マ ー ガ ア	ア オ ガ ラ ス

N	N	N	N
0.	0.	0.	0.
3	3	3	3
7	7	7	7
5	4	3	2
セ レ ビ イ	モ ス ノ ウ	ユ キ ハ ミ	ポ ツ ト デ ス

## 本章

## 第1話 到着、ロンドシティ！ 幾つもの新たなる出会い

古き街並みや花々が咲き乱れる街、そして広大な大地や険しい山々などの自然に溢れ、数多くのポケモン達が棲まう地方、『イリス地方』。

そんな『イリス地方』の中心に位置する『ロンドシティ』に向けて、複数のトラックが走っていく中、その後が続いて走る一台の乗用車の中で運転席に座る男性が少し疲れ様子で小さく溜息をついた。

「……………ふう、ようやく『ロンドシティ』が見えてきたな。それにしても……………まさか『カントー地方』からこの遠く離れた『イリス地方』に引越す事になるなんて夢にも思わなかったな」

「ふふ、そうね。けれど、それは貴方の仕事の都合による物だし、もう決めてしまった事なのだから、仕方がないと思うしか無いわよね」

「そうだな。ところで……………イクトとロイはまだ寝ているのか？」

男性の言葉に助手席に座る女性が後部座席に視線を向けると、そこではあどけない寝顔を浮かべて短い黒髪の少年と『ねずみポケモン』のピカチュウがまるで兄弟のように仲良く体を寄せ合いながらスヤスヤと眠っていた。そしてその様子に女性はクスリと笑うと、視線を前方へと戻しながら運転を続ける男性に話し掛けた。

「まだ仲良く眠っているわ。イクトもロイも進んで準備を手伝ってくれていたし、やっぱり疲れていたのかもしれないわね」

「そうだな……まあ、今はそのまま寝かせておこう。起こすのは着いてからでも良いからな」

「ふふ、そうね」

男性の言葉に女性が微笑みながら答えていたその時、後部座席から「……んう？」と眠そうな声が上がると、女性は再び後部座席に視線を向けてからニコリと笑った。

「おはよう、イクト」

「……うん、おはよう、母さん。あれ……もしかしてもう着いた？」

「いいえ、まだよ。だから、まだ寝ててもいいわよ？」

「……ううん、いいや。それにしても……本当に来たんだね、『イリス地方』に」

「ふふ……まだ実感が湧かない？」

「うん……まあね。けど、これからこの『イリス地方』でロイと一緒に旅をするわけだし、

少しずつでもこの地方の雰囲気や空気に慣れていくつもりだよ」

イクトがニカツと笑いながら答える中、運転席に座る男性は少し申し訳なさそうな表情でイクトに話し掛けた。

「イクト……本当にゴメンな。リビングレジェンドに憧れて『カントー地方』でポケモンリーグ優勝を目指すための旅に出る予定だったのに、俺の仕事の都合でこの『イリス地方』に来る事になっちゃって……」

「……ううん、別に良いよ、父さん。たしかに『カントー地方』で旅を出来ないのは残念だけど、それならこの『イリス地方』でリーグ優勝をした後に『カントー地方』でもう一度旅を始めれば良いだけだしさ」

「イクト……」

「それに、この『イリス地方』には『カントー地方』にはいないポケモンも多く棲息しているって聞くし、そんなポケモン達と出会って考えるだけでワクワクするよ」

「……そうか。イクト、旅を楽しむ事も忘れるなよ?」

「うん、もちろん!」

父親の言葉にイクトが大きく頷きながら答えていたその時、その振動でロイは静かに目を覚まし、「ピカ……?」と眠そうに周囲を見回した。そして、その様子にイクトはクスリと笑うと、隣に座るパートナーポケモンに微笑みかけた。

「おはよう、ロイ。よく眠れたか?」

「ピカ……ピカ、ピカピカチュ?」

「ううん、まだ着いてないってさ。けど、もう少しで着くんじやないかな?」

「ピカ……ピカピカチュ!」

「ははっ、そうだな。まだどんな街なのか分からないけど、『マサラタウン』みたいに良い所だと良いよな」

「ピカツチュ!」

イクトとロイが楽しそうに『会話』をする中、その光景に母親はクスクスと笑いながらイクトに話し掛けた。

「ほんと、イクトのその『力』は不思議よね。イクト、一応会話は成立しているけど、ロイの言葉が分かっているわけでは無いんでしょう?」

「うん。あくまでもロイの気持ちが変わったり、言っている事が理解できたりするだけ。まあ、ここまですっかりと分かるのはロイだけだし、他のポケモンの気持ちを感じ取るにはどこかに触れてないといけないけどさ」

「それでもそれが出来ない俺達からすれば、スゴく不思議で羨ましい物だけだな。それに、どんなポケモンとも心を通わせられるのもやっぱりスゴいと思うぞ?」

「あはは……自分でも何でそんな事が出来るのかはサツパリなんだけども。けど、せつ

かくそんな特技があるわけだし、この特技は一生大切にしていきたいかな」

「そうだな。いつか旅の中でその特技に助けられる事もあるだろうし、大事にしていかないとな」

「うん、そうだね」

父親の言葉にイクトはニツと笑いながら答えた後、隣に座るロイの頭を静かに撫でた。そして、気持ち良さそうな笑みを浮かべるロイから前方へ視線を移したその時、歴史を感じさせるような古い街並みが見え始め、イクトはぱあつと顔を輝かせた。

「父さん、母さん、もしかしてここが……!」

「……ああ、そうだ」

「ふふ、ようやく着いたわね。私達がこれから住む街、『ロンドシティ』に」

「うん……!」

「ピカア……!」

母親の言葉に答えながらイクトとロイは窓の向こうに流れる『ロンドシティ』の景色を眺め、街中を歩く『カントー地方』には棲息していないポケモン達の姿に目を輝かせた。

「わあ……やっぱり色々なポケモン達がいるなあ。ねえ、父さん、新しい家に着いたら少し街の中を歩いてきても良いかな?」

「ああ、良いぞ。家の片付けや家具の搬入は父さん達でやっておくから、存分に探険してこい」

「うん、ありがとう!」

「ピカ、ピカツチュ!」

「どういたしまして……つと、そろそろ着くから下りる準備をしておけよ」

「うん!」

「ピッカ!」

そしてそれから数分後、イクト達が乗った車は一件の家の前で停まると、イクトはリュックサックを背負いながらロイを頭に乗せ、ワクワクした様子で車を降りた。そして、家を見上げると、とても嬉しそうな声を上げた。

「うわあ……思っていたよりも大っきいなあ……!」

「チャア……!」

「前の家も大きかったけど、今度の家もかなり大きいみたいだし、家の中を探険するのが楽しみだな。なつ、ロイ!」

「ピカ!」

イクトの言葉にイクトの頭の上に乗ったロイが大きく頷きながら答えていたその時、「イクト、ロイ」と後ろから声を掛けられ、イクト達は揃って後ろを振り返った。すると、

イクトの視界が突然赤一色になり、それに対して思わず「わっ!？」と声を上げながら顔に掛かっている物を離すと、それはイクトが愛用しているツバの付いた赤い帽子だった。

「帽子……そういえば、寝る前に脱いでたんだっけ」

「ああ、後部座席に置きっぱなしになってたぞ」

「そっか……ありがとう、父さん」

「どういたしまして。ほら、街の中を探検するなら早く行ってこい。モタモタしてると日が暮れるぞ」

「うん、分かった。よし……それじゃあ行こうぜ、ロイ!」

「ピッピカチュウ!」

ロイが元気よく返事をした後、イクトは一度ロイを肩へと移動させ、受け取った帽子をしつかりと被った。そして、引越し業者と共に家具の搬入をする両親に対して元気よく「行ってきます!」と声を掛け、それに対して両親が答えた後、イクトはロイを再び頭に乗せて『 Rondositei 』の街中へ向けて勢い良く走り出した。

「さて……ロイ、まずはどこから行こうか?」

「ピカ……ピカ、ピカチュウ?」

「ん、俺か? そうだな……俺ならまずはこの街にいるっていうポケモン博士のところ

に行ってみたいかな」

「ピカチュウ……?」

「ああ。オーキド博士から聞いた話だと、この『ロンドシティ』にはロツカ博士っていう女性のポケモン博士がいるらしいんだ。だから、まずはその人の所に行ってみれば、この『イリス地方』に棲息してるポケモンの事も何か分かるかなと思ってさ」

「ピカチュウ……」

「それに、『マサラタウン』を出発する時、オーキド博士が餞別としてポケモンを贈る予定だったが、まだ届いていないから届き次第そのロツカ博士の研究所に送るって言ってたから、その確認もしに行く必要があったしな」

「ピカ……ピカ、ピカツチュウ!」

「ああ、どんなポケモンと出会えるのか本当に楽しみだな。後は……その研究所がどこにあるかだけど……」

そう言いながらキョロキョロと辺りを見回していたその時、『しんかポケモン』のイーブイを抱き抱えたブロンドのポニーテールの少女が目に入った。

「ん……あそこにいるのは地元の子かな?」

「ピカ……ピカ、ピカピカチュウ?」

「そうだな。地元の子ならたぶんロツカ博士の研究所の場所も知ってるだろうし、とり

あえず訊いてみるだけ訊いてみるか！」

「ピツピカチュウ！」

ロイが右手を高く上げながら答えた後、笑みを浮かべながらイクトがブロンド髪の方へ走り出したその時、少女のイーブイの耳がピクリと動くと、イーブイは「ブイ……？」と不思議そうに声を上げながらイクト達の方へ顔を向けた。そして、そのイーブイの様子にブロンド髪の少女は不思議そうに小首を傾げた。

「ラピス、どうかしたの……？」

「ブイ、ブイブイ」

「え……ここつちに向かつて誰か走ってくるって——あ、本当だ」

ラピスが前足で指す方を見ながらブロンド髪の少女は納得顔で頷くと、イクト達を待つように静かにその場で立ち止まり、イクトが自分の目の前で足を止めると、不思議そうな表情を浮かべながらイクトに声を掛けた。

「君達、この辺では見掛けない顔だけど、私達に何か用？」

「……あ、うん。ちよつとロツカ博士の研究所の場所について訊きたかったんだけど……どこにあるか分かる？」

「ロツカ博士の研究所……うん、もちろん知ってるよ。私達もちよつと今からこの子の事で博士に相談するために行くところだったから案内してあげるよ」

「ああ、ありがとう」

「ふふ、どういたしまして。あ、そういえば自己紹介がまだだったよね。私はシア、そしてこの子は私のパートナーでラピスだよ」

「ブイ、ブイブイ!」

「シアにラピスだな。俺はイクト、そしてコイツは俺のパートナーでロイだ。」

「ピカツチュ!」

「イクト君とロイだね。これからよろしくね、二人とも」

「ああ、こちらこそよろしく。さて……それじゃ案内よろしくな、シア」

「うん!」

シアが元気よく返事をした後、イクト達はシアの後に続いて再び歩き始めた。そして歩き始めてから数分後、「あ、そうだ」とシアは何かを思い出した様子で声を上げると、クルリとイクト達の方へ顔を向けながら話し掛けた。

「さつきも思ったんだけど、イクト達ってこの辺の子じゃないよね?」

「ん……まあな。俺達、ちょうどさつき『カントー地方』からここに引越してきたばかりだったんだ」

『『カントー地方』……へえ、ずいぶん遠くから来たんだね。引越して事は、お父さんかお母さんの仕事の都合で?』

「ああ。それで、父さん達から街の中を歩いてきても良いって言われたから、まずはロツカ博士の研究所に行つて、この『イリス地方』に棲息してるポケモンの事を教えてもらおうと思つたんだ」

「なるほどね……たしかにロツカ博士ならそういう事には詳しいし、良い判断だったかも。ねっ、ラピス」

「ブイ、ブイブイ！」

「ふふっ、だよね！ ラピスも同じ事考えてたみたいで良かったよ」

シアが嬉しそうな笑みを浮かべながらラピスに頬ずりする中、イクトは先程のシアの言葉に『ある違和感』を覚えていた。そして、頭の上に乗ったロイと領き会った後、イクトはその違和感について確かめるためにシアに問い掛けた。

「……なあ、シア？」

「うん、何？」

「もしかしたらなんだけどさ……シアってポケモンの言葉が分かるのか？」

「……え、どうして分かったの……？」

「いや、どうして……今、ラピスも同じ事を考えてたみたいで良かったって言つてた  
だろ？ 普通に考えたら、ラピスが言っている事が分からなかったら、そんな言葉なんて出来ないと思うんだけど……」

「……あ、たしかに……」

「もしかして、全然気付いてなかったのか?」

「うん……まったく。でも……そっかあ、いつもは言わないようにしてたのに、つい言っちゃつてたのかあ……」

シアがどこか哀しそうな目をしながらポツリと言うと、その様子にイクトは恐る恐るといつた様子で話し掛けた。

「あ、あのさ……ポケモンの言葉が分かる事って、もしかしてあまり触れちゃいけない事だったか……?」

「……ううん、そういうわけじゃないよ。ただ、周囲からはあまり信じてもらえないから、普段はその事を言わないようにお母さん達と決めてただけ」

「……あまり信じてもらえない、か……」

「うん……だから、ラピスと話をするのは、家の中かある人の前くらいにしてただけど……まさか初めて会う君の前でうっかりラピスと話しちゃうなんてね」

「シア……」

「あはは……まあ、信じなくてもいいよ。自分で言うのもアレだけど、こうして実際に話せないの中々信じてはもらえない事ではあるし……」

シアが哀しそうな笑みを浮かべながら言う中、イクトはポンとシアの肩に手を置く

と、少し驚いた様子で見つめてくるシアに対してニツと笑いながら首を横に振った。

「……いや、信じるよ。だって、実際に目の前でラピスと会話してるところを見たし、シアが嘘をつく理由も無いからな」

「イクト君……」

「それに、この際だから正直に話すけど、俺もロイ限定なら同じような事が出来るんだよ」

「同じような事って……まさかイクト君もロイの言っている事が分かるの!？」

「うーん……まあ、正確に言うならロイの言いたい事なら鳴き声から判断できる、かな？」

だから、シアみたいにロイが言っている事が今俺達が話をしてるように聞こえるわけじゃないけど、ロイ限定なら何を言いたいのか正確に当てる事が出来るし、他のポケモンでも体の一部に触れてさえいけば、どういう気持ちなのかを感じ取る事が出来るんだ」

「わあ、そうなんだ……! ねえ、他には何か出来るの?」

「そうだな……これは能力って程じゃ無いけど、どんなポケモンとも心を通わせる事が出来るかな」

「どんなポケモンともって、本当にどんなポケモンとも?」

「ん、まあな。実際、怒りで我を忘れたポケモンや心を閉ざしたポケモンとも今まで心を

通わせる事が出来たからな」

「そっかあ……イクト君って本当にスゴいんだね」

「いや、そうでもないよ。それに、俺からすればシアの方がスゴいと思うし」

「……え?」

イクトの言葉にシアが驚いた様子を見せると、イクトは微笑みながら言葉を続けた。

「だってそうだろ? ポケモンの言葉が分かるなんて誰にでも出来る事じゃないし、ポケモントレーナーだったら誰だって欲しい能力だと思うぜ?」

「イクト君……」

「だから、その能力には自信を持って良いと思う。今はあまり信じてもらえないかもしれないけど、さっきも言ったように俺はその能力の事を信じてるし、その能力で助かる人だって絶対にいるはずだからさ」

「……うん、ありがとう。そう言ってもらえて少しだけ自信が湧いてきたよ」

「ふふ、それなら良かったよ」

「うん。それにしても……イクト君と話してるとなんだか落ち着くなあ」

「ん、そうか?」

「うん! イクト君の話し方もそうだけど、なんだか声を聞いていると心が穏やかになつてくるというか……スゴく落ち着くし安心するんだ」

「……そっか。もしかしたら、話してる内にシアとも自然に心が通い合っていたのかも  
しれないな」

「ふふ、そうかもね。まあ、イクト君とはこれからも仲良くしていきたいし、今の内から  
心が通い合っているのはとても嬉しいかな」

「そうだな。さて……それじゃあそろそろまた歩き始め——」

その時、近くのビルの電光掲示板の画面に四角い機械を持った黒いオールバック  
の男性の姿が映ると、イクト達や街中を歩いていた『ロンドシティ』の住人の視線が電  
光掲示板が集まる中、陽気な音楽と共に男性は手に持った機械をもう片方の手で指し示  
しながら話を始めた。

『皆さん、こんにちは。本日は私達『ペイカー・コーポレーション』の新製品であるこの  
『ポケフォン』の紹介を致します。この『ポケフォン』はトレーナー間での交流や手持ち  
ポケモンとの連携力向上を目的とした物になっており、『ジョウト地方』で普及している  
『ポケギア』のような通話機能に加えて、メールの送受信機能にインターネットへの接続  
機能などを初期段階で内蔵しており、その他にも『ポケフォン』を持つているトレーナー  
が近くにいればそのトレーナーの名前を教えてくれる『P T B』にどの地方にいて  
も衛星から現在位置を探査して現在位置の詳細な情報を表示してくれる『G A S』  
を搭載しています。そして、我が社がこれから開発していく予定になっているアプリ

ケーションを皆さん自らが選択をしてダウンロードする事で、自分だけの『ポケフォン』を作り上げる事も可能になっております。

さて……ここまで聞いてこの『ポケフォン』に興味を持った方もいるかと思われませんが、ここで朗報です。なんと、現在『ベイカー・コーポレーション』ではこの『ポケフォン』のモニターを募集しており、それに応募をして頂いた方全員にこの『ポケフォン』のプロトタイプをお渡ししております。ですが、残念な事に数量には限りがありますので、ご応募はお早めにして頂くようお願い致します。以上で、『ベイカー・コーポレーション』からのお知らせは終了致します。ご静聴ありがとうございました』

そして、画面上で男性が静かに頭を下げると、画面は『ベイカー・コーポレーション』のロゴマークへと変わり、映像を見ていた住人達の中では早速『ポケフォン』についての話が始まり、その光景をイクトとロイは物珍しそうに眺め始めた。

「……皆、さっきの『ポケフォン』っていうのに興味津々みたいだな」

「ピカ……」

「ふふ、そうだね。それにしても……今度の新製品も中々画期的な物みたいだね。流石は『ベイカー・コーポレーション』ってところかな」

『『ベイカー・コーポレーション』……そういえば、中々有名な会社みたいだけど、どんな会社なんだ?』

「ピカチュウ……?」

「あ、そういうえばイクト君達は知らなかったよね。『ベイカー・コーポレーション』はさつき映っていたアーサーさんが社長を務めているこの『イリス地方』では知らない人がいない程の大企業で、新型のモンスターボールとか『きずぐすり』とかの道具やポケモンの体調や筋力みたいなデータを測れる機械を開発していて、新製品が作られたらすぐにさつきみたいにアーサーさんが会社の電光掲示板を使って紹介をしているんだ」

「へえ……そうなのか」

「それに、支社も『イリス地方』全土にある分、何か製品に不都合があったら、すぐに対応してくれるのも人気の一つなんだよ」

「なるほどな……ところで、シアはさっきの『ポケフォン』のモニターには応募するのか？」

「うーん……興味はあるけど、少し考えてみたいかな。イクト君は?」

「俺も保留かな。ああいうのがあればたしかに便利だと思うけど、判断するにはまだ情報が足りない気はするからな」

「そうだね。さてと、『ポケフォン』の話はまた後にしてそろそろ行こっか」

「ああ」

「ピッピカチュウ!」

「ブツブイー!」

シアの言葉にイクト達が揃って返事をした後、イクト達はロッカ博士の研究所へ向けて話をしながら再び歩き始めた。そして、イクト達が『ベイカー・コーポレーション』本社の入り口の前を通り過ぎたその時、入り口の自動ドアが静かに開いた。すると、中から社長のアーサーとワインレッドのスーツ姿の女性が姿を現し、アーサー達は話をしながらゆつくりと外に出て来た。そして、「ん……?」とアーサーが何かに気付いたようにイクト達の方へ視線を向けると、スーツ姿の女性は不思議そうにアーサーに話し掛けた。

「社長、いかがされました?」

「……あの二人のトレーナー、スゴく興味あるな。クリス、この後の予定は?」

「この後は……一時間後に会議室にて『ポケフォン』についての会議があります」

「……そうか。となれば、少しだけ時間はあるな。よし……それならあの二人を少し追ってみよう。あの二人から何か光る物を感じるからな」

「かしこまりました」

クリスと呼ばれた女性が恭しく一礼をすると、アーサーはスーツのポケットからモニターボールを一つ取り出すと、静かにボールのスイッチを押した。

「さあ、出番だぜ。シャロ」

そして、その声と同時にモンスターボールが開くと、中から現れたのはパイプのような物を啜えたオレンジ色のピカチュウだった。

「ピカ……」

「シャロ、ちよつと鑑定してもらいたいトレーナー達がいるんだが、頼まれてもらえるか？」

「ピカ……ピカ、ピカピカチュ……」

「ははっ、その返事は肯定だと取らせてもらうぜ。うっし、それじゃあ早速追うとするか」

「はい」

「ピカ……」

クリスとシャロが返事した後、アーサーはシャロを肩に乗せ、イクト達が歩いていった方向へ向けて静かに歩き始めた。

『ベイカー・コーポレーション』の本社を出発してから数分後、イクト達の前方に大きな建物が見え始めると、シアは笑みを浮かべながらその建物を指差した。

「あつ、見えてきた！ あそこがロツカ博士の研究所だよ！」

「へえ……やっぱりポケモン博士の研究所っていうだけあって大っきいんだな」

「ふふ、そうだね。ロツカ博士は『イリス地方』のポケモンの生息地を主に研究してるみたいで、よくフィールドワークにも行くんだけど、その時に出会ったポケモンを捕まえたり、怪我をしていたり群れからはぐれたりしたポケモンを保護するためにここでお世話したりもしてるんだよ」

「なるほど……だから、さつきロツカ博士の研究所へ行くのは良い判断かもって言ったのか」

「そういう事。さてと、そろそろ研究所に——」

そう言いながらシアが前方に視線を戻したその時、研究所の自動ドアがゆっくりと開き、中から一匹のポケモンが勢い良く出てくるのが目に入り、イクトは歩きながら小首を傾げた。

「あれ……なんかポケモンが出てきたけど、アイツも研究所で保護してるポケモンなのか?」

「うーん、そうだと思うけど……ちよつと遠いからどんなポケモンなのかはまだ分からないかな……」

「そうだな——つて、アイツこつちに向かってきてないか?」

「……え?」

その言葉通り、研究所を飛び出したポケモンはまっすぐにイクト達の方へ走ってきており、程なくしてその正体が明らかになったが、その姿にイクト達は不思議そうに首を傾げた。

「……アレはヒトカゲ、だよな……？」

「うん……でも、なんだか知ってる色と違うような……？」

「ああ、ヒトカゲってたしかオレンジ色のはずなのに、アイツはどう見ても黄色だしな……」

ヒトカゲの体色にイクト達が疑問を抱く中、ヒトカゲは焦りの色が浮かんだ顔で走り続けていたが、目の前にイクト達がいるのに気付くと、ゆっくりと足を止めながらイクト達を警戒した様子で見つめ始めた。

「カゲ……！」

「ヒトカゲ、俺達は敵じゃない。だから、警戒なんてしなくても良いぞ？」

「そうだよ。私達はロツカ博士に用事があつて来ただけだから」

「カゲ、カゲカ……？」

「うん、私達は貴方を捕まえる気なんて無い。だから、イクト君の言う通り、警戒なんてしなくても良いんだよ。私達は貴方がどうして研究所から逃げてきたのかは知りたいけど、無理矢理捕まえたり、怖い目に遭わせたりするつもりなんてこれっぽっちも無い

からさ」

「カゲ……」

イクト達の説得によりヒトカゲの表情から徐々に警戒心が消え、ヒトカゲがイクト達に一步ずつ歩み寄っていったその時、「そこにいる人達、その子を捕まえてー!」という声が研究所の方から聞こえ、イクト達がそちらに顔を向けると、ヒトカゲの遙か後方から白衣姿の茶色いポニーテールの女性が急いで走ってくるのが目に入り、その姿にシアは少し驚いた様子を見せた。

「ロツカ博士……!? 博士ー、もしかしてこのヒトカゲって博士のポケモンなんですかー!」

「ううん、違うわ! でも、その子はウチの研究所で保護してるポケモンだから、逃げないようにしてほしいのよー!」

「逃げないようにつて言われても……ちやうど今コイツに俺達は敵じゃないつて言つたところだったから、今さらそんな事したらコイツの心は閉じちゃうよな……」

「う、うん……でも、ロツカ博士の願いを無視するわけにもいかないし……」

焦った様子でロツカ博士が近づいてくるのを見ながらイクト達がどうしたら良いか迷っていたその時、「……カゲ」とヒトカゲは静かに呟くと、そのままイクトへと歩み寄り、イクトの足元で歩みを止めた。

「ヒトカゲ……?」

「カゲ、カゲカゲカ」

「……どうやらヒトカゲは、イクト君なら信頼出来るって思ってくれたみたいだよ」

「俺を……でも、どうして……?」

『……お前からは他の人間とは違う何かを感じるし、さっきの言葉からは嘘を付こうという気持ちを感じられなかったからな』

「ヒトカゲ……」

「……ふふ、トレーナーとしてはこう言ってもらえるのはスゴく嬉しいよね」

「……そうだな」

シアが翻訳したヒトカゲの言葉にイクトが嬉しそうな笑みを浮かべていると、ヒトカゲを追い掛けてきていたロツカ博士がようやく追いつき、苦しそうに息を切らしながらヒトカゲに声を掛けた。

「はあ……はあ……もう、どうして貴方はいつも研究所から逃げだそうとするのよ……?」

『……ロツカ博士、俺にはやりたい事がある。だが、ここではそれが出来ないんだ……』

「やりたい事……? ヒトカゲ、それって一体何なの?」

「……カゲ、カゲカゲカ、カゲカゲカゲカ」

「……群れを追い出したアイツらに打ち勝ち、追いだした事を後悔させるのが俺のやりたい事だ、つて……ロツカ博士、このヒトカゲつて群れから追い出された子なんですか?」

「ええ……見て分かると思うけど、このヒトカゲは通常の色とは違う色違いという個体で、そのせいで群れから追い出されたみたいなのよ」

「色違い……あの、色違いが群れから追い出される事つて良くある事なんですか?」

「うーん……群れによりけりね。実際、色違いの個体が群れのリーダーをしているところも見た事はあるから——つて、そういうえば貴方は?」

「あ、初めまして。今日『カントー地方』から引越してきたイクトといいます。そして、こっちは相棒のロイです」

「ピカ、ピカピカツチュ!」

「イクト君にロイ……ああ、オーキド博士が言っていたのは貴方達の事だったのね」

イクト達の自己紹介を聞いたロツカ博士が納得顔で頷いていると、イクトはロイと不思議そうに顔を見合わせてからロツカ博士に話し掛けた。

「あの……オーキド博士が言っていたつて、どういう事ですか?」

「あ、うん。実は、昨日オーキド博士から『マサラタウン』出身のトレーナーが『ロンドシティ』に引越してくるから、もし会う事があつたらよくしてやつてほしいと言われ

ていたのよ」

「オーキド博士が……」

「ええ、だからどんな子達なのかなって思っていたんだけど、まさか連絡を受けた翌日に早速出会うとは思ってなかったわ」

「あはは……まあ、そうですね。ところで、このヒトカゲはこれからどうするんですか？」

「そうね……シアちゃんのおかげでヒトカゲの気持ちは分かったわけだし、この子の思いを尊重してあげたいところだけど、今のままだと確実にその思いは遂げられないだろうし、誰か良いトレーナーさんにも預けようかしらね。そうすれば、この子もいつかは群れの仲間達とも会えるだろうし……」

ヒトカゲを見ながらロツカ博士が笑みを浮かべてそう言ったその時、ヒトカゲはイクトをジツと見つめながら静かに頷いた。その瞬間、イクトの中で闘志が静かに燃え始めると、その事に驚きながらもその闘志に突き動かされる形でイクトはヒトカゲに話し掛けた。

「ヒトカゲ、もしかして俺達とバトルがしたいのか？」

『……ああ。さつきも言ったように、お前からは他の人間とは違う何かを感じるからな』

「他の人間とは違う何か……」

「うん、もしかしたらヒトカゲはイクト君達とのバトルを通して、それが何なのかを突き止めたいのかもしれないよ」

「そっか……俺自身はあまり思い当たらないけど、せっかくヒトカゲがバトルをしたいつて言ってくれているなら、俺はそれに応えたいかな」

『……決まりだな。イクト、お前の実力を見せてもらおうぜ』

「ふふ……イクト君、だいぶヒトカゲから気に入られているみたいだね」

「そうみたいだな。だけど、俺達は負けるつもりなんて一切ないぜ。な、ロイ」

「ピカ、ピカピカツチュー!」

イクトの言葉にロイが頬の電気袋から軽く放電させながらやる気に満ちた表情で答えると、イクトはそれに対して静かに頷いた後、ロツカ博士の方へ視線を向けた。

「ロツカ博士、研究所にバトルフィールドってありますか?」

「ええ、もちろんあるわ。せっかくのヒトカゲの願いなんだから、存分に使っちゃおうだ。それに、『カントー地方』から来た新人トレーナー君の力も見てみたいしね」

「ありがとうございます。よし……やるぞ、ロイ!」

「ピカッ!」

イクトの声にロイが大きく頷きながら答えた後、イクト達はバトルをするためにロツカ研究所のバトルフィールドへ向けて歩き始めた。それから数分後、バトルフィールド

に着いたイクト達はそれぞれの位置に着き、バトルが始まる時を静かに待った。そして、ロツカ博士は審判の位置に立ちながら軽くイクト達を見回し、イクト達の準備が整った事を確認すると、一度頷いてから大声でイクト達に呼び掛けた。

「では、これからイクト君達とヒトカゲのポケモンバトルを始めます。ルールはそれぞれ一体ずつのシングルバトル。どちらかが先に戦闘不能になった時点でバトルを終了にします。イクト君、ヒトカゲ、準備は良いかしら？」

「はい、大丈夫です！」

「ピッカ！」

『良いぜ……！』

「分かったわ……それでは、バトル……始め！」

そのロツカ博士の声と同時に、イクトはロイに技の指示を出した。

「先手必勝だ！ ロイ、『ねこだまし』！」

「ピッカ！」

ロイは返事をしながら瞬時にヒトカゲとの距離を詰めると、ヒトカゲの目の前で両手を力強く打ち鳴らした。そして、ロイがヒトカゲとの距離を取る中、ヒトカゲは「カゲ……!？」と驚いた様子で鳴き声を上げながら後ろへ一歩下がると、すぐさま攻撃の態勢を取ろうとした。しかし、そのままガクツと地面に膝をつき、その事に対して「カゲ……

「?」と不思議そうに鳴き声を上げながらイクトへ視線を向けると、イクトは少し安心した様子でニツと笑った。

「どうやら、『ねこだまし』の怯み効果はしっかりと発動したみたいだな」

「カゲカ……?」

「『ねこだまし』は、出てきた直後にしか成功しないし、『まもる』なんかの技を使う相手やゴーストタイプ相手には効かない技だけど、その分、今みたいに先制攻撃が出来る上、当たれば『せいしんりよく』の特性を持つている相手以外を確実に怯ませられる技なんだ」

「カゲ……」

「さて、アドバンテージを無駄にしないためにも解説はここまでにするか。ロイ、ヒトカゲに『アイアンテール』!」

「ピカ!」

その指示に従い、ロイが尻尾を銀色に変えながらヒトカゲへ向けて走り出すと、ヒトカゲはゆつくりと立ち上がりながらロイの動きに注目をした。そしてロイが跳躍をし、ヒトカゲへ向けて『アイアンテール』を振り下ろしながら落下を始めたその時、ヒトカゲはロイから目を逸らさずに右手を軽く放電させながらゆつくりと腕を後ろへ引き、『アイアンテール』が眼前まで迫った瞬間、「カゲ……!」と気合のこもった鳴き声を上

げながら雷を纏った拳を振るった。『アイアンテール』とヒトカゲの拳がぶつかり合いながら激しく火花を散らした後、ロイとヒトカゲは同時にお互いから距離を取り、再び動き出せるように体勢を整え、その様子を見ながらイクトは楽しそうにニツと笑った。

「今のは良い『かみなりパンチ』だったぜ……！　だけど、これはどうだ！　ロイ、ヒトカゲに『ボルテッカー』！」

「ピッカー！」

イクトの指示にロイは大きく頷きながら答えると、強い電気を体に纏いながら再びヒトカゲに向かって走り出した。しかし、ヒトカゲはそれを軽々と跳び越えて躲すと、ロイの動きに注目をしながら軽やかな動きの舞いを始めた。すると、ヒトカゲの体は徐々に赤いオーラに包まれ始め、その光景にイクトは警戒した様子を見せた。

「くっ……『りゆうのまい』をされたのはかなりキツいな。でも、だからと言って俺達は決して負けない！　ロイ、もう一度『ボルテッカー』だ！」

「ピッカー！」

イクトの指示でロイは再び『ボルテッカー』を使いながらヒトカゲへ向かって走り出したが、ヒトカゲはそれをなんて事無い様子で横に跳んで避けると、口を大きく開けながら牙に炎を纏わせてロイへ向けて突進した。そして、それに対してイクトはしまったといった表情を浮かべながらも落ち着いてロイへ指示を出した。

「ロイ、『アイアンテール』で『ほのおのキバ』を受け止めてくれ!」

「ピカ!」

ロイは返事をしながら『アイアンテール』でヒトカゲの『ほのおのキバ』を受け止めた。しかし、「カゲ……!」と気合の籠もった声を上げながらヒトカゲが『ほのおのキバ』のパワーを上げた瞬間、ヒトカゲの『ほのおのキバ』は『アイアンテール』を打ち消し、ロイに対して痛恨の一撃を食らわせた。

「ピカアツ……!」

「ロイ!」

攻撃を受けた衝撃でロイが吹き飛ばされ、それを見たイクトが焦った様子で声を上げていると、ヒトカゲは少しだけ息を切らしながらもどうだと言わんばかりの顔でイクト達の事を見ており、それに対してイクトは悔しさを感じると同時にヒトカゲのポテンシャルの高さにワクワク感を覚えていた。

「アイツ……やっぱ強いな。でも、俺達だってポケモンリーグでの優勝を目指して頑張ってきたんだ!」

「カゲ……カゲ、カゲカゲカゲ」

「……そうか……だったら、俺に勝ってみせろ、って言ってるよ!」

「勝ってみせろ、か……そんなの当然だ! そうだよな、ロイ!」

「ピカ……！」

『ほのおのキバ』によるダメージで辛そうな表情を浮かべながら大きく頷きながらしたロイの返事にイクトはニツと笑いながら頷くと、闘志に満ちた目で技の指示を出した。

「ロイ、まずは回復だ。ヒトカゲと距離を取ってから『ねがいごと』！」

「ピカ！」

イクトの指示を聞くと、ロイは足のバネを上手く使って後ろに跳ぶ事で距離を取ると、後ろ足だけで立ちながらまるで祈りを捧げるかのように両前足を固く握り合った。すると、ロイの体は徐々に白い光に包まれ始め、その様子にイクトは少し安心したような笑みを浮かべた。

「……よし、それじゃあ今度は……ロイ、ヒトカゲに向かって走り出せ！」

「ピッカ！」

イクトの指示に対してロイが迷う事無く頷きながら走り出すと、その姿にヒトカゲは疑問を抱いた様子で「カゲ……？」と小首を傾げた。しかし、すぐに気持ちを切り替えると、ヒトカゲは向かってくるロイの動きに注意をしながら再び『ほのおのキバ』を使う準備を始めた。そして、ヒトカゲとロイとの距離があと少しの所まで迫り、ヒトカゲがロイに『ほのおのキバ』で噛みつこうとしたその時、イクトはニツと笑いながら上空を指差した。

「ロイ! 地面に向けて『アイアンテール』!」 「ピカ!」

ロイはイクトの指示に大声で返事をする、瞬時に『アイアンテール』で地面を叩き、砂煙を上げながらその衝撃で上へ高く跳び上がると、ヒトカゲの『ほのおのキバ』をすんでの所で躲した。

「カゲ……!?!」

突然の出来事と『アイアンテール』の衝撃で生じた砂煙にヒトカゲは驚きの声を上げた後、ロイの気配を探りながら砂煙が消えるまでジッとその場に立ち止まった。そして、砂煙が少しずつ消え始めたその時、「ロイ、そのまま『アイアンテール』!」というイクトの声が聞こえ、ヒトカゲは「カゲ……!?!」と焦った様子でロイの姿を必死に探し始めた。すると、頭上から風を切るような音が聞こえ、ヒトカゲが弾かれたように上を見上げると、そこには『ねがいごと』によって体力を回復し、『アイアンテール』をしながら落下してくるロイの姿があったが、ヒトカゲはその突然の出来事に反応できず、そのままロイの『アイアンテール』を諸に受けてしまった。

「カゲ……!?!」

「よし! ロイ、よくやったぞ!」

「ピッカア!」

嬉しそうなイクトの声にロイが胸を張りながら答えていると、ヒトカゲは『アイアン

テール』で受けたダメージと衝撃で足元をふらつかせながらわけが分からないうつた様子でイクトとロイへ視線を向けた。すると、その姿を見たイクトはニツと笑いながらヒトカゲに話し掛けた。

「ヒトカゲ、どうして俺が砂煙が立つ中で迷う事無くロイに指示を出せたのか、そしてどうしてロイが自分の位置を当てる事が出来たのかって思ってるだろ？」

「……カゲ」

「そんなの簡単だよ。それは俺達がこういう特訓を今まで何度も繰り返してきたから、そしてロイなら指示を出すだけで絶対にやってくれると俺が信じてたからだよ」

「カゲ……？」

「まあ、ここまで出来るようになるまで色々試行錯誤したし、お互いに怪我をしたり苦勞もしたりしてきたけど、俺は絶対にロイなら出来るようになるって信じてずっとその特訓を続けてきた。そしてその結果、今みたいな事が出来るようになったんだ。な、ロイ」

「ピカー！」

嬉しそうに笑い合うイクトとロイの姿をヒトカゲが真剣な表情を浮かべながら見つめる中、イクトはヒトカゲに対して優しげな笑みを浮かべた。

「まあ、他のトレーナーでもここまでの事は出来るだろうから、これがお前の言う他の人間とは違う何かとは違うかもしれないけどな」

「……………」

「ただ、俺はさっき言ったようにロイの事を信頼してる。今みたいに言葉でしつかりとした指示が出来ない時でもロイなら俺の考えを理解し、その通りに頑張ってくれるってな。そして、俺もロイの鳴き声を聞けばどんな事を言いたいのかは分かるし、体の一部に触れていれば今どんな気持ちなのかは分かるけど、もしそういう事が出来ない時になっても良いようにロイの気持ちには常に敏感であるようにしてる。それはロイが俺の信頼に応えてくれようとしているのと同じように俺もロイの信頼に応えたいと思っ  
ているからだ。人間とポケモン、それぞれ違う生き物ではあるけど、お互いがお互いを  
思いやり、尊重し合える関係性。それが俺達の求める関係性なんだ」

笑みを浮かべながら語るイクトの話をヒトカゲが一言も発さずに聞いていたその時、  
イクトはヒトカゲの様子をジッと見つめてから、安心したようにニツと笑った。

「さて…………それじゃあそろそろバトルを再開しようか。ちやうどヒトカゲも『アイアン  
テール』を受けた衝撃でくらくらしてたのが治ったみたいだしな」

「…………カゲカ?」

「あ、勘違いはするなよ? お前がくらくらしてるところを治した状態で戦いたいと思っ  
て、さっきのロイとの連携の解説のついでに話はしたけど、今話したのは俺の正直  
な気持ちだからさ」

「カゲ……」

「ジム戦とか出会ったトレーナーとのバトルとかみたいなのなら、さっきのチャンスを活かして攻めていくみたいなの感じもありだろうけど、俺はお前とお互いの気持ちをぶつけ合うようなバトルをしたいんだ。お互いがしっかりと力や心をぶつけ合い、終わった後にお互いの気持ちを通じ合うようなそんなバトルを、な」

「……カゲ」

ニコリと笑いながら言うイクトの言葉にヒトカゲは少し考えるような仕草を見せたかと思うと、小さく溜息をついてから「カゲ……」と言いながら右手の掌を上に向けて指を自分の方へ二度程動かした。そして、その仕草にイクトとロイが揃ってキョトンとした表情を浮かべていると、その姿にシアはクスクスと笑いながらイクト達に声を掛けた。

「かかってこい、つて言ってるみたいだよ」

「かかってこい……?」

「カゲ、カゲカゲカゲカ……」

「どうせだ、お互いの最高の技をぶつけ合って決着にしよう、だつてさ」

「お互いの最高の技……」

「カゲカゲ、カゲカゲカゲカ」

「お互いに体力を消費しているなら、お前の言うそれぞれの力と心をぶつけ合うような決着の方法を取るのがベストだからな、だって!」

「ヒトカゲ……!」

イクトが嬉しそうな笑みを浮かべながらヒトカゲに視線を向けると、ヒトカゲはニツと笑いながらイクト達へ向けてもう一度かかってこいというハンドサインを出した。そして、イクトはロイと共にそれを見て更に嬉しそうな笑みを浮かべながら頷き合うと、被っていた帽子を被り直しながらロイに声を掛けた。

「よし、そういう事なら全力でやってやろうぜ、ロイ!」

「ピカッ!」

「そしてヒトカゲ、お前の全力も見せてもらおうぜ!」

「カゲ!」

イクトの言葉にヒトカゲが拳を硬く握りながら答えると、イクトはニツと笑いながら頷き、大声でロイに指示を出した。

「ロイ、最大パワーでヒトカゲに『ボルテッカー』だ!」

「ピカ!」

イクトの指示に従い、ロイが『ボルテッカー』を使いながらヒトカゲに向けて走り出すと、ヒトカゲは向かってくるロイを真正面から見つめながら、『ほのおのキバ』で迎え

撃つ用意を始めた。そして、バトルフィールドの中心で『ボルテッカー』と『ほのおのキバ』が真正面からぶつかり合うと、その衝撃でバトルフィールド上に砂煙が立ちこめた。そして、イクトが砂から目を守るべく手で軽く目を覆いながらバトルフィールドの中心を見つめていると、砂煙は徐々に晴れていき、砂煙が完全に晴れた瞬間、しっかりと地面に足をつきながら立っているロイの姿とバトルフィールドに倒れ込んでいるヒトカゲの姿を見ると、ロツカ博士はコクンと頷いてからイクトの方へ手を高く上げた。「ヒトカゲ、戦闘不能。よって、この勝負はイクト君達の勝ちよ」

その声を聞くと、イクトは勝利による嬉しさを表すこと無く、急いで二体のところへと駆け寄っていった。

「ロイ！ ヒトカゲ！」

「……ピカ。ピカ、ピカピカツチュ……！」

「ああ、早くヒトカゲの体力も回復させてやらないといけないけど、お前だつてさつき『ねがいごと』で回復していたとはいえ、『ボルテッカー』でかなりダメージを受けてるだろ？」

「ピ……ピカチュ……！」

ヒトカゲの事を心配そうにチラリと見るロイに対して、イクトはニツと笑いながら頭を軽く撫でた後、リュックサックの中から『オボンのみ』を二つ取り出し、その内の一

つをロイに手渡した。

「だから、とりあえずお前もこれを食べといてくれ。大丈夫、ヒトカゲもこれを食べればすぐに元気になるからさ」

「ピカ……」

ロイは再び心配そうにヒトカゲの事を見たが、そのまま手の中にある『オボンのみ』に視線を移すと、ゆつくりと『オボンのみ』を齧り始めた。そして、そのロイの姿にイクトは優しい笑みを浮かべながらも一度頭を軽く撫でると、もう一つの『オボンのみ』を差し出しながらヒトカゲに声を掛けた。

「ヒトカゲ、お前にもこれをやるよ。お前も今のバトルでスゴく疲れて、ダメージを負ってるだろうからさ」

「カゲ……」

ヒトカゲはゆつくりと立ち上がってから『オボンのみ』をイクトから受け取ると、美味しそうに『オボンのみ』を食べているロイに視線を向け、「カゲ……」と小さく溜息をついた。そして、そんなヒトカゲの姿にイクトはクスリと笑うと、同じようにロイを見ながらヒトカゲの頭にポンと手を置きつつ静かに口を開いた。

「……ロイって、普段は悪戯とか誰かにちよっかいを掛けたりするのが好きなんだけど、何だかんだで面倒見だけはいいんだ。だから、さつきも今の今まで自分と戦っていたお

前の事もかなり心配して、自分よりも先にお前の傷を治してやってほしいって顔をしてたよ」

「カゲ……」

「まあ、お前からしたらとんだお人好しみたいに思うかもしれないけど、それがロイの性質みたいなものだし、俺はロイのそんなところが本当に好きなんだ」

「カゲ、カゲカゲカ……」

「……ん、トレーナーのお前も似たようなもんだろって？」

「カゲ」

「まあ、そうかもな。でも、そうやって俺達は故郷である『マサラタウン』や他の街にいったときなんかには敵意を剥き出しにして襲ってきたりした奴や怒り狂って他の人が手をつけられなくなった奴とも心を通わせ、ゲットこそしてないけど、一緒に特訓に励んだり、時には一緒に遊んだりするようにはなった。だから、このやり方は間違っていないって思ってるし、これからもそうやって仲の良い奴を増やしていきたいと思ってる。それが俺達らしいやり方だからさ」

「カゲ……」

イクトの言葉を聞きながらヒトカゲが真剣な表情を浮かべていたその時、「おーい、イクト君ー！」とシアが大声で呼び掛けながらロツカ博士と共にイクト達の元へと走り

寄つてくると、イクトはそれに対してニツと笑いながら手を振った。

「シア、俺達のバトルはどうだった?」

「うん! スッゴクワクワクしたし、楽しかったよ! ねっ、ラピス!」

『うん! まあ、ロイが『ほのおのキバ』を受けた時はスゴクヒヤツとしたけどね』

「ふふっ、そうだよね! たしかにヒヤツとしたところもあつたけど、イクト君とロイの連携による反撃、そして心を通わせたヒトカゲとの熱い技と技のぶつかり合い……うん、スゴク見ていて胸が熱くなつたよ!」

「……そっか。まあ、今回のバトルではまだまだ改善点があるのが分かつたし、次に見せる時はもつと胸が熱くなるバトルに出来ると思うぜ!」

「ふふっ、そっか。それなら、楽しみにさせてもらおうかな?」

「ああ、楽しみにしといてくれ!」

ニコリと笑いながら言うシアに対して笑い返しながら答えた後、イクトはシアの隣に立つロツカ博士へ向けてゆっくりと頭を下げた。

「ロツカ博士、バトルフィールドを使わせて頂き本当にありがとうございます!」

「ふふっ、どういたしまして。私も貴方達のバトルはとても楽しませてもらつたし、スゴク勉強になつたわ。お互いを信頼し、それを軸に戦略を組み立てるトレーナーとポケモン。そういう形もあるんだって分かつたのは、私にとつてとても良い収穫だつたもの!」

「……そう言ってもらえて良かったです。でも、さつきもシアに言ったようにまだまだ改善点はありましたから、今度は見ている人にもっと楽しんでもらえるように頑張っていくつもりです」

「……そう、それなら私も楽しみにさせてもらおうね」

「はいー」

微笑むロツカ博士の言葉にイクトは大きく頷きながら答えると、ロツカ博士はそれに対して満足げに頷いた後、静かに『オポンのみ』を食べ続けているヒトカゲと同じ目線になるようにしやがみ込みながら声を掛けた。

「ねえ、ヒトカゲ。貴方にとつて、イクト君はあそこまで心を開いても良いと思えるトレーナーなのよね？」

『そうだな……イクト達とのバトルを通じて、イクト達なら信頼してもいいと感じたな』  
「そう……この研究員やポケモン達の誰にも心を開かなかつた貴方が、そこまで言えるようなトレーナーに出会えて、私は本当に嬉しいわ。このままだと、貴方は自分だけで強くなろうとして、どこかで行き詰まってしまうとも思っていたから、貴方がそう言っているのを聞いて本当に安心したわ」

心から安心したように微笑むロツカ博士の姿に、ヒトカゲは「カゲ……」と小さく呟くと、何かを考え込むような仕草を見せた。そして、「……カゲ」と決意を固めたような

表情を浮かべながらコクンと頷くと、持っていた『オボンのみ』を口へと含み、ゴクンと飲み込んでからイクトの方へ顔を向けた。

「カゲ、カゲカゲカゲ?」

「えーと……シア、通訳を頼む」

「あ、うん……イクト、頼みがあるんだが良いか? だつて」

「頼み……まあ、俺に出来る事なら良いけど、一体何なんだ?」

『俺を……お前達の仲間に加えてくれないか?』

「仲間つて……つまり、俺にお前をゲットして欲しいって事だよな?」

『ああ、そうだ』

「まあ、さつきまで戦つてて、お前が本当に強いのは分かったし、お前となら仲良くやっていけそうだから、とても嬉しい申し出だけど……本当に良いのか?」

『もちろんだ。それに……俺がお前から感じた何かの答え合わせもしていきたいからな』

「……そういうえば、そんな事を言ってたけど、それが何なのかは分かったのか?」

『ああ。俺が感じた物、それは人間やポケモンの垣根を越えて、全ての奴と心を通わせようとする気持ちだと思つている。だから、お互いを盲目的にじゃなく、しっかりと力量を理解した上で信頼し合い、それを武器にポケモンリーグでの優勝を目指しているお前

達となら、俺は自分の目標を超え、更に強くなれると感じたんだ」

「自分の目標……たしか、お前を追い出した群れの仲間達にお前の強さを証明して、追いだした事を後悔させる。それがお前の目標だったよな？」

『ああ。アイツらは色が違うというだけで、生まれて間もない俺を群れから追い出した。だから、俺はもうあの群れに戻るつもりは無いが、せめて俺が群れのリーダーの元息子として、その強さを受け継いでいた事を証明し、何も考えずに俺を追いだした事を後悔させたい。そうじゃなければ、こうして生まれてきた意味が無いからな』

「……………」

『だから、頼む。俺をお前達の仲間に加えてくれ……い！』

頭を深々と下げながら頼み込むヒトカゲの姿にイクトはロイと顔を見合わせた後、どちらともなく笑みを浮かべると、同時にヒトカゲに手を差しだした。

「ああ、もちろんだぜ、ヒトカゲ」

「ピカ、ピカピカツチュ！」

『イクト……ロイ……ああ、ありがとうな』

「どういたしました。まあ、俺もロイもまだまだ未熟ではあるし、これからは俺達三人で——」

その時、「ロツカ博士——」とロツカ博士の事を呼ぶ声が聞こえ、イクト達は揃ってそ

ちらに視線を向けた。すると、そこには小さな箱を持って走り寄ってくる研究員の姿があり、研究員が息を切らしながらイクト達の目の前で足を止めると、ロツカ博士は小首を傾げながらその研究員に声を掛けた。

「そんなに息を切らして……一体どうしたの?」

「実は……先程、『カントー地方』のオーキド博士からこの小包が届いたので、急いで報告に来たんです」

「オーキド博士から……あ、そういえばイクト君達の話聞いた時、元々渡す事になっていたポケモンが間に合いそうに無いから、届き次第こつちに送るので、出会ったら渡して欲しいって言われてたわね」

「あ……そういえば、俺達もその確認も兼ねてロツカ博士の研究所に行こうとしてたんだっけ……」

「ピカ……」

イクトとロイが揃って苦笑いを浮かべると、ヒトカゲはやれやれといった様子で首を横に振った。

『お前達……俺のせいまでこの事になっていたとはいえ、それはあまりにも暢気すぎないか?』

「あはは、そうかもな。それで……ロツカ博士、中には一体どんなポケモンが入っている

んですか?」

「あ、うん……ちよつと待つててね」

そして、ロツカ博士は研究員から小包を受け取ると、研究員が急いで研究所へ戻っていく中、丁寧なそれを開けていき、中から二つのモンスターボールと一枚の手紙を取り出した。

「中に入っているのはこの二つのモンスターボールと手紙だけみたいね。とりあえず、モンスターボールは渡しちゃうから、まずは手紙から読んでみましょうか」

「あ、はい」

イクトがモンスターボールを受け取ると、ロツカ博士は手紙を丁寧に開き、ゆっくりと内容を読み上げ始めた。

『君に渡す予定だったポケモンが、ようやく研究所に届いたので、君達が出発する時に話した通り、この手紙と一緒にロツカ博士の研究所へポケモンを送っておいたぞ。ピカチュウのロイを相棒にしている君なら、このポケモン達はきつと助けになつてくれると思う。新しい場所で色々と戸惑う事もあると思うが、ロイ達やそこで出来た新しい仲間と一緒にポケモンリーグの優勝を目指して頑張つてくれ。『イリス地方』から遠く離れた『カントー地方』から応援しておるぞ』

……つて書いてるわね」

「俺の助けになるポケモン……一体何だろう?」

「うーん……それは分かんないけど、とにかくモンスターボールから出してみてあげようよ」

「そうだな。 よーし……それじゃあ出てこい!」

そう言いながらイクトはモンスターボールのスイッチを押し、上へ勢い良く投げ上げると、モンスターボールは空中でパカッと開き、中から青い光と共に二匹のポケモンが姿を現した。

「……ダネ?」

「ゼニ……?」

「コイツらは……フシギダネにゼニガメか!」

「フシギダネとゼニガメ……たしかヒトカゲと同じで『カントー地方』の初心者用ポケモンなんだっけ?」

「ああ。 フシギダネは草/毒タイプで、ゼニガメは水タイプのポケモンだ。 たしかにこの二匹なら地面タイプが弱点の電気タイプのロイとは相性が良いし、偶然ではあるけど同じく地面タイプが弱点の炎タイプのヒトカゲとも相性が良いんだ」

「なるほどね」

イクトの説明にシアが納得顔で頷くと、イクトはキョトンとした表情を浮かべながら

キヨロキヨロと周囲を見回すフシギダネとゼニガメの体の一部に手を触れながら声を掛けた。

「フシギダネ、ゼニガメ。俺の名前はイクト、これからお前達のトレーナーになる人間だ。そしてこつちが俺の相棒でピカチュウのロイと新しく仲間になったヒトカゲだ」

「ピカ、ピカツチュ」

「カゲ、カゲカ」

「ダネ……」

「ゼニ……」

「俺はまだまだトレーナーとして未熟だし、色々と拙いところもあるから、何かと不満を抱く事もあると思う。でも、それでもお前達が毎日を楽しく過ごせるように努力するつもりだし、何か希望があれば出来る限り叶えていこうって思ってる。だから、何かそういう事があつたら遠慮無く言ってくれ。全てを叶えられるわけではないと思うけど、出来る限り叶えられるように頑張っていくからさ」

微笑みながら言うイクトの姿にフシギダネとゼニガメは顔を見合わせると、やがてニコツと笑いながら頷き合い、イクトの方へ視線を向けながら同時に頷いた。そして、その姿にイクトは安心したように小さく息をつくとき、笑みを浮かべながらフシギダネとゼニガメの頭にポンと手を置き、ゆっくりと撫でながら話し掛けた。

「……フシギダネ、ゼニガメ、これからよろしくな」

「ダネー!」

「ゼニー!」

フシギダネとゼニガメがニコリと笑いながら揃って返事をし、それに対してイクトが嬉しそうに頷いていたその時、その様子を見ていたシアは「……あ、そうだ!」と何かを思いついた様子で両手をポンと打ち鳴らした。そして、それに対してイクト達が不思議そうな顔で首を傾げていると、シアはニコニコと笑いながらイクトに話し掛けた。

「ねえ、せっかくだからヒトカゲ達にもニックネームをつけてあげるのはどうかな?」

「ニックネームか……うん、たしかに良いかもしれないけど、3匹分となると結構大変だな……」

「ふふつ、そうかもしれないけど、そこは自分のポケモン達への愛情で何とかカバーしよう♪」

「ポケモン達への愛情か……ああ、そうだな」

シアの言葉にクスリと笑った後、イクトはヒトカゲ達を見ながらどんなニックネームが良いか真剣な表情で考え始めた。そして考える事数分、「……よし、これで良いな」と満足げに頷くと、イクトはヒトカゲの頭に手を置き、静かに口を開いた。

「まず、ヒトカゲ。お前のニックネームは、レドにしようと思うんだ」

『レド、か……何か理由でもあるのか?』

「ああ、まあな。炎のイメージの色が赤色<sup>レッド</sup>だから、それを縮めてレドっていうのもある。でも、一番の理由は……俺の目標にしているトレーナー、『リビングレジェンド』の異名を持つ同じ『マサラタウン』出身のレドさんに近い名前にして、その強さに肖りたいからかな。オーキド博士から聞いた話だと、レドさんは『マサラタウン』から旅立った時、パートナーにヒトカゲを選んでいったらしいな」

『……なるほどな。まあ、俺もそのレドというニックネームの響きは結構気に入っているし、俺はそのニックネームで文句は無いぜ? サンキューな、イクト』  
『どういたしまして。それじゃあ次は……フシギダネ、お前だな』

『うん。それで、ボクにはどんなニックネームをつけてくれるのかな?』

フシギダネがワクワクした様子で問い掛けると、イクトはフシギダネの背中の種に手を置きながらニコリと笑いかけた。

「フシギダネ、お前のニックネームはリイルだ」

『リイル……うん、ボクは良いと思うけど、もしかしてこの名前もタイプの色<sup>の</sup>イメージからつけたのかな?』

「まあ、そうだな。草タイプのイメージは緑色<sup>グリーン</sup>、毒タイプのイメージは紫色<sup>バイオ</sup>、そしてそれを組み合わせてまずはリールになったんだけど、その後<sup>に</sup>リとルの間は『ー』よりは『イ』

の方がニックネームらしいかなと思つてそうしてみたんだ」

『なるほど……ふふ、考えた過程を聞いたら、なんだかもつと気に入つたような気がするよ。イクト、本当にありがとう』

「ああ、どういたしまして。そして最後は……ゼニガメ、お前だな」

『うん。さてさて……イクトはどんなニックネームをつけてくれるのかな?』

フシギダネと同じようにゼニガメがワクワクした様子でイクトを見つめる中、イクトはゼニガメの甲羅に手を置きながら笑みを浮かべつつゼニガメのニックネームを口にした。

「ゼニガメ、お前のニックネームは……オルタだ」

『オルタ……このニックネームもタイプの色のイメージからつけたの?』

「それもあつたけど、後はタートルウオーター亀と水も組み合わせて、オルタにしてみましたけど、どうかな?」

『オルタ……うん、僕もスゴク気に入つたよ。ありがとうね、イクト』

「どういたしまして。さて……それじゃあお前達、改めてこれからよろしくな」

『よろしくね、みんな!』

『ああ、こちらこそよろしくな』

『こちらこそよろしくね』

『いちいちそよろしくー!』

イクト達、そしてレド達が言葉を交わしながら握手をしていたその時、どこからかぱちぱちぱちという拍手の音が聞こえだし、イクト達は揃ってそちらに視線を向けた。そして、シャロを肩に載せながら拍手をするアーサーとクリスが歩いてくるのを見ると、イクト達は驚きを隠しきれない様子で口をぽっかりと開けた。

「あ、あそこにいるのって……」

「うん……『ベイカー・コーポレーション』の社長のアーサーさんだけど、どうしてアーサーさんがここに……?」

イクトとシアが不思議そうな顔で会話を交わす中、アーサーはイクト達の目の前でピタリと足を止めると、イクトの足元で小首を傾げながらアーサーをジッと見つめている。ロイへ視線を向け、そのままニツと笑いながらイクトに話しかけた。

「このピカチュウ、さっきのバトルでスゴく活躍していたようだが、このピカチュウとは付き合いは長いのか?」

「あ、はい。ロイとは8歳の時に初めて会ってからなので……って、もしかしてレドとのバトルを見ていたんですか?」

「ああ。会社から出た時に、お前さん達が歩いていくのを見かけたんだよ。こつそりついで行くのは悪いとは思ったんだが、お前さん達に興味が湧いたので、ここにいますクリ

ス達と一緒に歩いてきたというわけだ。そうだよな、クリスマス？」

「はい、その通りです」

アーサーからの問い掛けにクリスマスが淡々と答えると、アーサーはイクト達を軽く見回してからにいつと笑った。

「さて……恐らくもう名前は知られていると思うが、改めて自己紹介をさせてもらおう。私はアーサー、この『イリス地方』全土に支社を置く『ベイカー・コーポレーション』の社長だ。皆、これからよろしく頼むぜ」

「そして、私はアーサー社長の秘書を務めているクリスマスと申します。皆様、どうぞよろしくお願い致します」

クリスマスが恭しく一礼をした後、イクト達もアーサー達に対して軽く自己紹介をした。そして、最後のロツカ博士まで自己紹介を終えると、イクトはアーサーの肩の上でパイプを啜えながらイクト達を興味深そうに見つめるシャロに視線を向けた。

「ところで、アーサーの肩に乗っているのは、アーサーさんのピカチュウなんですか？」

「ああ、そうさ。このシャロは俺の相棒で、見ての通り色違いのピカチュウだ。そして、困った時にはいつもこのイカしたパイプを啜えながら手助けをしてくれるとてもクールな奴なんだ。シャロ、お前も挨拶しな」

「……ピカ、ピカピカチュ……」

パイプを啜えながらシヤロがイクト達に挨拶をすると、イクトはシヤロのパイプに視線を向けながら不思議そうな表情を浮かべた。

「アーサーさん、シヤロは何故パイプを啜えているんですか？」

「ああ、それか。実はな……シヤロはコイツがないとまともに話す事すら出来ないんだよ」

「…………え、それって…………？」

「…………そうだな。せつかくだ、ちよつと見せてやるとしよう」

アーサーは悪戯つ子のような笑みを浮かべると、「相棒、ちよつと失礼するぜ」と言いながらシヤロが啜えているパイプをそつと外した。すると、シヤロの耳は力無くペタンと倒れ、シヤロは目を潤ませながらアーサーの手の中にあるパイプを見つめつつ涙交じりの鳴き声を上げた。

「ピカ…………ピカピカピカチュ…………」

「あの、ボス…………早くそのパイプを返してよ…………って言ってるみたいですし、そろそろ返してあげても良いんじゃないですか…………？」

「ん、それじゃあそろそろ返してやるとするか」

そして、シヤロにパイプを啜えさせると、シヤロの耳は再びピンと立ち上がり、それと同時にその表情もとても落ち着いた物へと変わった。

「ピカ……ピカチュピカツチュ……」

「ふう……嬢ちゃん達には情けねえ姿を見せちまったな……って言ってますね」

「ははっ、たしかに今のはちよつと情けなかったな。ところで……お前さん、さつきからシヤロが何を言ってるのか分かつてる風に話してるが、もしかして本当にポケモンの言葉が分かかってるのか?」

「あ、はい。私、生まれつきポケモンの言葉が分かるみたいなんですけど、この事を話してもあまり信じてもらえないので、普段は隠すようにしてるんです」

「なるほど……だが、俺からしたら本当に羨ましい限りだな。ポケモンの言葉が分かるなら、人間だけじゃなくポケモン達からも新製品の感想を貰えるわけだしな」

「あ、なるほど……」

「まあ、これはあくまで俺ならそうするっていうだけだな。だから、お前さんはお前さんなりにその能力の良さってのを見つけると良いさ。その能力は滅多に手に入るよいうな物じゃないし、その能力で助かる奴だっどつかにはいるだろうからな」

アーサーがウインクをしながら言った瞬間、イクトとシアは顔を見合わせると、同時にクスリと笑い、その様子にアーサーは不思議そうな表情を浮かべた。

「ん、どうかしたか?」

「あ、いえ……実は同じような事を彼——イクト君からも言われてたんです。なので、

ちよつと可笑しくなつちやつて……」

「はは、なるほどな。そのピカチュウ達の懐きようといい、そういう風に言つてくれる事といい、お前さんのボーイフレンド、人間としてもポケモントレーナーとしても結構良い奴じゃねえか？」

「ボーイフレンドつて……もう、イクト君は今日初めて出会つたばかりのただの友達ですよ。ねつ、イクト君」

「そうだな。まあ、そういう意味じゃなく、男友達という意味なら間違つては無いけどな」

「ははつ、そうかい。まあ、それならそれでお互いの事を大切にしてやると良い。お互いの事を理解し合える友人というのが子供の頃からいるのはとてもありがたい事だからな」

「はい！」

アーサーの言葉にイクトとシアが声を揃えて返事をする、アーサーは満足顔で頷き、左腕につけている腕時計をチラリと見た。そして、「……そろそろ時間か」と呟くと、シャロの頭を軽く撫でてからイクト達に話しかけた。

「非常に残念だが、そろそろ会議の時間になりそうだから、俺達はこれで失礼させてもらうぜ。個人的にはお前さん達ともつと話したいところだが、流星にそれで会議に遅れる

ような事があつたら、部下達に示しがつかないからな」

「はい、分かりました」

「アーサーさん、お仕事頑張ってくださいね」

「おう、もちろんだ。それじゃあな、お前さん達」

「失礼いたします」

「ピカチュウ……」

そして、アーサー達が去っていく姿を見送った後、イクトは再びレド達の方へ視線を向けた。

「さてと、それじゃあそろそろレド達には一度ボールに戻ってもらいたいところだけど……ロツカ博士、レドのボールってありますか？」

「ううん、この子を保護した時はボールに入れずに抱き抱えてきたからまだ無いわね。でも、空のモンスターボールなら今あるから、レドにはそれを使ってあげて」

「分かりました」

ロツカ博士の言葉に頷いてから空のモンスターボールを受け取ると、イクトはモンスターボールをレドの目の前に翳した。そして、レドがそれに対してコクンと頷いてからモンスターボールのスイッチに触れると、レドはモンスターボールの中へと吸い込まれていき、モンスターボールはスイッチの部分に赤く点滅させながらイクトの手の中でカ

タツカタツカタツと三度揺れ、スイッチの点滅が消えると同時にモンスターボールはピタリと動きを止めた。

「……よし、ヒトカゲ……ゲットだぜ！」

『ゲットだぜー！』

『ゲットだよー！』

『ゲットだー！』

イクト達が声を揃えて嬉しさを表していると、その様子を見ていたロツカ博士はクスクスと笑い始めた。

「出会ってまだ間もないのにここまで仲良くなれてるなら、旅に出た後はもっと仲良くなっているかもしれないわね」

「え……イクト君、これから旅に出る予定なの？」

「うーん……準備とか『イリス地方』の簡単な下調べもあるから、すぐにつけてわけじゃないけど、だいたい一週間後くらいには旅に出るつもりだ」

「……そつか。せつかく友達になれたのに、なんだか寂しくなるね……」

「まあな。でも、一生の別れになるわけじゃないし、何かあったらたぶん『ロンドシティ』には戻ってくるから、その時にはまた話せば良いさ」

「……うん、そうだよ。たしかに必ずまた会う事にはなるし、その時に話せば良いよ」

ね」

「……………ん、それってどういう事だ?」

「……………ふふ、内緒。でも、それは間違いないし、その時までの楽しみにしておいてよ」

「あ、ああ……………分かった」

シアの意味深な微笑みにイクトが不思議そうな表情を浮かべながら頷くと、シアは満足げな様子でニコリと笑い、そのままイクトの手を取った。

「シ、シア……………?」

「さあ、これからしばらく会えなくなるんだし、今の内に色々話をしよう? 私、イクト君とロイが『カントー地方』でどんなポケモン達と出会ってきたのかスゴく興味があるんだ」

「……………ああ、良いぜ。せっかくだし、色々話してやるよ!」

「うん!」

そして、イクトとシアは楽しそうに笑い合うと、ロイ達やロツカ博士を含めて『カントー地方』や『イリス地方』、それぞれのポケモン達の事について話を始めた。

「……………ふあ、今日は本当に色々な事があったなあ……………」

その日の夜、イクトは自室の机に向かいながら日課の日記を書きながら小さな欠伸を漏らすと、日中の出来事を想起しながらクスリと笑った。

『『ロンドシティ』への引越にシア達との出会い、『イリス地方』での初めてののバトルに初めてのポケモンゲット……ほんと、初日から盛り沢山だったなあ』

そんな事を独り言ちていた時、イクトはふとある出来事を思い出し、一人で小首を傾げた。

「……それにしても、シアが言ってた必ずまた会えるってどういう意味だったのかな……。『ロンドシティ』に住んでるって言ってたから、旅の最中にどこかの街で会うっていう事とは違う気がするし、まさかこの『ロンドシティ』のジムリーダーだからなんて事も無いだろうしなあ……」

シアの言葉の意味について考えながらイクトが背もたれにゆっくりと体重を預けていたその時、「ピカ……？」とベッドの上でスヤスヤと寝ていたロイが眠そうな声を上げ、その姿にイクトはクスリと笑いながらロイに話しかけた。

「ロイ、起こしちゃってゴメンな」

「……ピカ、ピカチュ。ピカ、ピカピカチュウ……？」

「ん？ ああ、日記をつけながら今日一日の事を思い出してたんだよ。今日は本当に色々な事があったからさ」

「ピカ……ピカ、ピカピカツチュ」

「ああ、旅を始めたらもつと色々な出会いが待っているだろうし、これからが楽しみだな」

「ピツピカチュ!」

微笑みながら言うイクトの言葉にロイが大きく頷きながら答えていたその時、「……ふああ」とイクトは再び眠そうに欠伸を漏らし、苦笑いを浮かべながら目を軽く擦った。「今日のバトルで結構疲れたし、俺もそろそろ寝ようかな。日記もさつき書き終わってるから、その点も問題ないしな」

「ピカ、ピカピカチュ!」

「ははっ、そうだな。明日からは旅に出る準備をしないといけないし、早めに休んだ方が良いもんな」

「ピカツチュ!」

「よし……それじゃあ寝ようか」

「ピカ!」

そして、机の上の日記帳を閉じ、スタンドライトの明かりと部屋の灯りを消した後、イクトはベッドへと入り、もう一度欠伸をしてから隣にいるロイへ声を掛けた。

「それじゃあおやすみ、ロイ」

「ピカ……ピカピ」

挨拶を交わし終えた後、イクトとロイは同時に目を閉じ、程なくして眠りの渦の中へと飲み込まれていった。

「……なるほど。それなら俺も一週間後に動き始めた方が良さそうだな」

深夜、『ロンドシテイ』のとある豪邸の一室で、アーサーは机の上にある二つの小さな虫型の機械にイヤホンを繋ぎ、録音していた音声を聞いていた。そして、そこから必要な情報だけをメモ用紙へと纏めると、満足げな様子で小さく息をついた。

「……それにしても、このレディバ型盗聴器が全然バレねえとはな。まあ、バレねえように服に貼り付く時の違和感を最大限まで無くし、カクレオンの能力からヒントを得たり付いた服の色を瞬時に読み取ってその色に自分を变える擬態機能までつけたわけだし、これくらい出来なきや話にはならねえか」

そんな事を独り言しながら座っている椅子の背もたれにゆっくりと体重を預けていると、部屋の隅でパイプを啜えながらアーサーの作業を静かに見守っていたシャロが「ピカ……」と小さな鳴き声を上げ、それに対してアーサーはニツと笑いながら小さく頷いた。

「安心しろ、油断なんかする気はねえさ。お前の鑑定結果から、アイツらがこれから本当に強いトレーナーになるのは分かってるし、そうなってもらわないとこつちが困るからな」

「ピカ……ピカピカチュウ……」

「だから、ここからはお前にもかなり色々な仕事をしてもらう事になるぜ? もつとも、お前の実力があれば、一切の問題は無いって分かってるけどな」

「ピカ……」

ウインクをしながら言うアーサーの言葉にシヤロが少し難しい顔をしながら返事をしている、アーサーはそのシヤロの姿をジッと見つめた後、どこか挑戦的な表情を浮かべながらシヤロに話しかけた。

「さて……シヤロ、お前のトレーナー兼依頼人からのこの依頼、受けてくれるか?」

「……ピカ。ピカ、ピカチュウ」

「ははっ、ありがとよ。さて……俺達もそろそろ寝るとしようかね。明日からの一週間でいつもの数倍の仕事をこなさねえといけないからな」

「ピカ」

そして、シヤロがトコトコと自分の寢床へ向けて歩き出す中、アーサーは椅子から立ち上がると、そのまま窓際へと歩いていき、空に浮かぶ満月を見ながら楽しみにニツと

笑った。

「初対面のポケモンともすぐに心を通わせるイクトとポケモンの言葉を理解できるシア、アイツらがこれからどんなトレーナーに成長していくのか楽しみにさせてもらおうか」

満月に照らされながらイクトとシアの姿を思い浮かべると、アーサーは夜空を見上げながらどこか意味深な微笑みを浮かべた。

## 第2話 イクトVSシア 運命を決める一戦

『イリス地方』の『ロンドシティ』に引越してきた翌日、イクトは『イリス地方』での旅の準備をするため、パートナーのロイを頭に乗せながら街の中を歩いていた。

「さて……寝袋や簡易テントみたいな大きな物は、もう『カントー地方』にいる時から揃えてたから、それは問題ない。だから、後は旅の最中に合ったポケモンを捕まえるためのモンスターボールや回復の道具を揃えて……と」

「ピカ、ピカピカチュウ？」

「ん？ 旅の最中の野宿用の食糧は旅立ちの前日に揃えるから、まだ買わなくても大丈夫だ」

「ピカ……ピカ、ピカピカチュウ？」

「うーん……たしかに野宿用のランプの燃料も欲しいけど、それも前日に揃える形でたぶん良いと思うぞ？ 早めに色々準備するのは大事だけど、それを旅立ちの日まで保管する事を考えるなら、極力旅立ちに近い日の方が良いと思うからさ」

そんな会話を交わしながらイクト達が街中を歩いていたその時、「あ、いたー」と嬉しそうに言う声が聞こえ、イクト達がそちらに顔を向けると、そこにはシアとパートナー

であるイーブイのラピスの姿があった。

「シア、それにラピスも。おはよう」

「ピカ、ピカツチュ！」

「ふふつ、おはよう」

『おはよう、二人とも。朝から旅の準備でもしてたの?』

「ああ、今日はモンスターボールや回復用の道具を揃えていこうと思ってるんだ」

「そっか。あ、もし良かったら私達もそれについてつても良いかな?」

「それは良いけど……シア達には何か予定は無いのか? 誰か別の友達と遊ぶとかラピ

スのバトルの特訓をするとか……」

「うーん、特にないかな。ポケモンの言葉が分かる能力の事で周りの子達からはちよっ

と避けられてるし、ラピスのバトルの特訓も今はする必要も無いしね」

「そっか……うん、分かった。それじゃあ一緒に行こうぜ、二人とも」

『シア達ならもちろん大歓迎だよ』

「イクト君、ロイ……うん、ありがとう!」

『ありがとう、二人とも!』

「どういたしまして。さてと……それじゃあそろそろ行こうか」

「うん!」

『おー！』

シアとロイ達が元気よく返事をした後、イクト達は楽しげに話をしながら『ロンドシテイ』の中をゆっくりと歩き始めた。そして、その次の日からイクトは待ち合わせをするなどしてシア達と行動を共にし、イクトがシアと一緒にいる事に興味を持った同い年のトレーナーなどから申し込まれたバトルを受けたり、ロツカ博士の研究所を訪れて『イリス地方』に棲息するポケモン達の話の聞いたり、と様々な事をしながらイクトは『イリス地方』での旅の準備を着実に進めていった。

「ふう……それにしても、今日も結構色々な物を買ったなあ……」

そして、『イリス地方』に来てからおおよそ一週間が経ったある日の夕方、両手いっぱいを持った荷物の重さを感じながらイクトが独り言ちていると、それを聞いていたシアはクスリと笑った。

「たしかにそうだね。でも、旅に出るからにはそれくらいの荷物が必要なんでしょ？」

「うーん……必ずしもそうでは無いかね。ただ、これは俺にとって初めての旅になるから、出来る限り旅の最中に困らないようにはしたいんだ」

『そつかあ……まあ、その気持ちは分からなくも無いけどね。ところで、この『ロンドシテイ』に引越してきてからそろそろ一週間になるけど、『イリス地方』での生活には慣れてきた？』

「まあ、それなりにかな。でも、この『イリス地方』はとても良いところだと思うし、シア達やロツカ博士みたいな良い人達にも出会えたし、『イリス地方』に引越してきて良かったって思ってるよ。なっ、ロイ」

『うん！ それに、今ですらこんなにも楽しいんだし、旅に出たらもつともーつと楽しい事が待ってそうだよね』

「ははっ、そうだな」

イクトとロイが楽しげに話す中、シアはその姿を見ながらどこか寂しげな笑みを浮かべると、そのまま夕焼け空を静かに見上げた。

「旅、かあ……私も旅に出たら今よりも成長出来るのかな……」

「多分そうだと思うけど……シア、何かあったのか？」

『あ、もしかしてこの前みたいにシアの能力に対して嫌な事を言われたとか？ それだったら、また僕達がバトルで倒して——』

「ううん、違うの。ただ、私はこのままで良いのかなってちよつと思っちゃったんだ」

「……というと？」

「……実はね、昨日の夜にお姉ちゃんと喧嘩しちゃったの」

「シア、お姉さんがいたのか」

「うん、とつてもバトルが強くて優しい私の自慢のお姉ちゃん。でも、ちよつとがんばり

過ぎちやうところもあって、見てるこつちからすればとても心配になつちやうほどの。それで、お姉ちゃんも少しは休んだ方が良いつて言つただけど、お姉ちゃんはそれを全然聞いてくれなかつたから、思わずこんな事を言つちやつたの。

『頑張り屋のお姉ちゃんは好きだけど、今のお姉ちゃんなんて嫌い！』つてね……」

「……そつか」

「そして、それに対してお姉ちゃんが驚きながらもどこか哀しそうな顔をした瞬間、やつちやつたとは思つたんだけど、そんな事を言つちやつた事で今朝もお姉ちゃんに話し掛けるのすら戸惑うようになつちやつて、朝御飯を食べて軽く準備をしたらそのまま出て来ちやつたの……」

シユンとした様子で俯きながらシアが話し終え、イクトは「シア……」と心配そうな表情で隣を歩くシアを見た後、夕焼け空へ視線を移しながら静かに口を開いた。

「やつぱり、しっかりと謝るべきだと俺は思うかな」

「……そう、だよね」

「ああ。シアがお姉さんの事を心配なのは分かるけど、そういう風に言われてお姉さんも結構ショックを受けただろうからな。それに、このままで良いとはシアだつて思つてないだろ？」

「うん……」

「だったら、やっぱり謝るべきだよ。このままだと、お互いに辛い気持ちを抱えるだけだから」

「……そうだけど、やっぱり不安だよ。お姉ちゃん、哀しそうな顔をしてたけど、本当は私の事を怒ってるかもしれないし……」

「……まあ、本人がどう思っているかは分からないけど、少なくともシアの気持ちは伝わってると思うし、まずはお姉さんに謝って、その上でもう一回その思いを伝えれば良いと思う。お姉さんだって、シアの言葉を無視したいわけじゃないだろうからさ」

ニコリと笑いながら言うイクトの言葉を聞き、シアは不安そうな表情を浮かべながら「イクト君……」と呟いた後、自分の腕の中にいるラピスへ視線を移してから覚悟を決めたような表情でコクンと頷いた。

「……私、お姉ちゃんに謝る。そして、少しでも休んでほしいって事をもう一回伝えてみるよ」

「そっか。まあ、また何かあったら遠慮無く相談してくれよ？」

「うん、そうする。イクト君……本当にありがとうね」

「どういたしまして。あ、それと……もし本当にシアも旅に出るならその時は俺も準備を手伝うから、その時も遠慮無く言ってくれ」

『と言っても、ここのジム戦を終えたら次の日にはもう僕達は旅に出ちゃうから、それま

での間ならって事になっちゃうけどね」

「ははっ、たしかにそうだな。でも、レドガリザードンまで進化したたり、俺達を乗せて運べるだけの力を持った飛行タイプのポケモンをゲットしたりしたら、その時は一時的に『ロンドシティ』まで戻ってこれるし、それなら問題ないだろ?」

『ふふ、たしかにね』

イクトの言葉にロイがクスクスと笑いながら答えていたその時、「旅……」とシアはポツリと呟くと、何かを思いついたような表情を浮かべながらコクンと頷いた。そして、そのままイクトへ視線を向けると、とても真剣な表情を浮かべながらイクトに話し掛けた。

「……イクト君、明日も旅の準備をするんだよね?」

「ん……まあ、そうだけど……」

「あの、さ……明日の朝にロツカ博士の研究所まで来てもらうのって大丈夫……かな?」

「え、それは別に良いけど……どうかしたのか?」

「うん……ちよつとね。でも、明日になつたらしつかりと話すから、今はこれ以上訊かないでもらえると助かるかな」

「……分かった。それじゃあ明日の朝、ロツカ博士の研究所で待ち合わせだな」

「……うん、ありがとう」

シアが安心したような笑みを浮かべると、イクトはそれに対してニツと笑いながら頷いた。そして、イクト達は再びポケモンの事や『イリス地方』の事などについて話しながら夕焼け空の下を並んで歩いていった。

翌日、イクト達がロツカ博士の研究所を訪れると、玄関には既にシアとラピスの姿があった。

「シア、ラピス、おはよう」

『二人ともおはよう！』

「……うん、おはよう」

『おはよ、二人とも』

「うん。シア、お姉さんとの件はどうだ？」

「うん……帰った後、すっかりお姉ちゃんに謝ったよ。そしたら、お姉ちゃんもスゴく気に入ってみたいで、お姉ちゃんもゴメンねって謝ってくれて、その後は二人で色々話し合っつて、とりあえず今日明日のところは家でゆっくりしてみろって言うってくれたんだ」

「そっか、それなら良かったよ」

「うん、これも全部イクト君のおかげだよ。本当にありがとうね」

「どういたしまして。それで、ロツカ博士の研究所に来たは良いけど、これから何をしますか？」

「……うん、それなただけどね……」

イクトからの問い掛けにシアは少し緊張したような表情で答えると、気持ちを落ちつけるように一度深呼吸をしてから言葉が続けた。

「イクト君、今から私とポケモンバトルをしてくれる？」

「ポケモンバトルって……それは良いけど、一体どうして？」

「……それは——」

イクトからの問い掛けにシアが真剣な表情で答えようとしたその時、「……おや？」とどこか楽しげに言う声が聞こえ、イクト達がそちらに視線を向けると、そこには『ベイカー・コーポレーション』の社長であるアーサーとそのパートナーであるシヤロの姿があり、アーサー達の姿にイクト達が驚いた様子を見せる中、アーサーは面白そうな物を見つけたかのような楽しげな笑みを浮かべながらイクト達へと近付いてきた。

「おはよう、お前さん達。こんなところで何をしていたんだ？」

「おはようございます、アーサーさん。実は昨日の夕方にシアにここへくる約束をして、今シアからポケモンバトルを申し込まれてたところだったんです」

「……ほう、ソイツは面白そうじゃねえか。良ければ、俺も見てて良いか？」

「はい、それは大丈夫ですけど……お仕事は大丈夫なんですか？」

「ああ、一切問題ねえぜ。何故なら、ちよつとした理由があつて、本社でやらなきやいけない仕事は全部副社長に引継ぎしたから、今日からしばらくは本社でやる事は何も無いんだよ」

「ちよつとした理由……ですか？」

「おう。実はな、俺はしばらくの間、この『イリス地方』を巡る事にしたんだよ」

『『イリス地方』を巡るって……もしかして出張とかですか？』

「んー……まあ、それに近いな。俺も一応時間を見てはウチの支社の様子を見に行つてるんだが、それでも時には支社で働いてる社員から出る要望なんかを聞き逃してる事もあるんだ。だから、これを機にしつかりと支社全てを訪れて、これからのために話を聞いていこうと思つたんだよ」

「そうだったんですね……」

「ああ。それに……どうにもクリスや本社の役員達から俺は働き過ぎてるように見えるらしくてな。かなり前から休め休めつて結構言われてたんだ。だから、一応は長期出張という形で支社全てを回るが、『イリス地方』の各所で色々な物を見たり体験したりする事で、心身のリフレッシュも図るといふ半仕事半休暇みたいな形を取る事にしたんだ。それで、しばらくこの『ロンドシテイ』には俺以外だと本当にどうにもならない事態以

外では戻らないだろうから、色々見て回ろうとしたところでお前さん達を見つけたってわけだ」

「なるほど……」

アーサーの話にイクトが納得顔で頷いていると、「ところで……」と言いながらアーサーは不思議そうにシアに視線を向け、それに対してキョトンとしているシアに話し掛けた。

「シア、どうしてイクトにポケモンバトルを申し込んだんだ？ まあ、別に本来訊く必要なんて無いし、こう言われるのはあまり良い気分はしないだろうが、俺から見たらシアはあまりポケモンバトルが得意じゃなさそうに見えたもんで、ちよつと気になったんだ。すまねえな」

「……ふふ、実際にその通りなので気にしないで下さい。でも……私にはイクト君とどうしてもバトルをしたい理由があるんです」

「バトルをしたい理由……シア、どうしてそんなに俺とバトルをしたいんだ？」

「……それはね、イクト君に勝つ事で、今の私から一步前に進みたいからだよ」

「一步前に進む……」

「うん。それと……これは別に断つてくれても良い事なんだけど、私がイクト君とのバトルに勝つたら、一つだけお願い事を聞いて欲しいんだ。その代わり、イクト君が勝つ

「た何でも一つだけお願いをしても良いから」

「お願い事……それは大丈夫だけど、そのお願いって何なんだ？」

「それはバトルが終わるまで内緒。もつとも、それは君に勝った上で話すつもりでいるけどね」

「……そつか。まあ、バトルを断る理由も無いし……良いぜ、そのバトル受けて立つ！」  
『僕達に挑んだ事、後で後悔しないでよ？』

「ふふ、そんなのしないよ。それより……油断してると私達にあっさり負けちゃうかもよ？」

『たしかにバトルはあまり得意じゃないけど、私達だってそれなりに特訓はしてるもんね！』

イクトとロイ、そしてシアとラピスが火花を散らす中、アーサーはその様子に楽しげな笑みを浮かべた。

「くく……これは本当に楽しそうなバトルになりそうだな。さて、それじゃ早速ロツカ博士にバトルフィールドを使っても良いか訊きに——」

「あ、それなら予め私が聞いていたので大丈夫です。ただ、ロツカ博士も私とイクト君のバトルが気になるみたいで、もしやる時には呼びに来て欲しいと言われてますので、結局ロツカ博士のところへ行かないといけないんですけどね」

「はっはっは！ まあ、その気持ちはスゴク分かるぜ？ 将来有望そうなトレーナー同士のバトルなら見たいと思うのは当然だからな。んじゃ、早速ロツカ博士を呼びに行くとするか」

「はい！」

『はい！』

イクト達が揃って返事をした後、イクト達は研究所の中へ入り、アーサーの姿に研究員達が驚く中を歩いていき、奥の方にある研究室のドアを開けた。すると、そこではロツカ博士が机に向かって書類の作成を行っており、イクト達はロツカ博士に声を掛けるために静かにロツカ博士へ近づいた。

「ロツカ博士、おはようございます」

「……ん？ ああ、イクト君にシアちゃん。それにアーサーさんまで……もしかして今からバトルするところだったの？」

「はい。なので、ロツカ博士を呼びに来たんです」

「なるほどね……それにしても、まさかアーサーさんまでいらつしやるとは思いませんでした」

「ははっ、そうだと思います。まあ、俺も偶然イクト達と出会って、今からバトルをするところだったと聞いて、せっかくなので観戦させてもらう事にしたんです」

「ふふ、そうでしたか。さて、それじゃあそろそろ行きましょうか」

そのロツカ博士の言葉に揃って頷いた後、イクト達は研究所のバトルフィールドへ向けて歩き始めた。そして、バトルフィールドに到着すると、イクト達とシア達は静かにそれぞれの位置に着き、お互いに闘志に満ちた視線を向け合った。

「さて……シア、こうしてバトルをする以上、一切は手は抜かないからな!」

『二人とも全力で行かせてもらおうよ!』

「うん、こつちこそ負けないからね!」

『私達の力、見せてあげるよ!』

イクト達とシア達がそれぞれ声を掛け合った後、審判役のロツカ博士は静かにイクト達を見回し、準備が出来ている事を確認すると、大声で呼び掛けた。

「それじゃこれから、イクト君とシアちゃんのバトルを始めます。使用ポケモンは一体、どちらかが先に戦闘不能になった時点でバトルは終了とします。皆、改めて準備は良いかしら?」

「はい!」

『大丈夫です!』

「分かったわ……それじゃあバトル、開始!」

その声と同時に、イクトはロイに指示を出した。

「よし……ロイ、先手必勝だ！ 『ねこだまし』！」

「ピカ！」

イクトの指示に大きく頷きながら答えると、ロイは足のバネを上手く使って瞬時にラピスとの距離を詰め、ラピスの目の前で両手をパンツと強く打ち鳴らした。

「ブイ……!?!」

「ラピス！」

ロイの『ねこだまし』の衝撃でラピスは後ろへ吹き飛ばされると、そのままバトルフィールド上に倒れ込んだ。そして、どうにか立ち上がろうとしたが、体勢を崩す形でガクツと膝をつき、その姿にシアは悔しそうな表情を浮かべながらイクト達へ視線を向けると、イクトは得意気な笑みを浮かべた。

「どうだ、シア。やつぱり、『ねこだまし』は結構厄介だろ？」

「……そうだね。でも、厄介な技を持つてるのはロイだけじゃないんだよ？」

「……なに？」

シアの言葉にイクトが警戒した様子を見せると、シアはようやく立ち上がったラピスの姿に安心した様子を見せながら技の指示を出した。

「今度はこっちの番！ ラピス、まずは『かげぶんしん』！」

「ブイ！」

シアの指示にラピスが答えた瞬間、ラピスの周囲に幾つものラピスの分身が出現し、ラピスとそれらは「さあ、行って！」というシアの声と共にロイの周りを縦横無尽に動き回り始めた。

「……なるほど、『かげぶんしん』か。たしかに厄介な技ではあるけど、俺達にはそれだけじゃ勝てないぜ？」

「ふふ、分かっているよ。だから、こうするの。ラピス、ロイに『スピードスター！』」「ブイー！」

シアの指示と同時にラピスと分身達はヒラリと跳躍すると、一斉に尻尾を振るって星形の光線をロイへ向けて発射し、イクトはそれを見ながら余裕綽々といった様子でロイに指示を出した。

「ロイ、跳び上がりながら回転して、全部『アイアンテール』で打ち返せ！」  
「ピカッ！」

イクトの指示に頷きながら答えると、ロイは軽やかに跳び上がりながら回転を始める、そのまま向かってくる『スピードスター』を『アイアンテール』で次々と撃ちかえし、どうにか回避をした本物のラピス以外の分身は『スピードスター』を受けて全て消滅した。そして、それに対してシアは一瞬驚いたような表情を浮かべたが、すぐに落ちていた様子に戻ると、狙いどおりといった様子でクスリと笑った。

「やっぱりそうするよね……シア、ロイの着地点までダッシュー！」

「ブイー！」

シアの指示に従い、ラピスがロイの着地点へ向けて走り出すと、イクトは「なに!？」と驚きを隠しきれない様子で声を上げた。そして、その内にラピスはロイの真下まで到着すると、それに対してロイが驚いたような表情を浮かべる中、シアはウインクをしながらシアに指示を出した。

「シア、ロイに『メロメロ』！」

「ブツブイー！」

ラピスがシアと同じようにウインクをすると、ラピスの体から幾つものピンク色のハートが現れ、着地をしたロイの周りをグルグルと回転し始めた。そして、それを見ながら戸惑うロイにハートが命中した瞬間、ロイの目はハートになり、動きもフラフラとした物へと変わった。

『メロメロ』………！ おい、しっかりしろ、ロイ！」

「ピカ〜……ピカチュ〜」

イクトが必死にロイに声を掛けるもロイの視線はラピスへと注がれており、心なしか頬の電気袋の周りもほんのり赤みが差していた。そして、そのロイの姿にシアはクスクスと笑うと、得意気な顔でイクトに話し掛けた。

「どう、イクト君？ 私のラピスだって中々やるでしょ？」

「……そうだな。それにしても、『メロメロ』を覚えさせてるなんて……それはお姉さんからのアドバイスか何かなのか？」

「うん！ 相手が自分と違う性別に限られるけど、相手の行動を制限できるし、可愛いイーブイにはピッタリな技だよって言ってたから、すぐに覚えさせたんだ♪」

「なるほどな……！」

シアの説明にイクトは悔しそうに歯をギリツと噛みしめると、『メロメロ』でラピスに魅了されているロイに必死に声を掛け始めた。

「ロイ！ しっかりしてくれ、おいって！」

「ピカく、ピカピカチュく」

「ふふ、無駄だよ。今のロイはラピスの虜。たしかにイクトとロイの絆はたしかだけど、流石に『メロメロ』に掛かったポケモンを正気に戻すなんて事までは出来っこないよ。ラピス、このまま攻めていくよ！ 『とっておき』！」

「ブイ！」

『メロメロ』が成功した事で勢いづいたシアの指示にラピスは大きく頷くと、身体に金色の光を纏いながら足で地面を踏みしめ、目の前に巨大な星形の光を作り出し始めた。そして、「ブイ！」とラピスが気合のこもった声を上げると、星形の光は光線となってロイ

目がけて発射された。

「くっ……ロイ、避けてくれ！」

「ピカ〜、ピカチュウ〜」

必死になりながらイクトはロイに声を掛けるが、『メロメロ』の効果によってイクトの声はロイには届かず、ロイは向かってきた『とっておき』を諸にくらい、その衝撃で背後へ大きく吹き飛ばされた。

「ピカ〜」

「ロイ！」

イクトの足元付近までロイが吹き飛ばされてくると、イクトは悔しそうな表情を浮かべていたが、ロイに対しての心配もその表情には表れていた。

「ロイ、大丈夫か!？」

「ピカ……ピカピカチュウ……」

「ロイ……」

イクトの声に答えながらロイがムクリと起き上がると、イクトはロイが起き上がった事に一瞬安堵した様子を見せたが、『メロメロ』状態が続いている事を確認した途端、その表情は再び不安げな物へと変わり、その様子にシアはクスリと笑った。

「どうやら、まだロイはまだ体力があるみたいだけど、相変わらずラピスにメロメロみた

いだね」

「……そうだな。でも、俺達だつてこのままじゃ終われない。絶対にここから逆転してみせるさー!」

「イクト君……ふふ、なら見せてもらおうとしようかな! ラピス、ロイに『スピードスター』!」

「ブイ!」

シアの指示に従い、ラピスがロイへ向けて『スピードスター』を放つと、イクトは歯をギリツと噛みしめてからロイに指示を出した。

「ロイ! 『アイアンテール』で『スピードスター』を打ち消せ!」

「ピカ〜」

しかし、『メロメロ』状態のロイにはイクトの指示は届かず、目をハートにしながらフラフラとするロイに『スピードスター』が命中し、ロイは攻撃を受けた衝撃でバトルフィールド上をゴロゴロと転がった。

「ロイ!」

そして、傷ついたロイがバトルフィールド上に倒れ込む中、イクトの表情には焦りの色が浮かんだ。

「くっ……やっぱりあの『メロメロ』をどうにかしないと。でも、どうしたら……!?!」

バトルフィールド上に倒れ込んでいるロイを見ながらイクトは頭の中で『メロメロ』の対策を必死になつて考えていたが、「……やつぱり、これしかないよな」と覚悟を決めたような様子で呟くと、倒れ込んでいるロイへ向かつて必死になつて声を掛けた。

「ロイ！ 聞こえるか、ロイ！」

「……イクト君、一体何を……？」

「お前なら『メロメロ』なんかに負けずに頑張つてくれるつて信じてる！ だから、起きてくれ、ロイ！」

倒れ伏すロイに対してひたすらイクトが声を掛ける中、シアはそれを見ながら静かに首を振りつつイクトに話し掛けた。

「イクト君……気持ちには分かるけど、どんなに声を掛けたところで『メロメロ』の行動制限に勝てるわけが——」

「いや、俺は信じてる」

「……え？」

イクトの言葉にシアが心から驚いたような表情を浮かべると、イクトは目の奥で闘志の炎を燃やしながら確信した様子で言葉を続けた。

「たとえ、『メロメロ』が解けなくてもロイなら『メロメロ』に負けずに戦つてくれる。俺はそう信じてる！」

「イクト君……」

「ブイ……」

「だから、起き上がって一緒に戦ってくれ……ロイー!!」

イクトの心からの叫びがバトルフィールド上に響き渡ったその時、イクトの頭の中と驚きの声を漏らしていると、「……ピ、カ……?」という声がロイから漏れ、それと同時にロイはポロポロの身体でゆっくりと立ち上がり、イクトの方を振り返りながらゆっくりと親指を立てた。

「ロイ……!! お前、『メロメロ』が解けたのか!」

「ピカ……!!」

「ロイ……ははっ、やっぱりお前はスゴいよ!」

「ピカ、ピカツチュ!」

得意気な顔でロイが腰に前足を当てながら胸を張る中、目の前で起きている出来事にシアとラピスは心からの驚きを見せた。

「う、うそ……『メロメロ』がイクト君の声で、想いの力で解けたっていうの……!」

「ブイ……!!? ブイ、ブイブイ!」

「うん……本当ならあり得ないけど、ロイの様子を見る限り、たしかに『メロメロ』は解

ける。でも、本当にどうして……?」

「ブイ……」

シアとラピスが呆然としながらイクト達を見つめる中、イクトはそんなシア達を見ながらクスリと笑った。

「なんで『メロメロ』が解けたのかは正直俺達にも分からないよ。でも、たしかなのはこれで俺達にも活路が開けた事。そして、自分の相棒達を信じて進めば奇跡だつて起きるつて事だ!」

「自分の相棒達を信じて進む……そっか、分かっていたつもりだったけど、分かたなかったよ。それがイクト君の、イクト君達のポケモンバトルなんだね!」

「ああ!」

「ピッカー!」

シアの言葉にイクトとロイは同時に頷いて答えた後、再び戦う体勢を取りながらシアとラピスを真っ正面から見据えた。そして、イクトは帽子を被り直すと、楽しさに目を輝かせながらロイに指示を出した。

「ロイ、まずは回復からだ。『ねがいごと』!」

「ピカー!」

イクトの指示に答えながらロイが祈りを捧げるような仕草を取り、身体が白い光に包

まれだすと、それに対してシアは焦ったような様子を見せた。

「う……このままじゃ、勝利が遠退とのおのいちゃう……！　ラピス、ロイに『スピードスター』！」

「ブ、ブイ……！」

そして、シアの焦りが伝わったかのようにラピスも焦ったような表情を浮かべながら『スピードスター』を放ったが、その姿にイクトは余裕綽々といった様子でニツと笑った。

「それくらいなら問題ないぜ！　ロイ、『スピードスター』をギリギリまで引きつけろ！　「ピカー！」

イクトの指示に対してロイは一切疑う様子を見せる事無く頷くと、自分へ向かってくる『スピードスター』をジツと見つめた。そして、『スピードスター』が目の前まで迫り、「……今だ！」というイクトの声がバトルフィールド上に響いた瞬間、ロイは瞬時に上へと跳び上がり、『スピードスター』を回避すると、『ねがいごと』の効果でダメージを回復しながらそのままラピスへと近づき、その様子にシアは再び驚いたような表情を浮かべた。

「『スピードスター』をあんな方法で避けるなんて……！　で、でも……『スピードスター』は必ず相手に当たる技。一回避けただけじゃ、『スピードスター』からは逃げられ

ないよ！」

そのシアの言葉通り、『スピードスター』は瞬時に向きを変えると、再びロイへ向けて飛び始めた。しかし、それに対してイクトは焦るような様子をまったく見せず、ニツと笑いながらロイに声を掛けた。

「ロイ！ 『スピードスター』は気にせず、そのままラピスに近づいてくれ！」

「ピッカー！」

まるで滑空するように身体を大きく広げながらロイは答えると、そのまま静かにラピスの目の前に着地し、それを見たラピスが「ブイ!？」と驚きの声を上げながら警戒した様子を見せると、ロイはニコリと笑ってから軽やかにバック宙をした。そしてその瞬間、ロイ目がけて向かってきていた『スピードスター』がラピスの目の前に現れ、それに対してシアとラピスが反応出来ずにいる内に『スピードスター』は全てラピスに命中した。

「ブイ……!！」

「ああつ、ラピス！」

『スピードスター』が命中した事でラピスがバトルフィールド上をゴロゴロと転がる中、ロイがゆっくりと着地した瞬間にイクトは笑みを浮かべながらロイに指示を出した。

「これで決めるぞ！ ロイ、『ボルテッカー』！」

「ピカ！」

イクトの指示に返事をしながらロイは地面を強く踏みしめて走り出すと、身体中に電気をまといながら走り続け、ラピスがダメーシで顔を歪ませながら立ち上がった瞬間、「ピー……カアツ!!」と気合のこもった声を上げながら勢い良くラピスに激突した。

「ブイーツ……!!」

「ラピス！」

『ボルテツカー』の衝撃でラピスは上に打ち上げられると、そのまま強くバトルフィールド上に落下し、その周囲には砂埃が立ちこめた。そして、砂埃が静かに晴れると、そこには目を回しながら倒れているラピスの姿があり、ロツカ博士はラピスが瀕死状態になっている事を確認すると、イクト達の方へ手を高く上げながら大声を上げた。

「ラピス、戦闘不能！ よってこのバトル、イクト君達の勝ちよ！」

その声を聞いた瞬間、シアは心配顔でラピスへダツと駆け寄り、倒れているラピスを静かに抱き上げた。

「ラピス！ ラピス、大丈夫!?!」

「ブ……ブイ……」

「……良かったあ。うう、本当に良かったよお……」

「……ブイ、ブイブイ……」

「……ううん、ラピスは悪くないよ。負けちゃったのは、『メロメロ』が解けた事に動揺して冷静な判断が出来なくなっていた私のせいだから……」

ラピスを見ながら悔しそうに目を潤ませるシアの姿に、ラピスが「ブイ……」と心配そうに鳴き声を上げる中、シアはラピスを抱き抱えながらゆつくりと立ち上がった。そして、「だから……」と呟くと、目に涙を浮かべながらもニコリと笑った。

「これから、一緒に頑張っていこう。いっぱい特訓して、いっぱい勉強して、いっぱいバトルをして……もうこんな悔し涙を流さなくてもいいようにしよう！」

「……ブイ！」

声を震わせながらも力強く言うシアの言葉にラピスがニコツと笑いながら頷くと、シアはラピスの笑顔を見ながらクスリと笑い、愛おしそうに頬ずりをしていると、「おい、シアー！」と美味しそうに『オボンのみ』を頬張るロイを頭に寄せたイクトが片方の手に『オボンのみ』を持ち、もう片方の手を振りながら走り寄ってくるのが目に入り、それに対して微笑みながら手を振り返した。そして、イクトがシアの目の前で足を止めると、シアはラピスを片方の手で抱き抱えなおしながらもう片方の手で軽く涙を拭い、ニコリと笑いながらイクトに話し掛けた。

「イクト君、ロイ、お疲れ様」

「シア達もお疲れ様。ほら、ラピスにも『オボンのみ』を食べさせてやってくれ」

「うん、ありがとう」

イクトから『オボンのみ』を受け取り、シアが腕の中にいるラピスに渡すと、ラピスが美味しそうに『オボンのみ』を食べ始めた。そして、それを安心した様子でシアが見つめていると、イクトはクスツと笑ってからシアに話し掛けた。

「シア、いいバトルをありがとうな」

「こつちこそありがとう。今回のバトルで、私達ももつともーつと頑張らないといけな  
いって実感できたよ」

「ははっ、それは俺達も同じだよ。『メロメロ』でロイがまったく攻撃できなくなった時、あそこまで焦らなきゃもう少しロイが受けるダメージを抑えられただろうし、これから  
もレド達も交えて特訓をしないとイケないって感じたよ」

「ふふ……そっか。それにしても……イクト君の声でロイの『メロメロ』状態が解けたの  
は本当に驚いたよ。これって、イクト君がポケモンの気持ちを感じ取れる事や色々なポ  
ケモンと心を通わせられる事と何か関係があるのかな……?」

「さあな。ただ……」

「……ただ?」

「ロイの『メロメロ』状態が解ける前、頭の中で声がしたんだ。『負けたくない』って言  
う少年みたいな声が、さ」

「声……それって、もしかしたらロイの気持ちがイクト君に流れ込んできたんじゃないかな？」

「ロイの……気持ちが？」

「うん。『メロメロ』で行動が制限されていたとはいえ、ロイにだって負けたくないっていう気持ちはもちろんあったと思う。だから、原因は分からないけど、ロイの気持ちがいクト君へと流れ込んできて、そんな声が聞こえたんじゃないかな？」

「なるほどな……ロイ、お前はと思う？」

「ピカ……ピカ、ピカピカピカチュウ！」

「……そっか、やっぱり負けたくないとは思ってたのか。となると、シアの考えはもしかして本当に合ってるのかもしれないし、そうだったら嬉しいな」

「ふふ、そうだね」

会話を交わしながらイクト達とシア達が笑い合っていると、審判役をしていたロツカ博士とバトルの観戦をしていたアーサー達がゆっくりとイクト達へと近付きながら声を掛けてきた。

「みんな、バトルお疲れ様」

「期待していた通り、とても面白いバトルだったぞ？」

「ピカ……ピカチュウ」

「ありがとうございます。そういうえば……ロツカ博士、バトルの途中でロイの『メロメロ』状態が解けた事ですけど、博士はどうしてそんな事が起きたと考えていますか？」  
「そうね……私も今回の件は本当に初めてだから、正確な事は言えないけれど、それでも良いかしら？」

「はい、大丈夫です」

「分かったわ。それで、私の意見だけ——」

その時、「ロツカ博士、そのお話に私も混ぜて頂いても良いですか？」と落ち着いた少女の声が聞こえ、イクト達は同時にそちらへ視線を向けた。すると、そこにはニコニコと笑いながらイクト達へ向けてゆつくりと歩いてくるクリーム色のロングヘアの女性の姿があり、その姿にシアとラピスは心から驚いたような表情を浮かべた。

「お、お姉ちゃん……!？」

「ブイ……!？」

「お姉ちゃん……って、じゃああの人が……」

「うん、私のお姉ちゃん。でも、どうしてお姉ちゃんがここに……？」

「ブイ……?」

シアとラピスが揃って首を傾げる中、シアの姉はシアの目の前でピタリと足を止めると、クスリと笑いながら静かにシアとラピスの頭を撫で始めた。

「シア、ラピス、バトルお疲れ様。負けちゃったのは残念だけど、とても良いバトルだったよ」

「あ、ありがとう……って、お姉ちゃんもバトル見てたの!？」

「うん。今朝、シアがなんだかはりきってる様子だったから、ちよつと気になって少し距離を離して着いてきたんだ。そしたら、そちらの彼とポケモンバトルを始めたものだから、可愛い妹の頑張るところを見ようと思って、離れたところからずっと観戦させてもらってたんだ」

「そうだったんだ……でも、それなら別に近くで見なくても良かったのに……」

「ふふ、本当はそうしなかったよ。でも、私がいたらシアはいつも以上にはりきって、本当の実力を出し切れないと思ってね」

「お姉ちゃん……」

「まあ、さつきも言ったように私としてはとても良いバトルだったと思うよ。少し判断が甘いところや冷静さを欠いていたところはあったけど、『かげぶんしん』や『メロメロ』も交えながら着実に攻めていけていたし、もう少しラピスとのコンビネーションを高めれば、絶対にそんじょそこのトレーナーには負けれないと思ってる。姉の鼻屑目を除いてもね」

「お姉ちゃん……うん、ありがとう!」

「ブツブイ！」

「ふふっ、どういたしまして」

シアとラピスのお礼に対して笑みを浮かべながら答えた後、シアの姉はロツカ博士の方を向き、丁寧に一礼をした。

「こんにちは、ロツカ博士。今回は妹達のバトルの審判をして頂き、本当にありがとうございます」

「ふふ、良いのよ。私もイクト君とシアちゃんのバトルには興味があったからね」

「そうですか、それなら良かったです」

「でも……まさか貴女までバトルを見ていたなんて思わなかったわ。シアちゃんから家でゆっくりする事になっていると聞いていたから、とても驚いちゃった」

「そうだろうと思います。でも、今まで友達らしい友達がいなかった妹がはりきって出掛けていったら、姉として気になると思いませんか？」

「ふふ、それもそうね。シアちゃんから昨日まで少しわだかまりがあったとは聞いていたけど、基本的に貴女達はとつても仲の良い姉妹だものね」

「はい、もちろんです」

ロツカ博士の言葉にクスリと笑いながら答えると、シアの姉はイクト達やアーサー達の方を向き、ペコリと一礼をしてからニコリと笑った。

「初めまして、皆さん。私はリア、シアの姉です。妹共々これからよろしくお願ひします」

「あ、ご丁寧にどうもです。俺の名前はイクト、そしてこっちが相棒のロイです。こちらこそよろしくお願ひします」

「ピカ、ピカツチュ！」

「名前はたぶん知ってると思うが、俺の名前はアーサー。そして、このクールなピカチュウが俺の相棒のシャロだ。これからよろしくな」

「ピカ……」

「ふふ……はい、よろしくお願ひします」

イクト達の自己紹介に対して微笑みながら答えた後、リアは再びロツカ博士の方を向いた。

「さてと……ロツカ博士、お話の途中で入ってしまったてすみませんでした。それで、『メモロ』が解けた件をロツカ博士はどのように考えていらっしやいますか?」

「そうね……さつきも言ったように正確な事は言えないけれど、私はこれはイクト君のポケモンと心を通わせられる力に因る物だと考えているわ」

「俺の力に因る物……ですか?」

「ええ。話を聞く限りだと、イクト君はこれを能力的なものではなく、特技のようなもの

だと考えているみたいだけど、これまでも怒りで我を忘れたポケモンや心を閉ざしていたポケモンとも心を通わせる事が出来た。そして今回、『メロメロ』という言ってみればポケモンの正気を失わせる技を受けたロイを正気に戻す事に成功した。という事は、イクト君が様々なポケモンと心を通わせる事が出来るのは、シアちゃんのポケモンの言葉を理解する事が出来るのと同じように生まれ持った能力的な物で、これには『メロメロ』や『こんらん』といったポケモンの正気を失わせる状態異常すら癒やしてしまう力があるのかもしれないわね」

「俺に……そんな力が……」

「もつとも、まだ試していない事も多いから、本当のところは分からないし、何故あんな事が可能なかはサツパリだけど、少なくともこれはイクト君のみが持つ強みのような物であるのは間違いない。まあ、その力でそういった状態異常が治ってしまう事をあまり快く思わない人もいるかもしれないけど、さっきのバトルの内容を思い出す限りだと、それが働くのはイクト君自身が心からそれを願った時くらいのようなだし、イクト君がそういった物を望まないというのなら、そうしないように気を付けていればきつと大丈夫よ」

「……分かりました。ありがとうございます、ロツカ博士」

「どういたしまして。まあ、イクト君さえ良ければ、今後もこの力やポケモン達の気持ち

を感じ取る力について何か分かったら教えてもらえると助かるわ。一研究者としてこんな学会でも聞いた事が無い事例については興味があるし、真相を知りたいところだもの」

「はい、もちろんです」

ロツカ博士の言葉にイクトがニコリと笑いながら答えていると、静かに話を聞いていたリアアがジツとイクトの顔を見つめ始め、その様子にイクトは少し困惑した様子でリアアに話し掛けた。

「あ、あの……何か？」

「あ、うん……さっきのイクト君達の戦い方、スゴく興味深かったなあと思つてね」

「え、そうですか……？」

「うん。ポケモンバトルの経験値こそまだ少ないみただけど、技やポケモンについての知識の深さや相手の技を避ける時のタイミングの測り方は見事だった。そして何より……言動一つ一つに自分のポケモンへの信頼感が見えていて、同じポケモントレーナーとしてスゴく勉強になってたんだ。後ろから迫ってきていた『スピードスター』を回避の指示無しでロイが避けたのだから、ロイなら指示無しでも避けてくれると思つていたからでしょ？」

「あ、はい。それもありますけど……元々、ロイにはバトル中に周囲の音にも注意を払う

ように頼んでいましたし、『カントー地方』にいた頃から仲の良い野生のポケモン達に手伝ってもらいながらそういう特訓もしていたので、ロイならやつてくれると思つて指示は特に出さなかつたんです」

「ふふ、やつぱりね。でも、そういうお互いに信頼し合い尊重し合える関係性はとても素敵だと思ふし、これからもそれは大事にしていつてね」

「はい！」

「ピッカー！」

イクトとロイが揃つて返事をする、リアは満足顔でうんうんと頷き、「それにしても……」と言いなながらシアの方へ顔を向けたかと思ふと、悪戯つ子のような笑みを浮かべながら少しからかうような調子で話し掛けた。

「シアがとつても楽しそうにイクト君の話をする物だから、どんな子なのか気になつていたけど……まさかこんなに素敵なボーイフレンドだったなんてね。シア、こんなに頼りになる子はこの『ロンドシティ』にはいないんだし、これからもイクト君の事は大切にね」

「もう、お姉ちゃんまでそんな事を言う……イクト君はそういうんじゃない、同じポケモントレーナーで仲良しの男友達だよ。そうだよ、イクト君」

「そうだな。それに、シアは俺には勿体ないくらい可愛い女の子だと思うから、俺がシア

のボーイフレンドを名乗るなんておこがましいくらいだし」

「そうそ——へ？ イ、イクト君……今、なんて……う？」

「え？ だから、シアは俺には勿体ないくらい可愛い女の子だと思うから、俺がシアのボーイフレンドを名乗るなんておこがましいって言っただけ……それがどうかしたか？」

「あ、いや……私、家族や博士以外から可愛いとか言われた事あまり無かったから、その……ちよつと驚いちゃって……」

「あ、そうだったのか。でも、そうだとしたら周囲の奴らの目も大した事無いよな。楽しそうに話してる時とかラピスと一緒に遊んでる時とかの笑顔は可愛いし、色々気が付いてくれる気立ての良さもあるし、正直シアがそういう意味でのガールフレンドだったらどんなに嬉し——」

「ちよ、ちよつとストップストップ！ これ以上は本当に恥ずかしいからストップ!!」

「ん……そうか、それじゃあここまでにしとくか」

イクトが口を閉じると、シアは顔を赤くしながら軽く俯き、その姿を見たアーサーはどこか呆れたような表情を浮かべながらイクトに話し掛けた。

「なあ、イクト？ お前さん、あそこまでの言葉を並べておきながら本当にシアに対しての恋愛感情は無いのか？」

「え、無いですよ？　俺はあくまでも自分がシアに対して抱いている思いを言っただけですから」

「……そうかい。ところで、お前さんは『カントー地方』でもそんな感じに仲良くなった女を褒めちぎっていたのか？」

「いえ、まったく。というのも、『カントー地方』にいた頃は、女友達なんてまったくなくて、誰かと遊ぶにしても同じ『マサラタウン』に住んでる男友達かロイ、後は『一番道路』や『トキワのもり』のポケモン達くらいでしたから」

「へえ……そんなにモテそうな面してても周りの女は誰も食いついてこなかったのか？」

「あ、はい。女友達はいる事はいましたが、本当に何か話をする程度でみんな『マサラタウン』出身の大物トレーナーである『リビングレジエンド』ことレッドさんのファンだったので、自分の周りの異性にはまったく興味が無かったんだと思います。かくいう俺もレッドさんには憧れてますし、レッドさんのような強いトレーナーになる事を目標にして仲良くなったポケモン達との特訓に明け暮れていましたから」

「なるほどな……つまり、イクトにとつてシアは初めてしっかりと話をしたり、一緒にいて楽しいと思えたりする女友達ってわけか」

「そういう事になりますね。だから、もしもシアと旅が出来たら本当に楽しいと思いま

すけど、俺の旅に付き合わせるなんて事は出来ませんし、流石にシアだって嫌だと——」  
「……そんな事無いよ！」

そのシアの大声にイクトが驚いた様子で視線を向けると、シアは肩を軽く震わせながら少し怒ったような表情でイクトの事をジッと見つめていた。

「シ、シア……？」

「イクト君との旅が嫌なんて事はないよ！ だって、私は……」

そして、シアが再び俯き出すと、リアはクスツと笑ってからシアの事を軽く抱き締め、背中を優しく撫でながら声を掛けた。

「シア、言いたい事があるなら言っちゃった方が良いよ？」

「お姉ちゃん……でも、私は……」

「シアの事だから、バトルに勝つたらそれを言って、負けた時には別の事を言うつもりだったんだろうけど、本当に伝えたい事を伝えずじまいで終わらせたなら、一番後悔するのはシアなんだよ？ だから、もうそんな自分の中の決まり事は無しにして、シアがイクト君に話したかった事を正直に話してごらん。イクト君ならしつかり話を聞いてくれるはずだから。そうだよ、イクト君？」

「え……あ、はい。それはもちろんです。それに、バトルの勝敗次第でどちらかが片方に好きなお願いを一つしても良いという約束をしていたので、もしもシアが勝った時はど

んな事をお願いしたかったのかは気になりますから」

「……そっか。それで、イクト君はシアにどんな事をお願いするのは決めてるの？」

「……一応は。ただ、それを話すのはシアがどんな事を俺にお願いしたかったのかを聞いてからにしたいです」

「……うん、分かった。という事みたいなんだけど……シア、貴女はどうしたい？」

「……私、は……」

リアからの問い掛けにシアは再び軽く俯いた後、「……そうだよね」とポツリと呟いてから顔をゆつくりと上げ、一度深呼吸をすると、イクトの顔を正面から見ながら静かに口を開いた。

「イクト君……私ね、もしもバトルに勝てたら、イクト君の旅に私も連れて行って欲しいって言うつもりだったの。イクト君が私と一緒にいて楽しいって思ってくれてるように私もイクト君と一緒にいるのはスゴく楽しいし、イクト君やロイ達の傍でポケモンの事やバトルの事についてもっと学びたいと思ってたから」

「……………」

「でも、ポケモンバトルが弱い私がついて行っても、イクト君の足手まといになるかもしれないし、そんな私のワガママをただ言っても、やっぱりイクト君の迷惑になるかなと思った。だから、ポケモンバトルで勝つ事で私の強さを証明しつつ私の旅への同行を自

分への賞品にすれば、私もバトルで勝つために頑張れるし、イクト君の迷惑にもならないかなと思つたの……」

「……そうだったんだな」

「……うん。でも、こうして負けた以上、私が旅についていくななんて事は——」

そう言いながらシアが暗い表情で俯き掛けたその時、イクトはシアの頭にポンと手を置き、優しく撫でながらシアに話し掛けた。

「シア、俺達はお前やラピスが旅についてくる事を迷惑だなんてまったく思わないよ。な、ロイ？」

「ピカ！」

「イクト君、ロイ……」

「シア、一緒にいて楽しい人と旅をしたっていう気持ちはおかしくないし、俺だって同じ気持ちだ。それに、旅の中では絶対に一人じゃ乗り越えられない壁や試練だってある。でも、一緒に旅をする仲間がいれば、それだって乗り越えられるんだ」

「イクト君……！」

「……だから、ここでバトルに勝った賞品を使わせてもらおうよ。シア、ラピス、俺達と一緒に旅をしてくれないか？」

「ピカ、ピカツチュ！」

「……うん！ もちろんだよ！」

「ブツブイ！」

握手のための手を差し出しながら問い掛けるイクトの言葉にシアとラピスが笑顔で答えながら握手をすると、リアはとても安心した様子で小さく息をつき、シアの肩にポンと手を置きながら声を掛けた。

「良かったね、シア」

「うん！ お姉ちゃん、私の背中を押してくれて本当にありがとう！」

『ありがとう、リアお姉ちゃん！』

「ふふ、どういたしました。でも、こうして旅についていくと決めたからには、イクト君の事をしっかりとサポートしてあげるんだよ？」

「うん、もちろん！」

『私達に任せておいてよ！』

微笑みながら言うリアの言葉にシアとラピスが揃って頷きながら答えていると、それを見ていたアーサーはどこか満足げな顔で小さく息をつき、イクトとシアの肩に手を掛けながら声を掛けた。

「良かったな、お二人さん。お互いの気持ちが通じ合ってよ」

「はは、そうですね」

「さつきもお姉ちゃんとは約束しましたけど、旅についていくからには、イクト君のサポートはしつかりとこなしますよ!」

「……くく、そうだな。だが、子供だけの旅だと、何かと困る事が起きる可能性もあるんじゃないかねえか? 旅の最中に何かの事件に巻き込まれても自分の思ったように事を運べないとか本当に困った事が起きててもそれにすぐに対処できないのかな」

「……まあ、それはたしかに考えられますよね。何年か前に『カントー地方』でも『ロケット団』っていう組織が悪事を働いていて、それをレッドさんやそのライバルのグリーンさんが解決したらしいんですけど、その最中も色々と苦労をしたと聞きますし……」

「だろ? それなら、もう一人サポート役を連れていくのも手じゃねえか? ちようどここに何か事件が起きた時に顔が利く大人がいる事だしな」

そう言いながらアーサーがニツと笑ってみせると、イクト達は顔を見合わせてからとても驚いた様子でアーサーへ視線を戻し、その表情のままアーサーに話し掛けた。

「えつと……それってつまり、アーサーさんも俺達の旅に……」

「ついてきてもらえらるって事、ですか?」

「ああ。まあ、お前さん達さえ良ければだが……どうだ? これでも、昔は発明家志望で『ベイカー・コーポレーション』のオリジナル製品の殆どは俺も開発に関わってるから、旅の最中で何か必要な物があれば、作ってやる事も出来るし、料理だってそれなりに出

来るから、足手まといにはならないつもりだぜ？　なあ、シャロ？」

『……ああ。普段は少し怠け癖があるけど、やる時にはしつかりと物事をこなす男の中の男だから、旅ではとても助けられると僕は思ってるよ』

「そうそう……って、怠け癖のとは余計だつての！」

少しムツとしながらアーサーがシャロのパイプを取ると、途端にシャロは耳をペタンと倒し、目を潤ませながらアーサーの手の中にあるパイプへ必死に手を伸ばした。

『あうう……ゴメン、ボス。だから、早くパイプを返してよお……』

「……はあ、まったく。ほらよ、相棒」

そして、溜息をつきながらアーサーがシャロへパイプを返すと、シャロは急いでパイプを啜え、再び落ち着き払った様子で話し始めた。

『ふう……すまない、また取り乱してしまったね。やつぱりこれが無いとどうにも落ち着かない物で、ボスからパイプを取り上げられるとすぐああなってしまうんだよ』

「そういえば、初めて会った時もそうだったな。でも、どうしてそのパイプが無いとそうなっちゃうんだ？」

『……これは、このパイプは僕の憧れの人が啜えているとされる物と同系統の品でね、僕がいくら電気技を使っても燃えないように加工された特注品なんだ。そして、これを啜えている間は、僕は弱気で臆病な僕から落ち着いたクールな僕へ変わる事が出来る、い

わば性格を変えるスイツチみたいな物さ』

「なるほどな……」

シャロの説明にイクトが納得顔で頷いていると、アーサーはにいつと笑いながらイクトに話し掛けた。

「それでどうだ？ 俺とシャロも旅に連れて行ってってくれるか？」

「えつと……それはもちろん良いんですけど……」

『『ベイカー・コーポレーション』の支社を回るという仕事の方は大丈夫なんですか？』

「ああ、問題ねえさ。支社の連中にはその近くまで差し掛かった時に連絡をするとは言っているし、現役のトレーナーの旅についていく事で、トレーナー達の生の声を聞く事も出来るから、『ベイカー・コーポレーション』の新製品を作る上での大きなヒントも見つかるだろうからな」

『だから、君達の旅についていけるなら僕達も非常に助かるというわけさ。それに、先程の君達が言っていたようにどうせ旅をするなら一緒にいて楽しい人とした方が良くないだろうか？』

「アーサーさん、シャロ……」

ニツと笑うアーサーとクスリと笑うシャロの姿を見た後、イクトはシアと顔を見合わせ、同時にクスツと笑いながら頷き合うと、揃ってアーサー達の方へ向き直り、同時に

手を差し出した。

「アーサーさん、シヤロ、これからよろしくお願いします」

「これからよろしくお願いします!」

「……ああ、こつちこそよろしくな、お前さん達」

『同行させてもらう以上、僕達も精いっぱいサポートをさせてもらうよ』

『うん、よろしくね』

『一緒に旅を楽しもうね!』

イクト達トレーナーが握手を交わし、ロイ達ポケモンが笑いながら言葉を交わした後、「ん、そうだ」とアーサーは何かを思い出したように言うと、スーツのポケットから黒い『ポケフォン』を取り出し、操作を始めた。そして、「……これで良いな」と満足げな顔で言いながら『ポケフォン』をしまうと、その様子にイクトは不思議そうな顔をしながらアーサーに話し掛けた。

「アーサーさん、誰かにメールでも送っていたんですか?」

「ああ、ちよつとクリスにな。さて、お前さん達。明日は何をするのかももう決めてるのか?」

「あ、えつと……明日はこのジムに挑戦して、勝てたら残りの時間を旅の準備にあてるつもりです」

「そうか……それなら、明日のジム戦も観戦させてもらうが、その後にはちよいと『ベイカー・コーポレーション』まで来てもらって良いか?」

「はい、それは大丈夫ですけど……何かご用事ですか?」

「まあな。という事で、俺はそろそろ失礼させてもらうぜ。クリスに頼んだ物について俺もちよつとだけ手を加えたいからな」

「分かりました」

「それじゃあ明日は、『ロンドジム』の前で待ってますね」

「おう。それじゃあな」

『では、また明日』

そして、アーサーとシヤロが歩き去っていくと、リアは微笑みながらイクトに話し掛けた。

「さてと……明日は『ロンドジム』に挑戦するみたいだけど、何か対策はしてるの?」

「あ、いえ……特には何も」

「そっかあ……まあ、『ロンドジム』は鋼タイプのジムだから、炎タイプや地面タイプ、後は格闘タイプなんかがいれば結構楽になるけど……」

「あ、炎タイプならヒトカゲのレドがいます」

「ヒトカゲ……ああ、ロツカ博士が保護してたっていう色違いの子だね。それなら、少し

は楽に戦えるかな。でも、『ロンドジム』のジムリーダーは中々手強いから、油断はしないようにね」

「はいー」

イクトが元気よく返事をする、リアは満足顔でうんうんと頷いた後、気持ち良さそうに体を上にグーツと伸ばしてから、ニコリと笑いながらイクトに話し掛けた。

「さてと、それじゃあ午後からは私も特訓や旅の準備に付き合っただけよ。私もちょうど育てて始めの子が何匹かいるから、結構良い勝負になると思うし」

「え、それは助かりますけど……本当に良いんですか？」

「うん。これからシアがお世話になるからそのお礼っていうのもあるけど、ポケモンリーグに挑戦したいっていう君の力をもっと間近で見たいからっていうのが大きな理由かな。だって……」

「……だって、何ですか？」

「……んー、やっぱり内緒。いまそれを話しても良いけど、いま話したら楽しみが減っちゃうからね。だから、イクト君が無事にバッヂを8つ手に入れたら、その時にこの続きを話してあげるよ」

悪戯っ子のような笑みを浮かべながらウインクをするリアの姿に、イクトがポカンとした様子で「は、はあ……」と言うと、リアは微笑みながら「それと……」と言いつつ

シアへ視線を向けた。

「シアもこれについては内緒ね」

「あ、うん……分かった」

「よろしい♪ あ、それと……ロツカ博士、午後もバトルフィールドは使っても良いですか？」

「ええ、良いわよ」

「ふふ、ありがとうございます。という事で、とりあえずここらで一時的解散かな。そろそろお昼の時間だし、腹ごしらえは必要でしょ？」

「えつと……はい、そうですね」

「うんうん。それじゃあ行くよ、シア、ラピス」

「うん、分かった」

『はい』

シアとラピスが返事をする、リアは微笑みながらコクンと頷き、再びイクト達の方へ視線を向けた。

「さてと……それじゃあイクト君、ロイ、また後でね」

「あ、はい」

『はい』

そして、イクト達の返事にクスリと笑うと、リアはシアを連れて研究所を後にし、研究所のバトルフィールドにはイクト達とロツカ博士だけが残され、リア達が歩いていく姿を見ながらイクトは軽く苦笑いを浮かべた。

「何というか……リアさんってスゴくパワフルな人なんだなあ……」

「まあ、そうね。あの子、結構世話好きだし、何か思いついたらすぐに行動に移しちゃうところもある上、それで何度も色々な人のピンチを救った事もあるようだから、何かと頼られるのよね」

「なるほど……でも、さっきは本当に何を言いかけたんだろう……？　ロツカ博士は何か知ってますか？」

「うーん……なんとなく分かるけど、あの子の楽しみを減らしちゃうのも可哀想だし、ここはあの子の言う通りにしてもらっても良いかしら？」

「あ、はい……分かりました」

「うん、ありがとう。それじゃあ私はそろそろ研究に戻るから、イクト君達は午後からの特訓と旅の準備を頑張つてね。イクト君達のジム戦や旅の成功を祈ってるわ」

「はい、ありがとうございます」

「ふふ、どういたしまして。それじゃあね」

「はいー！」

「ピカチュウ！」

ロイと共に返事をし、笑顔で手を振りながら研究所へ向けて歩いていくロツカ博士を見送った後、イクトは頭の上にいるロイに声を掛けた。

「よし……それじゃ俺達も一度帰ろうぜ。昼食を食べながらさつきのパトルの反省会と午後からの特訓について話し合いをしたいからな」

「ピカッ！」

笑顔で答えるロイの声にニツと笑い返しながら頷いた後、イクトはロイと共に自分の家へ向けてゆつくりと歩き始めた。すると、研究所の屋根の景色が一部揺らぎ、そこに白く大きな身体を持ったポケモンが姿を現した。そして、ポケモンは楽しそうに話をしながら歩いていくイクト達を見ながらどこか楽しそうな様子で独り言ちた。

『……あのトレーナーは中々見所がありそうだな。奴や我が生まれの親からあの洞窟から離れ、信用のおけるトレーナーでも探すために旅に出てはどうかと言われた時は、そんな奴がいるわけはないと思っていたが、あのトレーナーなら少しは信用しても良さそうだな。もつとも、この私に勝てればの話だが……まあ、明日のジム戦とやらを見てから、バトルを挑むべきかを考えるとしよう』

そう言うのと、ポケモンは自身の持つサイコパワーに意識を向けると、『……ではな、イクトよ』と言いながら姿を消し、そのまま研究所を飛び去っていった。

### 第3話 戦いの日と謎の観戦者

シアとのバトルの翌日、イクトは朝食を食べ終えた後、自室の机に向かいながら、机の上に乗ったロイと共にこれから向かう『ロンドジム』でのジム戦へ向けての作戦会議をしていた。

「さてと……昨日のリアさんの話によると、『ロンドジム』は鋼タイプのジムらしい。という事は、相性だけ見るなら一番有利なのは炎タイプのレドだけど、問題はどんな鋼タイプのポケモンを出してくるかなんだよね……」

「ピカ……？」

「簡単に言えば、鋼タイプとは違うタイプも持っているポケモンも出てくるかもしれないって事だ。例えば、俺達の仲間だとフシギダネのリイルは草タイプと毒タイプの二つを持っているだろ？ そんな感じで鋼タイプの他に炎タイプの技の威力を抑えるタイプも持っているポケモンが出てきたら、レドでも弱点をつききれないって事になる。だから、そうなっても良いようにしておきたいんだけど、正直何を出してくるかまったく見当がつかないんだよね……」

「ピカ……」

「とりあえず、さっき言った理由からレドは確定で、リイルはどっちのタイプも鋼タイプとは相性が悪いから今回は休み。それで、俺はまだバッチは0だから、出てくるポケモンの数は恐らく二匹。」となると、後はロイかオルタなだけで……ロイ、お前は欲しい？」

そのイクトの問いかけにロイは「ピカ……」と軽く腕を組みながら考え込む素振りを見せ、しばらくそのまままで考え事を始めた。そしてそれから数分後、ロイは腕組みを止めると、やる気に満ちた目でイクトを見ながら「ピカ！」と大きく頷き、その様子にイクトはニツと笑いながら「……わかった」と答え、握り拳をロイの目の前に突き出した。「それじゃあ頼んだぜ、相棒！」

「ピカ！」

イクトが突き出した拳にロイも同じように握り拳を突き出して軽くコツンとぶつけた後、イクトは机の上に乗せていたレド達のモンスターボールのスイッチを押し、中からレド達を出した。そして、自分を見つめるレド達に対してイクトは再び握り拳を作ると、レド達を見回しながら声をかけた。

「みんな、昨日も話したけど、今日は『ロンドジム』でのジム戦だ。今回のジム戦で戦ってもらうのはレドとロイだけだけど、リイルとオルタは別のジム戦で出番があると思うから、ジム戦の雰囲気はどういう物か感じながらシアやアーサーさん達と一緒に応援し

「ていてくれ」

「ダネー！」

「ゼニーー！」

リイルとオルタが笑みを浮かべながら揃って頷くと、イクトは満足げに頷いてからレドへ視線を移した。

「そして、レド」

「……カゲ」

「今回の『 Rondジム』は、お前にとって有利な鋼タイプジムらしいけど、どんなポケモンを出してくるかは正直わからない。だから、有利だからといって油断せず、勝利へ向けて全力で臨むぞ！」

「カゲ！」

レドが拳を固く握りながら答えていたその時、「おーいー！」という声が外から聞こえ、イクトは窓へと近づいて静かに開けながら外を見た。すると、そこにはこちらを見上げながら笑みを浮かべるシアとラピス、そしてリアの姿があった。

「シア、ラピス、それにリアさんも」

「えへへ、おはよう！」

『おはよ、イクト』

「おはよう、イクト君。今日は絶好のジム戦日和だね」

「あ、おはようございます。ところで、みんなはどうしてここに？」

「ふふ、せっかくだから『 Rond Jim 』まで一緒に行こうと思ったんだ」

『まあ、私達だけで先に行っても良かったんだけど、シアがどうしてもって言うから……』

「ちよつと!? 何を言ってるの、ラピス!？」

『えー? 昨日、イクトから言われた事が嬉しい反面、スゴく恥ずかしかったけど、イクトと一緒にいるのは楽しいから、明日は一緒にジムまで行きた——むぐつ!』

「ラピス! それ以上は言わないで!」

ラピスの口を必死になって塞ぐシアの姿をリアが微笑ましそうに見つめる中、イクトは少々気恥ずかしそうに頬をポリポリと搔くと、視線を少しだけ空へと逸らしながらシアに話しかけた。

「……あー、今のは聞かなかった事にした方が良いの……かな?」

「……う、うん……そうしてもらえると助かるかな……」

「……わかった。それじゃあそろそろそっちに行くから、少しだけ待っていてくれるか?」

「うん!」

嬉しそうな笑みを浮かべながら頷くシアの姿にイクトはクスリと笑ってから窓を静

かに閉め、ゆつくりとロイ達の方へ顔を向けた。すると、ロイはニヤニヤと笑いながらイクトの事を見ており、その姿にイクトはジトツとした視線を向けた。

「……何だよ、ロイ」

「ピカ、ピカピカツチュ？」

「え、昨日の俺の言葉をシアが喜んでたのを聞いて実は嬉しかったんじゃないかって？」

「ピカ」

「んー……まあ、そうだな。でも、何度も言うように俺はシアに対して恋愛感情は無いし、シアだってそうだと思うぞ？」

「ピカ、ピカピカピカツチュ」

「それはどうかなって……それじゃあそう言うお前はどうかんだ？ 昨日のバトルでラピスから『メロメロ』を受けて、その時の影響でラピスの事を少しは意識し始めたりしてるんじゃないのか？」

「ピカピカチュ。ピカ、ピカピカツチュ」

「ラピスは友達だから、って……それなら俺だって同じだからな？ まあ、昨日言ったのは紛れもない本心だけだよ」

「ピカピカチュ」

「それなら良いじゃないって……はあ、まあ良いか……」

イクトは溜息混じりに言うと、部屋の隅に置かれているポールハンガーに掛けられた帽子を手を取ってそのまま頭に被った。そして、帽子を被った事で気持ちがりセットされた事を確認すると、再びロイ達の方を向き、にっと笑いながら声をかけた。

「よし……それじゃあ行くこうぜ、みんな！」

「ピカ！」

「カゲ！」

「ダネ！」

「ゼニー！」

イクトの声にロイ達が声を揃えて返事をする、イクトはそれに頷いてからレド達をモンスターボールへと戻し、ロイを頭の上に乗せた。

そして、部屋の中の戸締まりを軽く確認すると、そのまま部屋を出て、リビングにいた両親に声をかけてから、玄関のドアをゆっくりと開けた。

すると、そこには先に玄関の方へと回ってきていたシア達の姿があり、イクトはそれを見てから嬉しそうな笑みを浮かべた。

「お待たせ、みんな。ちよつと遅くなっちゃったかな？」

「ううん、そんな事無いよ。それよりも……今日のジム戦、勝てる自信はある？」

「うーん……初めてのジム戦っていうのもあるし、正直勝てるかはわからない。でも、ポ

ケモンリーグへの挑戦、そして優勝を目指すからにはここで躓つまずいてもいられないし、口イ達を力を信じて全力でやってみせるさ！」

「うんうん、その意気だよ。さてと……それじゃあそろそろ行こっか」

「はい！」

「うん！」

『はい！』

リアの言葉にイクト達が頷き、そのまま『ロンドジム』へ歩き出そうとしたその時だった。

『さあ……見せてもらおうぞ』

「……え？」

頭の中に突然響いたその声にイクトが疑問の声をあげながら立ち止まり、周囲をキョロキョロと見回していると、その様子にシアは不思議そうに首を傾げた。

「イクト君、どうかした？」

「あ、いや……今、誰かの声が聞こえた気がして……」

「誰かの声って……私には何も聞こえなかったよ？」

「僕も何も聞こえなかったかな……」

『私も……』

「そっか……うーん、気のせいだったのかな……？」

シア達の返答を聞き、イクトが帽子越しに頭をポリポリと掻いていると、それを聞いていたリアは顎に手を当てながら考え込むような素振りを見せた。

「……あ、もしかして……」

そして、何かを思い付いたような表情を浮かべると、リアはイクトに話しかけた。

「イクト君、その声はどんな風に聞こえた？」

「……強いて言うなら、頭の中に響いてきた感じですかね」

「頭の中に響いてきた……という事は、イクト君が聞いたのはテレパシーによる物かもしれないね」

「テレパシー……」

『……ってなんだっけ？』

シアとラピスが揃って首を傾げていると、リアは笑みを浮かべながらそれに答えた。

「テレパシーってというのは、今みたいに声を出して伝える物じゃなく、特別な力を使って相手に思いや考えを伝える物かな。ポケモンの特性の中にも同じ名前の物があるけど、もちろんそれとは別だよ。」

そして、基本的にはエスパータイプのポケモンやとても知能が高いポケモンが扱える方法なんだけど、イクト君の言う事が正しいなら、この近くにそういうポケモンがいた

事になるわね」

「なるほど……」

「まあ……噂によると、そういう力を持っていないポケモンが独学で人間の言葉を話せるようになったっていう例もあるみたいだけどね。それで、イクト君。その声は何て言ってたの？」

「えつと……俺が聞こえたのは、『さあ、見せてもらおうぞ』という一言だけでした」

「見せてもらおうぞ……か。まるで、イクト君の力を試しているかのような言い方だね」  
「俺の力を試す……」

リアの言葉にイクトが少し緊張した面持ちで拳を軽く握っている、シアはラピスを片腕で抱えながらも片方の手でイクトの手を優しく握ると、それに驚くイクトに対してニコリと笑いかけた。

「それなら、そのポケモンにイクトの君達の力をしっかりと見せてあげようよ。少なくとも、イクト君に敵意を持っているわけではないみたいだし、もしかしたらイクト君を偶然見かけて仲間になりたいからまずはその力をしっかりと見てみたいのかもしれないしね」

「シア……」

「だから、そんな風に緊張した顔をするのは止めて、まずはリラックスしよう？ そう

「じゃないと、ジム戦でも実力を発揮出来ないからね」

「……そうだな。誰かはわからないけど、俺の力を見てみたいっていう奴もいるわけだし、緊張してぼろ負けして、ソイツから失望されるわけにもいかないよな！」

「そうそう。という事で、シャキツとした感じでジム戦に臨もう！」

「ああ。シア、本当にありがとうな」

「ふふつ、どういたしまして」

イクトとシアが仲良く笑い合う中、それを見ていたリアは嬉しそうな笑みを浮かべた。

「ふふ、シアとイクト君が仲良しなのは本当に嬉しいなあ。この『ロンドシティ』に住んでるシアと同じ年の子達は、シアの事を避けたり変な目で見たりする子ばかりだから、ここまで仲良くなれた子はイクト君が初めてなんだよね」

「そういえば……昨日もこの『ロンドシティ』には頼りになる子なんていないって言っちゃいましたね」

「うん。まあ、自分達と違う子を恐れる気持ちはわからなくもないけど、シアが本当にポケモン達の言葉がわかるのかを確かめない内にシアの事を気味悪がったり、変な奴だなんて言い出したりして……今はまだ良いみたいだけど、私が旅に出てた時はシアも辛かったみたいで、お姉ちゃんとしてすごく申し訳なかったんだよね。自分が望んで旅に

出たとはいえ、妹が苦しく辛い時にソバにいてあげられなかったからさ」

「お姉ちゃん……」

「まあ、そんなわけで旅から帰ってきた直後は、シアとも色々な事をして遊んだりポケモンについての勉強をしたりしてただけど、やっぱりどこか辛そうな顔をして、どうしたら良いかなって考えた時に思いついたのがシアのパートナーになってくれるポケモンの存在だったの。」

そして、それを実行するためにすぐにこの『イリス地方』に生息しているポケモンのリストを作って、その中でシアにピッタリのポケモンを探した結果……」

「ラピス——イーブイになったわけですね？」

「その通り。可愛いから良いっていうのもあったんだけど、『しんかポケモン』という分類をされているだけあって、イーブイには現在確認されているだけでも8種類の進化系がいる上、イーブイにしか使えない『Z技』なんてのもあるから、その育成の幅の広さをシアにも楽しんで欲しいと思って、イーブイに決めただ」

『Z技』……たしか、『アローラ地方』に伝わる特別な技ですよね？」

「そう。各タイプの強力な攻撃技、普段とはまた違った効果をもたらず変化技、更には特定のポケモンにしか使えない特殊な技まで存在するとされる物、それが『Z技』なの。」

まあ、それを使うには『Zクリスタル』という特別な石と『Zリング』という『Zク

リスタル』を填めこむための装飾品が必要な上、トレーナーとポケモン自身にもそれなりの強さが求められるから、今までそれを使ってきたトレーナーとのバトルはあまりした事が無いんだけどね。

まあ、そんなこんなでイーブイに決めた後、旅の時に出来たトレーナー仲間と連絡を試してみたら、その内の一人がちょうど生まれたてのイーブイの里親を探していたみたいだから、すぐにそこに向かって引き取ってきたのがラピスってわけだね。そして、それがシアが8歳の頃だから、もう二年前になるのかな……」

「二年前……あ、それなら俺達と同じですね。俺達も二年前からずっと一緒にいますから」

「あ、そういえばそうなんだっけ。たしかイクト君のお父さん達がロイを近くの森で捕まえてきて、それを8歳の誕生日プレゼントとしてくれたんだったよね？」

シアのその問いかけに対してイクトは頷きながら答えた。

「ああ、そうだ。もつとも、その頃はロイもまだピチューで、満足に電気技も使えなかったんだけどな」

『そうだったね……まあ、それからいっぱい特訓をして、今では『ボルテッカー』まで使えるようになったし、僕達もスゴク成長したって言えるよね』

「ははっ、そうだな。でも、もつともつと成長していかないといけないよな」

『うん、それがお父さん達との約束でもあるからね』

ロイが少しだけ寂しげな笑みを浮かべると、その姿にシアはラピスと顔を見合わせた後、訊きづらそうな様子でロイに話しかけた。

「……ねえ、そのお父さんってもしかして……」

『うん、僕のお父さんだよ』

「実は……ロイがウチに来た翌日、俺達は一緒にロイの両親に会いに行ったんだ。ロイがウチに来てくれた事や父さん達がロイを俺にプレゼントしてくれた事はもちろん嬉しかったけど、やっぱりいきなりロイがいなくなった事でロイの両親も心配してるんじゃないかってその日の夜に思って、ロイと相談してから翌日の朝一番にロイの故郷である『トキワのもり』に行ったんだ。

そして、『ポケモンの気持ちを感じとる力』と『心を通わせる力』で『トキワのもり』のポケモンと仲良くなりながら、ロイの両親のいる場所を教えてもらって、ロイの両親と実際に会ってみたら、やっぱり心配してたみたいで、ロイの姿を見た途端に二匹とも急いでロイに駆け寄ってきたんだ」

「まあ、ロイの両親からしたらいきなりいなくなった息子が見つかったわけだし、そうするの当然だよね」

「はい。そして、ロイの両親にわけを話して、もしもロイが俺のポケモンになる事をロイ

の両親が認めないって言うなら、父さん達には悪いけど、すぐにでもロイを両親の元へ帰す事を話したんです。

そしたら、ロイの両親は少し自分達で話をした後、少し誇らしげな様子でロイが俺のポケモンになる事を認めてくれたんです。

というのも、ロイは活発な上はかなりイタズラ好きなところがあって、両親はロイにはもう少し落ち着きのある行動をして欲しいと思っていたみたいで、俺と一緒に行動をする事で少しは落ち着きのある子になってくれるんじゃないかと思ってみたんですけど……」

『ほんと、お父さん達も酷いよね。僕は昔から充分落ち着いてるのに……』

「いや、そうでもないだろ。『トキワのもり』で一緒に遊んでた時、走り回るのに夢中になってうっかりスピアーの巣にぶつかって、軽く追いかけて回された事だってあったし、家の中を駆け回って皿だって何回も割ってたしな」

『うつ……ひ、否定できない……』

「まあ、そんな風にロイとも色々な事を経験して、ロイもピチューからピカチュウに進化して、俺達が出会ってから二年が経った頃、いつものように『トキワのもり』で遊んでいた時、ロイの父親から呼び出されたんです。

そして、何かなと思いがらついていくと、そこにはロイの母親もいて、その事を不

思議に思っていると、ロイの父親からもう俺も旅に出られる歳になったから、旅に出るつもりなのかと訊かれて、俺がそうだと答えるとロイの父親が言い始めたのがさっきの約束だったんです」

『旅に出るのはイクトにとつても僕にとつてももちろん良い事だけど、旅をするだけなら何も意味はない。だから、旅をするからには今よりもつと成長出来るように色々な事を経験して、誰にでも誇れるような自分になれ。そして、旅を終えた暁には、その姿を自分達に見せに来い。これが僕達がお父さん達と交わした約束なんだ』

「そっか……」

「だから、俺達は旅を通じてもつと成長して、ポケモンリーグに挑戦して、その上で優勝をする。そして、ロイの両親に成長出来た姿を見せに行く。それが俺達の今のところの最終目標かな」

『そして、その時にはお父さんを絶対に倒してやるんだ！　こんなに強くなったんだって証明するためにね！』

ロイが拳を軽く握りながら言うと、その姿にシアとラピスは笑みを浮かべた。

「……うん、イクト君達なら絶対に出来るよ」

『うんうん！　あそこまでスゴいバトルが出来るんだもんね！』

「シア、ラピス……ああ、ありがとうな」

『その期待を裏切らないように精いっぱい頑張るよ!』

シア達の言葉にイクト達が笑みを浮かべながら答えていると、その様子にリアは嬉しそうに頷き、イクトとシアの肩をポンと叩きながら声をかけた。

「さて……それじゃあその第一歩として、まずは『ロンドジム』へ行こうか。私が予め連絡はしておいたから、ジムリーダーも待ちかねているだろうし」

「はい!」

「うん!」

『はい!』

そして、イクト達が再び歩き始めると同時に、イクトの家の屋根の上に立っていたポケモンはスツと飛び立ち、イクト達の後を追っていった。

歩く事数分、「着いたよ」というリアの声でイクト達は『ロンドジム』の前で足を止めた。すると、「よう、お前さん達」という声が建物の陰から聞こえ、そちらにイクト達が視線を向けると、楽しそうな笑みを浮かべたアーサーとシャロが姿を現した。

「おはようございます、アーサーさん、シャロ」

「おう、おはようさん」

『おはよう、みんな。今日は絶好のジム戦日和だね』

「ふふ……実はさつき、私も同じ事を言ってたよ、シャロ」

『へえ、そうだったんだね。どんな事でも気が合うっていうのはやっぱりとても嬉しい物だね』

「ふふ、そうだね。ところで、アーサーさん達はいつ『ロンドジム』に着いたんですか？」  
「ん？ ああ、ついさつきだ。正直、俺達の方が後なんじゃないかと思ってたんだが……もしかして何かあったのか？」

「あ、はい。実は……」

そして、イクトが謎のポケモンの存在について話すと、アーサーはとても興味深そうな様子を見せた。

「なるほどな……相棒、そのポケモンがまだ近くにいるか何となくでもわかりそうか？」  
『……すまないね、ボス。話を聞きながらやってはみたんだけど、どうやら僕でも気配を感じとる事は出来ないみたいなんだ……』

「そうか……まあ、それなら仕方ねえさ。シャロでもわからねえとなると、本当に何らかの機械を使うくらいしねえとわかりそうもないからな」

申し訳なさそうな様子のシャロの頭をアーサーが撫でていると、イクトは少し不思議そうに小首を傾げながらアーサーに話しかけた。

「アーサーさん、どうしてシャロに気配を感じ取れるかどうか訊いたんですか？」

「……ああ、それか。実はウチのシャロは、結構周囲の気配には敏感で、結構頭も切れる方だから、何か困った事があつたり新製品についてのアイデアに詰まつたりしたらシャロに頼るようにしてるんだよ。」

もつとも、俺はシアのようにシャロの言葉はわからねえから、表情や声の調子なんかから大体判断してるんだが……イクトみてえに百発百中とまではいかなくとも俺だつて結構当てられるんだぜ？」

『まあ、僕達もこう見えて長い付き合いだからね。ボスが僕の言いたい事を感じ取つてくれてるように、僕だつてボスの考えや気持ちはそれなりにわかつてるよ。』

仕事がうまく行つてないのかなとか何か良い事があつたのかなとか後は……まただらしなくソファに寝転がつてるなとか』

「そうそ——つて、だらしなくつてのは余計だし、そんなの誰でもわかるだろ！」

そう言いながらアーサーがシャロのパイプを取ると、シャロは途端に気弱モードへと変わった。

『はうう……ボス、ゴメン。だから、早くパイプを返してよお……』

「……はあ、まತ್ತたく……ほらよ」

『う、うん……』

オドオドとしながらパイプを受けとり、ゆっくりと啜えた瞬間、シャロは先程までの様子とは打って変わって、とても落ち着き払った様子を見せた。

『ふう……また情けない姿を見せてしまったね、みんな』

『あ、うん……それは良いんだけど……』

『ほんと、すぐに性格が変わるよね……』

『ふふ、このパイプは僕の性格チェンジのスイッチだからね。ところで……ボス、さっきのイクトの話に出てきたポケモンについてちよつと思ひ当たるポケモンがいるから、聞いてもらっても良いかな？』

「へえ……それはスゴいが、お前さんが考えてるのはどんなポケモンなんだ？」

『それはね……セレビィだよ』

その瞬間、イクトとロイを除いた全員の顔に驚きの色が浮かび、その様子にイクトとロイは揃って首を傾げた。

「セレビィって……たしか『ジョウト地方』の幻のポケモンで、『ときわたり』が出来るんだつたよな？」

『そうさ。けれど、この『イリス地方』にもセレビィにまつわる伝説が残っていて、昔一人のトレーナーがセレビィを見たという話をした事がきっかけで、一時期そのセレビィを求めて多くのトレーナーが『イリス地方』を訪れたらしいよ』

「へえ、そうだったのか。でも、どうしてそのポケモンがセレビィだって思ったんだ？」  
『そうだね……強いて言うなら、そのポケモンはテレパシーが使えるという事、そして『イリス地方』のセレビィは決まったすみかを持っていないと言われている事。この二つが理由だね』

『決まったすみかを持っていない……？』

『うん。昔からセレビィの目撃談は多いみたいだけど、目撃されている場所は結構バラバラで、その事からセレビィは決まったすみかを持たず、各地を飛び回りながら興味を惹かれる物を探していると研究者の間では言われているみたいだよ』

「なるほど……でも、よくそんな事知ってたな？」

イクトが感心した様子で言うと、シャロは胸を張りながらそれに答えた。

『ふふ……ボスには昔から色々な物を読ませてもらっていたからね。この知識もその中の一つというわけさ』

「そっか……」

『まあ、セレビィであると確定したわけでは無いけれど、僕はそのポケモンがセレビィだという説を推すかな。』

他のポケモンの可能性ももちろんあるけれど、まるでイクトの力を試そうとするかのような言動をしていた事も考えるなら、それはとても力の強いポケモン——少なくとも

その辺の野生のポケモンではないポケモンという事になるからね」

『なるほどね……でも、もしセレビィだとしたらどうしてイクトの力を試そうだなんて思っただらうね』

『さあ……そこまではわからないけれど、もしかしたら昨日のイクト達のバトルを観て、イクト達の戦い方やあの『能力』に興味を持ったのかもしれないよ。僕達だってあんな風に『メロメロ』が解けたのを見たのは初めてだったから。』

そして、今から行うジム戦でイクト達の力を試し、その結果次第ではイクト達と接触を図ろうと考えているのかもしれないね。そうじゃなければ、わざわざ力を試そうとするかのような言動をする必要もないし、そもそももう既にどこかへいなくなっているだらうからね』

シャロの話にその場にいた全員が納得顔で頷いていたその時、「あ、いたいた！」と嬉しそうな声が聞こえ、イクト達は揃ってそちらに視線を向けた。

すると、いつもの白衣姿のロツカ博士がこちらに向けて歩いてくるのが見え、リアは少し驚きながらもロツカ博士に話しかけた。

「おはようございます、ロツカ博士。もしかして、イクト君のジム戦を見にいらしたんですか？」

「ええ。新人トレーナーが初めてのジム戦に挑戦するところを見られる機会なんて滅多

に無いし、昨日のバトルみたいに今まで見た事がないような事も起きるかもしれないね」

「あはは……ご期待に添えるように頑張りますね」

「うふふ……ところで、さっき何か話していたようだったけど、何を話していたの？」

「えっと、それは……」

イクトがセレビィだと思われる謎のポケモンの事について話すと、ロツカ博士は一瞬驚いた様子を見せた後、目をキラキラと輝かせながら興奮気味にイクトに質問を始めた。

「ねえ、そのポケモンのテレパシーの声ってどんな感じだったの!？」

「え、えっと……落ち着いていて静かな感じでしたけど、どこか幼さみたいな物を感じた気がします」

「なるほどなるほど! それで、そのポケモンからのテレパシーでの呼び掛けってそれからは何かあった!？」

「いや、特には……ただ、力を見ると言うからには、たぶんまだこの近くにいるんじゃないかと——」

「ほんと!?! どこにいそうとか気配を感じるとかはある!?!」

「え、えーと……」

ロツカ博士のあまりの気迫にイクトが押されていると、「博士」とリアは少し呆れた様子でロツカ博士の肩に手を置き、それに対してロツカ博士が振り向くと、リアはその表情のまま首を横に振った。

「ダメですよ、博士。そのポケモンが気になるのはわかりますけど、イクト君は今からジム戦なのであまり質問責めにしなくてください」

「あ……そ、そうよね。私ったら、また暴走しちゃってたわ……」

「ほんとですよ、博士。ポケモンの事で気になる点があると、今みたいに暴走しちゃうんですから、少しは気をつけてくださいね」

「……ええ、わかったわ」

リアからの注意にシユンとしながら答えると、ロツカ博士はイクトへと向き直り、深々と頭を下げた。

「ごめんなさい、イクト君。ジム戦前なのにぐいぐいと質問責めにしてしまって……」

「いえ、気にしないでください。ビックリはしましたが、そのポケモンが気になるのは俺も同じですから」

「イクト君……ありがとう」

「どういたしまして。それにしても……あんなロツカ博士を見たのは初めてだったので、本当にビックリしましたよ」

「あはは……面目無いわ。リアちゃんが言ったように、私はポケモンの事で気になる点があると、今みたいに暴走しちゃうところがあつて、一番酷い時は食事や睡眠まで忘れちゃうのよ」

「食事や睡眠までつて……」

『そんな事してたら、いつか本当に倒れちゃいますよ?』

ロイが心配そうな表情を浮かべながら言うと、ロツカ博士はため息をつきながら答えた。

「そうなのよね……でも、ポケモンについての謎は常に増えていくし、時間は限られているから、一番良いのはやっぱりイクト君やリアちゃんのようなポケモントレーナーに旅の中で色々な事を報せてもらう事なのよね。」

実際、リアちゃんから教えてもらった事で、論文を書く事が出来た事例が幾つもあるわけだし……」

「あ……たしかにありましたね。でも、これからはイクト君やシア、アーサーさんにも手伝ってもらえるわけですし、あまり無理はしないでくださいいね?」

「ええ、そうさせてもらうわ。ロイの言う通り、熱中しすぎて倒れてしまったら、色々な人に迷惑や心配をかけてしまうものね」

「その通りです。さてと……それじゃあそろそろ中に入りましょうか」

そのリアの言葉に全員が頷いた後、イクト達は『ロンドジム』の入り口の自動ドアを  
通って中へと入った。すると、そこには数人の男女の姿があり、その中にいた灰色の  
シャツに青のジーンズ姿の黒のポニーテールの女性はリアの顔を見ると、顔をぱあつと  
輝かせた。

「リア、待ってたわ。ずいぶん遅かったけど何かあったの？」

「ううん、ちよつと入り口の前で話をしていただけだよ、ルキア」

「そう……それで、そっちのピカチュウを連れた彼が、今回の挑戦者のイクト君だっけ  
？」

「あ、はい。『カントー地方』の『マサラタウン』出身のイクトです。それで、こっちは  
相棒のピカチュウのロイです。今回はよろしくお願いします！」

『よろしくお願いします！』

「ええ、こちらこそよろしくね。私はルキア、この『ロンドジム』のジムリーダーで、リ  
アとは小さい頃からの友人なの」

「だから、ルキアはシアの『能力』の事もしつかりとわかってくれてるし、ラピスをプレ  
ゼントしようとした時も色々相談に乗ってくれたんだ」

リアが嬉しそうな笑みを浮かべながら言うと、ルキアはシアに視線を向けながら優し  
い笑みを浮かべた。

「ふふっ……シアちゃんは私にとっても妹みたいな物だし、それくらいは当然でしょ？」  
「そっかあ……ねえ、それならもう一人妹が欲しくない？」

「貴女みたいな妹はお断りよ、リア。一緒に旅をしていた時、色々苦労させられたもの」  
「それは残念。さてと……ルキア、貴女の友達として一つ忠告しておくけど、イクト君は貴女が思っているよりも強いよ」

「へえ……貴女がそこまで言うなんてね。何か理由でもあるの？」

興味深そうな様子でルキアが問いかけると、リアはにやりと笑いながらそれに答え  
た。

「そうだね……強いて言うなら、お互いに強い信頼関係で結ばれているからかな」

「強い信頼関係……」

「そう。ポケモン達の様子に注意を向けたり、その時その時にあった行動を考えたりしながらもポケモン達のポテンシャルや練習で培ってきた技術を信じてそれを戦術に組み込むというスタイル。それがイクト君達の戦い方なんだよ」

「なるほど……」

「昨日も前にそういう特訓をしたからという理由で、特に指示を出さずにラピスの『スピードスター』をギリギリまで引き付けてから避け、それをラピスに当てるなんていうテクニクを見せてもらったし、新人トレーナーだと思つて油断していると痛い目に遭

うかもよ?」

「ふふ、たしかにそうかもね。でも、私だってこの『 Rondodjium 』のジムリーダーだもの。そう簡単に負けるつもりはないわ。一応、これでもリアと一緒にポケモンリーグに出場した経験もあるしね」

ウインクをしながらルキアが言うと、イクトはリアを見ながら驚きの表情を浮かべた。

「えっ……リアさんもポケモンリーグに出場していたんですか!？」

「うん、一度だけね。それにしても……あの時は、スゴくレベルが高かったよね」

「まあね。それでも私達はなんとか勝ち上がり、ベスト8までは来たけど、あのトレーナーには敵わなかったのよね。あの仮面を被ったいけないトレーナーには……」

「仮面を被ったトレーナー……ですか?」

「ええ。なんでも目立つのがあまり好きじゃないからって、ポケモンリーグの本部に直接話をして、名前まで偽名にして出場したトレーナーがいたのよ。ねえ、リア?」

「あ、あー……たしかにいたね。だから、電光掲示板に映す顔写真すらその仮面のままで、結局優勝しちゃったんだよね、その人」

「そんな人が……でも、その人はどうしてそんな事が出来たんですか?」

そのイクトの問いかけにルキアは少し表情を暗くしながら答えた。

「……実は、そのポケモンリーグがあつた年にちよつとした事件が起きてたのよ。その事件は『R事件』と言われていて、君がいた『カントー地方』から流れてきた『ロケット団』という組織の残党が起こした事件なの」

『ロケット団』が……でも、その事件は解決したんですよね？」

「ええ、もちろん。それで、そのトレーナーが事件の解決に一役買ってたから、ポケモンリーグ本部もその要望を叶えたらしいわ。そうじゃなきゃ、流石に一トレーナーの要望なんて聞いてもらえるわけないもの」

「そうだよね……まあ、結局その人の素顔や本名はポケモンリーグの本部やルキアみたいなジムリーダーくらいしか知らないって事になつたし、イクト君達が出た時に出会つてもたぶんその人だつてわからないと思うけどね」

「そうね。さてと……それじゃあそろそろジム戦を始めましょうか。このまま話していても時間が過ぎるだけだからね」

「あ、はい！ よろしくお願ひしますー！」

「ええ、よろしくね。それじゃあ貴方はこのまま私についてきて、リア達はジムトレーナーの案内に従つて観客席まで行つてちょうだい」

「はい」

「はいはい」

ルキアの指示にイクトとリアが返事をした後、リア達は近くにいたジムトレーナーの後に続いて観客席へ向けて歩き出し、イクトはルキアと共にバトルフィールドへ向けて歩き出した。

そして、自動ドアをくぐり、薄暗く長い廊下を緊張しながらこつこつと足音を立てて歩いていたその時、「ねえ」とルキアから声をかけられ、イクトがびくりと体を震わせていると、ルキアはクスリと笑ってからイクトに話しかけた。

「ふふつ、そんなに緊張しなくて良いわよ。ところで……さつき、リアがジムの前で話をしていたって言うたけど、何の話をしていたの？」

「えっと……実は、ここに来る前に謎のポケモンから『力を見せてもらおうぞ』ってテレパシーが送られてきて、その正体について少し話し合っていたんです」

「謎のポケモン？」

「はい。因みに、アーサーさんのシャロはそれはセレビィじゃないかって言っていましたよ」

「へえ……それだったら、本当にスゴいわよ。『イリス地方』にはセレビィを見たくて仕方ないっていう人が多いから、もし本当にセレビィなら一緒に見たいっていう人が大勢集まるわよ」

「そんなに……ですか」

「まあね。セレビィにまつわる伝説が『イリス地方』にあるのもそうだし、セレビィ自体が幻のポケモンなのもそうだけど、『イリス地方』のセレビィは色違いだっという話だからね」

「色違いのセレビィ……」

「そうよ——つと、そろそろ着くわよ。私達がこれから戦う場所、『 Rondジム』のバトルフィールドに」

その言葉を聞き、イクト達が前方に目を向けた瞬間、目の前が光に包まれ、イクト達は顔の前に手を翳して庇かきして庇ひかし作りながら歩を進めた。

そして光の中を抜けると、四方を鉄板の壁で囲まれ、岩や鉄塊などの障害物が設置された地面が広がるバトルフィールドの光景が目に入ってきた。

「ここが『 Rondジム』のバトルフィールド……鋼タイプのジムだから、四方を鉄板で囲んでいるんですね」

「そんなところね。さてと……それじゃあそろそろジムバトルを始めましょうか？

チャレンジャーのイクト君？」

「はい！ ジム戦、よろしくお願いします！」

「ええ、よろしくね」

ペコリと頭を下げながら言うイクトに対して、ルキアはにこつと笑いながら頷いて答

えると、ジムの奥へ向けてゆっくりと歩いていった。

そして、イクト達が自身の立ち位置に着くと、審判役のジムトレーナーは両者をゆっくりと見回しながら声を張り上げた。

「それではこれより、チャレンジャーイクトとジムリーダーキアによるジム戦を始めます。使用ポケモンは二体、どちらかが先に全て戦闘不能になった時点でバトルは終了とします。尚、交代はチャレンジャーにのみ認められます。両者とも準備はよろしいですか？」

「はい！」

「ええ」

「わかりました」

ジムトレーナーは頷きながら答えると、両手に持った旗を上へと勢い良く振り上げながら声を張り上げた。

「それでは……バトル、開始！」

## 第4話 VS ロンドジム! 固き鋼鉄の意志

ジムトレーナーの声を聞いた後、ルキアは落ち着いた様子でモンスターボールを一つ手に取った。

「さあ、行つてきなさい! ギアル!」

そう言うと同時にモンスターボールを投げ上げると、モンスターボールの中から顔の付いた歯車が二つ組み合わさったような姿のポケモンが現れ、その姿を見ながらイクトはベルトに付けていたモンスターボールを一つ手に取った。

「最初はギアルか……だったら、こっちは! 頼んだぞ、レド!」

そう言いながら放り上げられたモンスターボールからレドが姿を現すと、ルキアは「へえ」と少し驚いた様子で声を上げた。

「そのヒトカゲ……たしかロツカ博士が保護していた色違いの子よね?」

「はい、そうです」

「……やつぱりね。その子、ロツカ博士が保護したって聞いた時にすぐに会いに行つて、それから何度かわかり合おうとしてみただけど、全然無理だったのよね。でも、どうやら良いトレーナーに出会えたみたいで本当に良かったわ」

「ルキアさん……ありがとうございます」

「どういたしまして。さあ、先攻は譲るから、どこからでもかかってきなさい」

「はい！ よし……レド、まずは『りゅうのまい』だ！」

「カゲ！」

イクトの指示に従って、レドが神秘的な舞いを始めると、その様子にルキアは「へえ……」と感心したように声を上げた。

「その子、中々良い技を持つてるじゃない。けど、舞ってる余裕なんてあるかしらね？」

ギアル、ヒトカゲに『チャージビーム』！

「ギア」

ギアルは静かに答えると、体を黄色に光らせながらレドへ向けて電撃を撃ちだし、イクトはそれを見ながら落ち着いた様子でレドに指示を出した。

「レド、『かみなりパンチ』で迎えて！」

「カゲ！」

イクトからの指示に返事をすると、レドは拳に雷を纏わせながら向かってくる『チャージビーム』を注視し、目の前まで近付いた瞬間に拳を力強く振り抜いた。

そして、『かみなりパンチ』が『チャージビーム』を消し去ると、ルキアは「あら……」と少し驚いたような声を上げた。

『りゆうのまい』で威力を上げているとはいえ、私のギアルの『チャージビーム』をいとも簡単に消し去るとは……その子、だいぶ鍛えられているのね」

「はい! こいつの、レドの掲げる目標のために精一杯努力を重ねてきましたから!」

「なるほどね。でも、これはどうかしら? ギアル、『ギアチェンジ』!」

「ギア!」

すると、ギアルは赤いオーラを纏いながら自身の歯車を勢い良く回しだし、イクトはその様子を見ながら歯をギリツと鳴らした。

『ギアチェンジ』……! 自分の素早さを上げる上に物理的な攻撃力まで上げる技か……!」

「その通りよ。そして、さっきの『チャージビーム』の効果で私のギアルは特殊的な攻撃力も上がってる状態。本来、ギアルはかなりスピードが遅いポケモンだけれど、この子は『ようき』な性格な上にこの『ギアチェンジ』を覚えている。つまり、その欠点すらも乗り越えているわけ」

「くっ……けど、タイプ相性的な有利不利は変わらな——」

「ええ、そうね。だからこそこの技もあるのよ。『かげぶんしん』!」

「ギア!」

返事をすると同時に、ギアルの横に同じ姿をした分身が幾つも現れると、その光景に

レドは困惑した様子を見せた。

「カ、カゲ……!?!」

「惑わされるな、レド! 分身に注意しながら本体を見つけるんだ!」

「カ、カゲ……!?!」

困惑しながらもイクトの指示に返事をし、レドがギアルの本体を探ろうとしたその時、ルキアはニヤリと笑いながら指をパチツと鳴らした。

すると、ギアル達は『ギアチェンジ』で上がったスピードを活かしながらバトルフィールド中を縦横無尽に動き回り始めた。

「カゲ!?!」

「何!?!」

「ふふっ、驚いた? ギアルには『かげぶんしん』を使っただ後に指を鳴らしたらこうやって動き回るように予め指示を出してあるのよ。さあ、どれが本物かわかるかしら?」

「くっ……!?!」

バトルフィールド中を飛び回る複数のギアルの姿にイクトとレドが目を向ける中、ルキアはニヤリと笑いながらギアルに指示を出した。

「ギアル、もう一度『ギアチェンジ』!」

「アル!」

その指示に返事をすると同時に、ギアル達は再び自身の歯車を勢い良く回転させ、更にステータスを上昇させると、その状況にイクトは焦った様子を見せた。

「このままじゃまずい……! でも、いったいどうしたら……!?!」

焦りと困惑、二つの感情がイクトの中でぐるぐると回り出す中、ルキアは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「悩んでいる暇は無いわよ、チャレンジジャー。ギアル、『ギアソーサー』!」

「ギアー!」

大声で返事をすると同時に、ギアル達は、自分と噛み合っているもう一つの体である歯車をレドへと投げた。

そして、それに対してイクトはレドに避けるように指示を出そうとしたが、指示を出すよりも先に歯車がレドに命中し、レドは苦しそうな声を上げた。

「カゲ……!」

「レド!」

レドの体が傷つき、静かに膝をつく中、歯車はブーメランのようにギアルへ戻ると、再びギアル自身と噛み合い、静かに回り出した。

そして、ギアル達が四方八方からイクトとレドを見つめる中、ルキアは余裕綽々といった様子でイクトに話しかけた。

「ふふっ、どう？　これがジムリーダーとそのポケモンの実力。貴方達が越えなければならぬ壁の高さよ」

「くっ……！」

「まあ、今のは効果が今一つの技だったから、まだダメージは少ないでしょうけど、このままじゃその子だけじゃなく、もう一匹のポケモンすらも簡単に倒れる事になるわね」  
クスクスと笑いながら言うルキアの姿に、イクトは悔しさを覚えながら必死になつて現状の打開策を考え始めた。

そして、先程のとある光景を思い出したその時、「……そうか！」とイクトは何かを思いついた様子で声を上げ、闘志に満ちた視線をレドに向けた。

「レド、まずは『りゅうのまい』！」

「カゲー！」

イクトの指示に従つてレドが再び『りゅうのまい』を行う中、ルキアは訝いぶかしげな視線をイクトに向けた。

「何を考えているのかわからないけど、いくら攻撃力と素早さを上げても、当たらないと意味は無いわよ？」

「ええ、もちろんわかつてます」

「……そう。それじゃあギアル、もう一度『ギアチェンジ』！」

「ギアー!」

ルキアの指示に従ってギアルが再び『ギアチェンジ』を行う姿を見ながらイクトはニヤリと笑った後、『りゆうのまい』を終えたレドに指示を出した。

「レド、目を瞑っておいてくれるか?」

「カゲ!?!」

「……はっ?」

「ええっ!?!」

イクトの言葉にレドやルキア、そして観客席にいるシアが驚きの声を上げる中、イクトはニツと笑いながら再びレドに話しかけた。

「大丈夫だ、レド。俺を信じてくれ」

「カゲ……」

レドは少し不安そうな様子を見せたものの、すぐに覚悟を決めたような表情で力強く頷くと、静かに目を閉じた。

そして、それに対してイクトが嬉しそうに「……ありがとう」と呟いていると、ルキアはわけがわからないといった様子でイクトに声をかけた。

「……リアが認めるトレーナーである貴方の事だから、やけっぱちになってそんな事を言ったとは思えないけど、本当に何を考えてるのかさっぱりだわ」

「……ふふ、そうだと思います。でも、これが俺の思いついたギアル攻略の秘策です！」  
「……なら、それがどのようなものか見せてもらおうじゃない！ ギアル、『ギアソーサー』！」

「アルー！」

ルキアの指示に従ってギアルが『ギアソーサー』を放つ中、イクトはレド同様に静かに目を瞑りながら指示を出した。

「レド、そのまま上にジャンプだ！」

「カゲー！」

その指示と同時にレドは真上に跳び上がると、『ギアソーサー』はレドがいた場所の地面を抉り、そのままギアルの元へと戻り、ガチリと噛み合った。

そして、レドが着地する音を聞くと同時にイクトは目を開けると、『ギアソーサー』が当たった箇所を見て、「やっぱりな」と言いながらニヤリと笑い、レドに声をかけた。

「レド、目を瞑ったまま聞いてほしいんだけど、今の『ギアソーサー』で何か気付いた事はないか？」

「カゲ……？！」

イクトからの問いかけにレドが目を瞑ったまま首を傾げていたその時、「……カゲ」と何かに気付いた様子で声を上げると、イクトはニヤリと笑った。

「流石だ、レド。となれば……後はもうわかるな?」

「カゲ!」

「よし……それなら、ここから反撃していくぞ、レド!」

「カゲカ!」

目を瞑りながらレドが大きく頷く中、ルキアはますますわけがわからないといった様子を見せた。

「さっきの『ギアソーサー』で何かを掴んだようだけど、さっき言っていた秘策はどうしたのかしら?」

「それは今からお見せしますよ、ルキアさん!」

「そう……なら、今度こそ見せてもらおうじゃない! ギアル、『ギアソーサー』!」

「ギア!」

ルキアの指示に従って再びギアルが『ギアソーサー』を放ち、歯車がレドまであと少しという距離まで迫った瞬間、イクトは自信満々な様子でレドに指示を出した。

「レド、『かみなりパンチ』で歯車を受け止めろ!」

「カゲ!」

その指示と同時に、レドは目を閉じたまま『かみなりパンチ』で歯車を受け止める。レドは歯車をガツチリと掴みながら静かに目を開け、勝ち誇ったような笑みを浮か

べた。

そして、続けて飛んできた分身達の歯車を上に跳んで避けると、ギアルは次第に苦しそうな表情を浮かべ、それと同時に分身達は次々と消えていった。

「ギアル！」

「よし……レド、歯車を掴んだままギアルへ向かって走るんだ！」

「カゲ！」

イクトの指示に従ってレドが苦しそうな表情を浮かべるギアルへ向けて走り出すと、ルキアは焦った様子でギアルに指示を出した。

「ギアル！ その場から待避！」

「させませんよ！ レド、ギアルに『ほのおのキバ』！」

「カゲ！」

そして、ギアルが逃げるより先にレドはギアルの真下へと辿り着き、そのまま真上に跳び上がると、炎を纏った牙をギアルへと突き立て、そのダメージでギアルは更に苦しそうな表情を浮かべた。

「ギア……！」

「ギアル！」

バトルフィールド上にルキアの声が響き渡る中、レドがギアルから牙を離すと、ギア

ルはフラフラとしながらゆっくりと落ちだし、完全にバトルフィールド上に落ちたのを確認すると、レドは持っていた歯車をギアルに噛み合わせた。

そして、レドがゆっくりと離れていくのを見送ると、審判役のジムトレーナーは急いでギアルへと近付き、ギアルが目を回して瀕死状態になっているのを確認すると、イクト達の方へ旗を大きく振り上げた。

「ギアル、戦闘不能! ヒトカゲの勝ち!」

「よし……! よくやったぞ、レド!」

「ピカピッカ!」

「カゲ!」

イクト達の嬉しそうな声にレドが親指を立てて応える中、ルキアは顔に悔しさを滲ませながらギアルのモンスターボールを取り、ギアルをモンスターボールへと戻した。

「お疲れ、ゆっくり休みなさい」

そう声をかけてから、モンスターボールをしまい終えると、ルキアは真剣な表情でイクトに話しかけた。

「イクト君、あの状況でどうやって本物を見極めたの?」

「それは……」

ルキアからの問いかけにイクトは自分の体のある場所をトントンと叩きながら答えた。

「音、そして地面ですよ」

「音と地面……？」

「はい。最初はしつかり気付いていなかったんですが、『ギアソーサー』を使われた時の事を思い出した時、分身達が一斉に歯車を投げってくるのに対して、本物だけはワントンポ早く歯車を投げているのに気付いたんです。

実際、二回目の『ギアソーサー』をレドに避けてもらった時、しつかりとそれを確認出来ましたし、地面の抉れ方にもそれが表れていましたしね」

「なるほど……だから、レドにも目を瞑らせたのね。目を瞑らせて視覚を遮断する事で、他の五感を鋭敏にするため、そして分身に惑わされないようにするため」

「その通りです。まあ、これはレドが俺の事を信じてくれなかったら成功しなかった作戦なので、本当にレドには感謝しています。次のギアルの放ってきた『ギアソーサー』を受け止めてくれた件も含めて」

「『ギアソーサー』……つまり、あれは『かげぶんしん』を消すだけじゃなく、確実にギアルに技を当てたかったから取った行動で間違いなかったのね」

ルキアが静かに目を閉じながら言うと、イクトは頷きながら答えた。

「はい。他の地方の図鑑には、ギアルは二つの体が噛み合って回転する事で、生きるためのエネルギーを作り出すと書いています。となれば、その歯車の片方を取ってしまえば、ギアルは普段の力を発揮出来ない上、分身を維持する事も出来ず、技を避ける事も出来ないと思っただけです。」

もつとも、これはポケモン固有の弱点を突いた事になるので、ギアルにはとても申し訳ない事をしたと思っと思っていますけどね……」

「ふふ……いいえ、それも立派な戦術よ。まあ、中にはそれを好まないトレーナーもいると思うけど、私は別にどうも思わないから安心しなさい」

「……ありがとうございます」

「どういたしまして。さて……それじゃ最後のポケモンを出しましょうか」

ルキアはベルトに付けていたモンスターボールを一つ手に取ると、それを天高く放つた。

「行きなさい、クチート!」

「クチート!」

後頭部に大顎を持つ小型のポケモン、クチートがモンスターボールから飛び出すと、ルキアは自信満々な様子を見せた。

「ギアルは倒されてしまったけれど、この子、クチートはそう簡単に倒されないわよ」

「はい、わかってます。けれど、俺達だって簡単には負けません！」

「カゲ！」

「ふふ、そうでしょうね。さあ……バトルを再開しましょうか！ クチート、『つるぎのまい』！」

「クチート！」

すると、クチートの周囲には青い光の剣が幾つも出現し、それが消えると同時にクチートは赤いオーラを纏い始めた。

「『つるぎのまい』……！」

「ふふ、その様子だと『つるぎのまい』の効果は知ってるようね。さあ、手負いのその子で『つるぎのまい』で攻撃力が上がったクチートの攻撃を受けたら流石に倒れちゃうんじゃない？」

「……たしかにそうかもしれないませんが、それなら攻撃を受けないように立ち回るだけです！」

「……まあ、たしかにね。でも、この子の前でそんな事が出来るかしら？ クチート、『あまいかおり』」

「クチート！」

クチートは大声で返事をする、大顎を大きく開けながらレドへと向けた。すると、

大顎から甘い香りが漏れだし、それがレドに届くと、レドの目はとろんとした物に変わった。

「レド……………」

「ふふ、この香りに魅了されて棒立ちになってるわね。『あまいかおり』は野生のポケモンを引き寄せるために使われる事が多いけれど、ちゃんとバトルで使おうとしたら結構有用な技なのよ。

さて、このまま攻めさせてもらおうかしら。クチート、『かみくだく』!」

「クチー!」

そして、クチートがレドへ向かって走り出す中、イクトは焦った様子でレドに指示を出した。

「避けづらくなったらなら受け止めるだけだ! レド、『かみなりパンチ』で迎えて!」

「…………カ、カゲ!」

イクトの指示を聞き、レドは慌てて首を横に振りながら気持ち切り替えると、向かってくるクチートを見ながら『かみなりパンチ』の準備を始めた。

そして、振り返りながら大顎を大きく開け、レドへ向けて大顎を勢い良く閉じようとした時、『かみなりパンチ』でそれを阻止した。

「カゲ……………」

「クチ……！」

「よし……なんとか受け止め——」

「ふふ、それはどうかしら？」

そのルキアの言葉が聞こえた瞬間、クチートの大顎は徐々に動き出すと、そのまま勢い良く閉まり、その衝撃でレドは背後に大きく吹き飛ばされた。

「カゲ……！」

「レド——」

「ピカッ——」

レドが吹き飛ばされた方へ視線を向けながらイクトとロイが声を上げ、上がっていた砂煙が消えていくと、そこには瀕死状態になっているレドの姿があり、審判役のジムトレーナーはそれを確認してからルキア達の方へ旗を大きく振り上げた。

「ヒトカゲ、戦闘不能。クチートの勝ち！」

「ふふ、お疲れ様、クチート」

「クチート！」

ルキアの声にクチートが嬉しそうに返事をする中、イクトはレドへと近付くと、モンスターボールを手にしながらスイツチを押しした。

「……お疲れ、レド。後は任せてくれ」

そして、レドがモンスターボールの中に戻ると、ルキアは笑みを浮かべながらイクトに声をかけた。

「イクト君、私の言葉の意味、わかったかしら？」

「……『ちからづく』ですよね？」

「ええ、大正解。このクチートの特性は『ちからづく』。攻撃技の追加効果の恩恵を受けられない代わりに威力を高める特性よ。それ故に戦略の幅は少し狭まっちゃうけど、相手の体力を一気に削りたい時や相手を押しきりたい時にはスゴく助かるのよね」

「くっ……!」

「さあ、そろそろ最後のポケモンを出してもらいましょうか。といっても、出てくるのはその子でしょうけどね」

そう言いながらルキアがロイに視線を向ける中、ロイはイクトを見ながら拳を軽く握った。

「ピカッ!」

「ロイ……ああ、そうだよな。この先、今みたいな状況なんていくらでもあるんだ。だつたら、乗り越えるまでだ!」

「ピカ、ピカッチュウ!」

「よし……やるぞ、ロイ!」

「ピカ！」

そして、ロイがバトルフィールドへ進み出ると、ルキアは楽しそうな笑みを浮かべた。「やっぱりそうだったわね。さて、その子がどんな戦いを見せてくれるのか楽しみにさせてもらおうかしら」

「ご期待には応えてみせますよ。ロイ、先手必勝だ！ 『ねこだまし』！」

「ピカ！」

イクトの指示に従い、ロイがクチートとの距離を瞬時に詰め、クチートの目の前でパシッと両手を打ち鳴らすと、クチートはガクツと膝を突いた。

「クチ……………」

「『ねこだまし』…………なるほど、中々良い技を持つてるじゃない。でも、貴方もわかってる通り、『ねこだまし』はもう使えない。そんな状態で勝てるのかしら？」

「たしかに不利かもしれないませんが、それは承知の上です！ ロイ、続けて『アイアンテール』！」

「ピカ！」

ロイは返事をした後、尻尾を銀色に変化させながら上へと跳躍し、落ちてくる速さを利用してながら『アイアンテール』をクチートに叩きつけた。

「ピッカ！」

「クチツ……!」

「クチート!」

『アイアンテール』を受けた衝撃でクチートが地面に叩きつけられると、ルキアの表情に少しだけ焦りの色が浮かんだ。

『『アイアンテール』……相手の防御力を下げられる鋼タイプの子。鋼／フェアリータイプのクチートの弱点ではないけど、受け続けて防御力を下げ続けられるのは厄介ね。おおよそ、その状況を活かす何か強力な技でも隠し持っているんでしようし!」

「……さあ、それはどうでしょうね」

「……まあ、良いわ。大体の予想はついているから。クチート、もう一度『つるぎのまゐ』」

「クチート!」

クチートが『つるぎのまゐ』を使い、更に攻撃力を上げると、イクトの顔に焦りの色が浮かんだ。

「マズイな……ただでさえ『ちからづく』があるのに、二回の『つるぎのまゐ』で攻撃力をかなり上げられてるから、攻撃を一回でもくらったらロイは倒されかねない……」

「それだけじゃなく、私のクチートにはまだ使っていない技もあるわよ。さあ、この状況を貴方達はどう乗り越える?」

「くっ……でも、このまま何もしないわけにはいかない！　ロイ、目の前に『アイアンテール』！」

「ピカ！」

ロイが頷きながら目の前の地面に向かって『アイアンテール』をすると、その衝撃で濃い砂煙が上がり、砂煙の向こうからルキアの声が聞こえてきた。

「なるほど……砂煙に隠れて攻撃を仕掛けてくるつもりね。けど、それくらいじゃあ妨害にはならないわ！　クチート、顎を振り回して砂煙を消しちやいなさい！」

「クチー！」

ルキアの指示に対して頷き、クチートが大顎を大きく振り回すと、周囲に立ち込める砂煙はゆつくりと消えていった。そして、砂煙が完全に消えたその時、イクトの目の前にロイがいない事に気付くと、ルキアとクチートは驚いた様子を見せた。

「なっ……ピカチュウがいない!?!」

「クチ!?!」

「……ロイはここですよ。ロイ、クチートに『アイアンテール』！」

「ピカ！」

いつの間にか上空まで跳び上がっていたロイが、先程と同じように降下の勢いを利用しながらクチートに向かって『アイアンテール』を繰り出そうとしたその時、ルキアは

ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「なるほどね……でも、それならこれをお見舞いしてあげるわ。クチート、『メタルバースト』!」

「クチート!」

降りてくるロイを見上げながらクチートが声を上げると、その体は徐々に銀色に染まっていった。そして、降下してきたロイの『アイアンテール』が命中した瞬間、ロイの体はイクトがいる方へ大きく飛ばされ、背後にある壁に強く激突した。

「ロイ! 大丈夫か!」

「ピ……ピカ……」

「……なんとか大丈夫みたいだな。けど、まさか『メタルバースト』まで持つてるなんて……!」

「あら、その様子だと『メタルバースト』がどんな技か知ってるみたいね」

「……『メタルバースト』は『カウンター』や『ミラーコート』のように相手の攻撃に対して反撃をする技。でも、『カウンター』と『ミラーコート』と違って、『メタルバースト』には種類による制限は無い……」

「そうね。物理技に対応する『カウンター』、特殊技に対応する『ミラーコート』とは違い、『メタルバースト』はその二つよりは与えられるダメージは少なくなるけど、物理で

も特殊でも対応できるし、鋼タイプの技だからタイプ相性の影響で無効にされる事もない。

こうしてジム戦をやっていると、たまに攻撃技ではあまりダメージを与えられない時やさつきみたいに視界を奪ってから攻撃をされる事があるの。だから、その時用にこの子には『メタルバースト』を覚えさせた。多くの相手に対して優位に立てるようにね」  
「くっ……！」

「この状況を確実に打開出来るポケモンはいるでしょうけど、そのピカチュウはどうかしらね？ このままだと『メタルバースト』の反射で倒れるか大人しく『かみくだく』で倒されるかの二択になるわよ」

ルキアがクスクスと笑いながら言い、それに対してイクトが悔しそうな表情を浮かべていたその時、ロイはイクトの隣まで歩いてくると、やる気に満ちた視線をイクトに向けた。

「ロイ……」

「ピカ！ ピカピカタッチュ！」

「……そうだな。こんなピンチくらいこれからいくらでもあるんだ。ここで諦めるわけにはいかないよな！」

「ピカッ！」

「よし……やるぞ、ロイ!」

「ピカッチュ!」

イクトとロイが頷き合う中、それを見ていたルキアは少し驚いたような表情を浮かべた。

「……驚いたわ。今までの挑戦者達はこの時点で結構諦めた様子を見せるのに、貴方達はまったく諦めるつもりがないのね」

「はい。ポケモンリーグでの優勝を目指す以上、これくらいのピンチは乗り越えられるようにするべきですし、ロイにも諦めるなって言われましたから」

「ロイにも……? イクト君、貴方もポケモンの言葉がわかるの?」

「いえ、俺にはポケモン達の言葉はわからないです。でも、ロイの気持ちなら鳴き声を聞いただけでバツチリわかります!」

「……なるほど。貴方とその子は本当に信頼しあっているのね。なら、その信頼関係で私達を倒せるか見せてもらおうかしら! クチート、『あまいかおり』!」

「クチート!」

クチートが返事をし、再び大顎を大きく開けてロイへ向けて『あまいかおり』を放ち始めると、イクトは周囲に目を向けながらロイに指示を出した。

「ロイ、今は回避に専念するぞ。クチートの動きに注意しながらバトルフィールド中を

走り回れ！」

「ピカ！」

イクトの指示に従ってロイがバトルフィールドを駆け回り始めると、ルキアは落ち着き払った様子でロイの動きに視線を向け始めた。

「スピードで攪乱しながら隙を窺うつもりね。でも、そんなのは想定内よ。クチート、バトルフィールド中に『あまいかおり』を漂わせなさい！」

「クチート！」

クチートは返事をする、大顎を大きく開けながらその場で回りだし、程なくバトルフィールドには大顎から放たれた『あまいかおり』が充満した。そして、ルキアとクチートがその中でロイの姿を見つけるために辺りを注意深く見回していたその時、岩と岩の間を移動しようするも『あまいかおり』の影響で動きが鈍っているロイを見つけ、ルキアはニヤリと笑った。

「見つけた。クチート、仕留めなさい。『かみくだく』！」

「クチート！」

ルキアの指示でクチートはロイに向かって走りだすと、勝負に終止符を打つべく大顎を大きく開けながら後ろを向いた。その瞬間、イクトは大声でロイに指示を出した。

「ロイ！ 横に避ける！」

「ピカッ!」

イクトの指示通りにロイが横に避けると、クチートの顎は空を切り、ルキアは一瞬悔しそうな表情を浮かべた。

「回避率を下げたはずなのに避けられたか……でも、今から距離を取るなんて出来ないし、このまま私達のか——」

その時、ルキアは目の前の光景に驚いた表情を浮かべた。

「なっ……ピカチュウがまた消えてる!?!」

その場にいるはずのロイの姿が無い事にルキアが驚き、顔に焦りの色が浮かび始める中、クチートも消えたロイを見つめるべく周囲を見回し始めた。そして、ルキアもロイを見つめるべく周囲を見回していたその時、クチートの顎の下部から雷の形の何かが生え、ヒョコッと出ているのが見え、ルキアはハツとした様子を見せた。

「まず……! クチート、顎から——」

「やらせませんよ! ロイ、そのままクチートに『アイアンテール』!」

「ピカッ!」

クチートの背後——顎の下から返事をする、ロイは『アイアンテール』をクチートに何度も振るうと、そのダメージでクチートはその場に膝をついた。

「クチート!」

「これで終わりです。ロイ、『ボルテッカー』！」  
「ピッカー！」

そして、大顎から飛び降りたロイが『ボルテッカー』でクチートにぶつかると、クチートは途中に置かれていた岩を砕きながら壁に向かって飛ばされ、そのまま激しく壁と激突すると、力なく地面へと落下した。

「クチート……！」

ルキアがクチートに声をかけるもクチートは項垂れながら目を回しており、審判役のジムトレーナーはその様子を確認すると、イクトの方へ旗を高く振り上げた。

「クチート、戦闘不能！ ピカチュウの勝ち！ よって勝者、『マサラタウン』のイクト  
！」

その声を聞くと、イクトは信じられないといった表情を浮かべながらぼかーんと口を開けていた。

「勝った……俺達、勝てたんだな……！」

初のジムバトルでの勝利という事実にはイクトが嬉しさを感じていると、笑顔を浮かべたロイがイクトに向かって走ってくるのが見え、イクトはロイに向かって両手を差し出した。そして、ロイがイクトの両手に向かって飛び込むと、イクトはロイを優しく抱き締めながら微笑みかけた。

「ロイ、お疲れ! よく頑張ってくれたな!」

「ピカ! ピカ、ピカピカツチュ!」

「ははっ、ありがとうな。でも、この結果に満足せずにこれからも色々工夫しながら頑張っているぞ!」

「ピカッ!」

イクトの言葉にロイが拳を軽く握りながら答えていると、アーサー達と共に観客席から降りてきていたシアがイクト達に近付き、にこりと笑いながら声をかけた。

「お疲れ様、二人とも! すっごく良いバトルだったよ!」

「うん、ありがとう。けど、結構ギリギリではあったし、戦い方や技の組み合わせとかをロイやレド達と一緒にまだまだ考えていかないよ!」

「くく、その気持ちはわかるが、今は素直に喜んでおいて良いと思うぞ?」

「そうだよ、イクト君。それと、頑張ってくれたポケモン達を労うのも忘れずにね!」

「はい!」

アーサーとリアの言葉にイクトが返事をしていると、クチートをモンスターボールにしまい終えたルキアがゆつくりと近付いてくるのが見え、イクトはルキアに向かってペコリと頭を下げた。

「ルキアさん、ジム戦ありがとうございました!」

「こちらこそ良いバトルをありがとう。まさかクチートの大顎にロイが隠れてるとは思わなかったけど、いつの間にそんな指示を出していたの？」

「指示は出してないですよ。あれはロイが自分で考えてやってくれたんです」

「ロイが？」

「はい。さっきのように俺があまり指示を出せなそうな時には、相手や状況を見て自分で判断をするように頼んであるんです。なので、俺はロイがクチートの大顎に隠れてるのを見つけて、それに合わせた指示を出しただけです」

「なるほど……凶鑑のテキストを参考にしたりポケモンが自分の考えで行動したり、貴方達の戦い方は本当に面白いわね。ジムリーダーとしてすごく勉強になったわ。さて……それじゃあそろそろあれを渡しませうか」

そう言うと、ルキアはポケットから銀色に輝く四角いバッジと紺色のケースを取り出し、それをイクトに手渡した。

「はい、このジムを突破した証。メタルバッジとバッジケースよ」

「ありがとうございます、ルキアさん」

「どういたしまして。他のジムリーダー達も強いけれど、貴方達ならきつと勝てると思ってるわ。頑張ってるね」

「はい！」

イクトは元気よく返事をする、腰のベルトからレド達のボールを外し、次々とス  
イツチを押しした。そして、レド達がモンスターボールから出てくると、その光景にシア  
は首を傾げた。

「レド達を出してどうしたの?」

「せっかくだから、みんなで喜びを分かち合いたくてさ」

「くく、なるほど。お前さんらしい考え方で良いと思うぜ?」

「ありがとうございます。でもまずは……ロイ、レド、本当にお疲れ様。二人のおかげで  
バッジをゲット出来たよ。本当にありがとうな」

「ピカッ!」

「カゲ」

「そしてリイル、オルタ、今回はジム戦には参加させられなかったけど、次からはお前達  
にも頑張ってもらうかもしれないから、その時はよろしくな」

「ダネ」

「ゼニ!」

ロイとレド、そしてリイルとオルタがそれぞれ返事をした後、イクトは嬉しそうに頷  
いてから手の中にあるメタルバッジを指で掴み、天高く掲げた。

「よし……メタルバッジ、ゲットだぜ!」

「ピツピカチュウ！」

「カゲ！」

「ダネ！」

「ゼニゼニー！」

イクトの声に合わせてロイ達も喜びの声を上げた後、イクトがバツジケースにメタルバツジをしまっていると、ルキアは不思議そうな様子で辺りを見回した。

「それにしても……イクト君の力を見たいっていうポケモンはどこから見てるのかしらね？」

「たしかに……相棒、それらしい気配は感じるか？」

『……うん、入り口の方から強い気配を感じる。たぶんだけど、今こつちに向かつて向かってきているのがそのポケモンだよ』

「こつちに向かつてきてるって……え、それじゃあ——」

リアが驚いた顔をしながらバトルフィールドの入り口へ視線を向けたその時、自動ドアがゆつくりと開き、一匹のポケモンが静かに入ってきた。

「あれが……気配の主……」

「でも、あのポケモンはセレビイじゃないよね……？」

「うん。イクト君、君はあのポケモンが何かわかるんじゃないかな？」

「……はい。実際に見るのは初めてですけど、姿と名前は聞いた事があります。あのポケモンは——」

ポケモンがイクト達に視線を向けてくるのを見ながらイクトはその名前を口にした。「いでんしポケモン、ミュウツー」